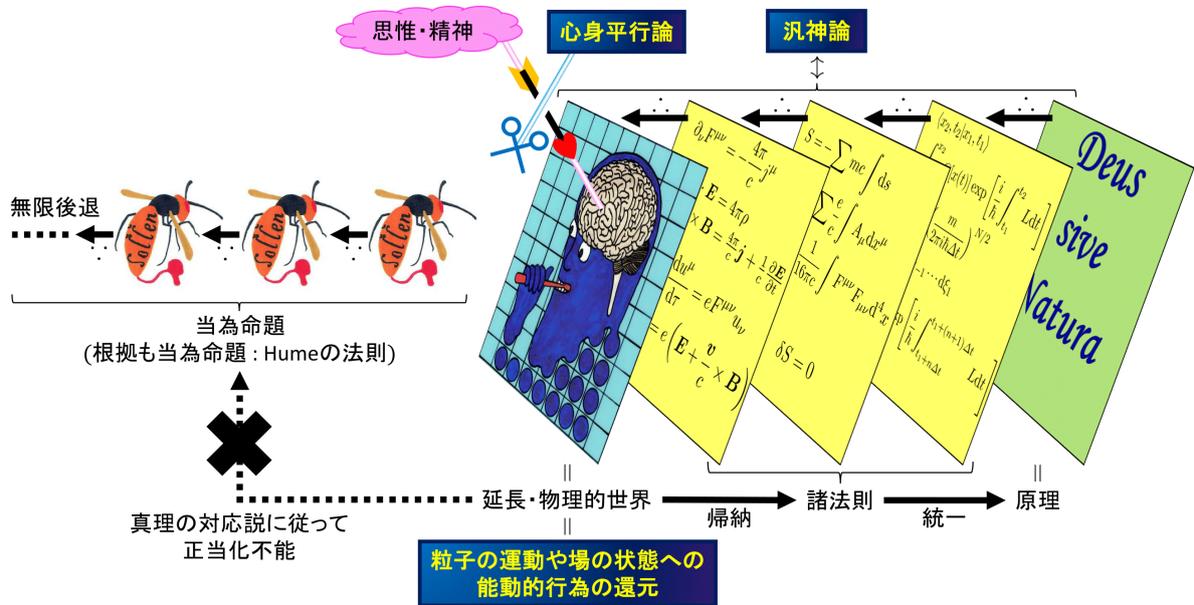


# Spinoza 描像

## 自由意志の否定・当為命題の虚構性



<http://everything-arises-from-the-principle-of-physics.com/preamble>

## 目次

1	Spinoza 描像	4
2	Spinoza 描像 (新自由主義的イデオロギーに対抗する哲学として)	7
2.1	資本主義・新自由主義のイデオロギー	7
2.2	自由意志の否定	10
2.3	当為命題の虚構性	10
2.4	Spinoza 哲学	11
2.5	ポスト資本主義	12
3	Spinoza 描像の図示	16
4	Spinoza 哲学	18
4.1	Spinoza の形而上学	18
4.2	自由意志の否定	19
4.3	Spinoza の形而上学 (詳細)	21
4.4	Spinoza 哲学と Spinoza 描像	23
5	自由意志の否定 (周辺議論)	24
5.1	「自由 ⇒ 責任」という因果関係への疑問	24
5.2	意志と自由意志	26
5.3	自由意志は要らないという幸せ	26
5.4	努力と才能	28
5.5	感情と理性	29
5.6	生物の能動性は自由意志ではない	29
5.7	運命と人生の意味——必然主義から見た『JIN-仁-』	30
5.8	「未来を分かっていたら変えられるはず」という人情について	31
5.9	量子力学と自由意志 (を巡る混乱について)	33
5.10	両立論的自由意志の不徹底	35
5.11	他行為可能性に欠けるもの：精神の作用	35
5.12	客観性・普遍性	36
5.13	人を説得すること	36
5.14	因果律	37
5.15	自由意志がピンと来ない人のために	38
5.16	魔法と自由意志	39
5.17	言葉遊び, レトリック	40
5.18	アクラシア (意志の弱さ) について	41
5.19	自由意志の否定は論理の問題ではなく, 世界観の提示を必要とするか	41
5.20	自由意志と行為	42

5.21	帰責と免責 . . . . .	42
5.22	病気の責任? . . . . .	43
5.23	自由意志という幻想の適用限界 . . . . .	45
5.24	山口尚『日本哲学の最前線』第二章について . . . . .	46
5.25	占星術とキリスト教の自由意志 . . . . .	49
6	「自由意志の否定」とは違った仕方	50
6.1	ポスト新自由主義を構想すること . . . . .	50
6.2	サンデル『実力も運のうち 能力主義は正義か?』自由意志否定論の文脈として . . . . .	51
6.3	Spinoza 描像の歴史 . . . . .	51
7	Hume の“法則”の適用例	53
8	Spinoza 描像に抵触する概念・表現	55
8.1	要素還元論に反する表現 . . . . .	55
8.2	自由意志を認めるような表現 . . . . .	56
8.3	出来事の不可避性に反する表現 . . . . .	57
8.4	Laplace の悪魔と未来からの逆算・無限小の可能性 . . . . .	57
8.5	Spinoza 描像に抵触するその他の概念・表現 . . . . .	57
8.6	非難 . . . . .	59
8.7	「やればできる」というトートロジー . . . . .	60
8.8	Adler 心理学における目的論 . . . . .	61
8.9	非自発的同意 . . . . .	62
8.10	社会的問題に関する意見 . . . . .	63
8.11	国語の理由説明問題 . . . . .	63
8.12	社会の「考える問題」はどうにでも考えられるため解けない件 . . . . .	64
8.13	「呪いの言葉」 . . . . .	65
9	新自由主義による「魂の包摂」	69
9.1	橋下徹の生み出すディストピア . . . . .	71
9.2	マインドセットをリセットする自由意志は存在しない . . . . .	71
9.3	人を動かすには?人を動かしているのは物理法則だ . . . . .	72
10	Spinoza 描像から見た就活	74
11	中動態——「する」vs「なる」,「すべき」vs「である」	79
11.1	ハイデッガーの退屈論, 國分の〈暇と退屈の倫理学〉 . . . . .	80
12	受験の正義をめぐって	82
12.1	教育が脱商品化されたら . . . . .	82
12.2	学問は競争と無縁の営みである . . . . .	85
12.3	算数についての備考 . . . . .	85

12.4	学問を続けるには研究者になるしかない？ . . . . .	86
12.5	受験をめぐる家庭内の問題 . . . . .	86
13	物理学と自由意志否定論 (形而上学)	87
13.1	科学的真理 . . . . .	87
13.2	物理学と自由意志否定論 (形而上学) . . . . .	90
13.3	物理の学習 . . . . .	98
14	脳・神経科学を正しく理解するための哲学	100

# 1 Spinoza 描像

本稿では自然科学 (とりわけ物理学) と相性が良い Spinoza の哲学について、科学との関係を整理しつつまとめる。また Spinoza 的な描像の主要な帰結・含意として、「自由意志の否定」と「当為命題の虚構性」の二点を簡潔に議論する (図 1 参照)。

Spinoza の思想はその代名詞と呼べる「神即自然」という標語に端的に表されている。ここで神とは世界の外部から世界に働きかける人格を持った存在ではなく、むしろこの世界そのものであり、それ故、神即自然と呼ばれる。そして Spinoza によれば、あらゆる事物は神の「現れ」であって、神の内なる必然性に従って生起しているとされる。このような考え方は汎神論と呼ばれ、少なくとも自然科学が対象とする物理的世界に関して言えば、万物は自然法則に従って振舞うという自然観と重なる。この限りで神の必然性とは、自然法則ないしその原理としての物理そのものと同一視し得る。(そしてこのことは私を含め、Spinoza に共鳴する一部の者にとって、間違いなく物理学理論を学ぶ一つの大きな原動力となってきた。) また人間を含め自然物は与えられた目的のために存在・活動するという考えを、Spinoza は偏見として退けている。この点もやはり、目的因よりもむしろ機械論的因果律による現象の理解を試みる自然科学的な姿勢に通じる：鳥は空を飛ぶために羽があるのではなく、羽があるから空を飛べるのである。さらに精神と物体は異質な存在であるため、その相互作用を考えることはできない。しかし我々は心と身体の状態に関連性があることを経験的に知っている。これは Spinoza 哲学において、それらが同一の神の異なる二つの側面を表しているからであると説明される。このように精神的な出来事と身体的 (物理的) な出来事は互いに対応しているけれども、それらはあくまで独立に進行するという説は心身平行論と呼ばれる。これは物理現象がそれ自体で閉じており、そこに精神の作用が介

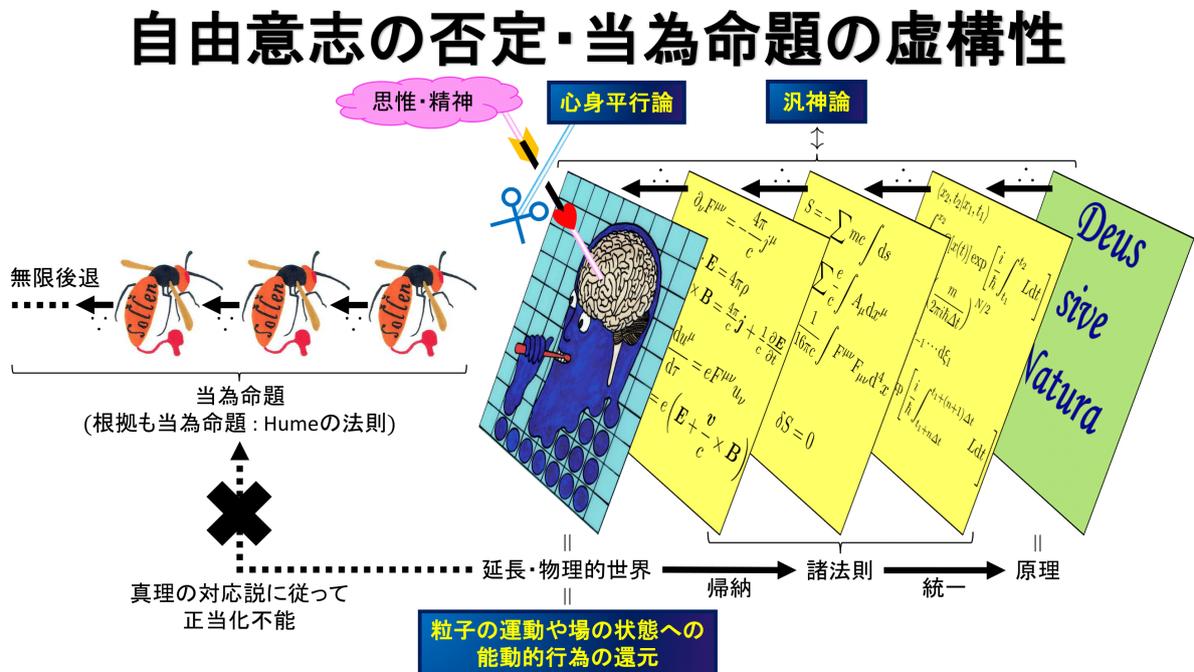


図 1 「Spinoza 描像」は「自由意志の否定」と「当為命題の虚構性」を二大柱としてこの図のように要約される。図の右半分が「自由意志の否定」に、左半分が「当為命題の虚構性」に対応する。

入する余地はないとする自然科学の想定と整合する。(なお心身平行論を採用すれば、いかにして物質に過ぎない脳から意識が生まれるのかという、脳・神経科学に付きまとう形而上学的な難題も回避できる。)

以上のように、Spinoza 哲学と自然科学の世界観は整合的である。しかしながら Spinoza の思想は彼の名著『エチカ』において、定義や要請、公理から出発して定理を演繹する、いわゆる「幾何学的方法」で「論証」されており、それ故それは数学同様、頭の中で完結している。現に Spinoza の汎神論は、神の必然性に相当する物理の具体的な詳細——決定論的であれ非決定論的であれ——に依らずに理解できる (Spinoza のオリジナルの自然観は決定論的である)。これは Spinoza 哲学が実験や観察によって反証できず、形而上学の域を出ないことを意味する。他方で経験科学は現実世界について語り得るものの、帰納的推論の産物であるため絶対確実な知識ではあり得ず、やはり形而上学的な命題の正しさを証明することはできない。むしろ Spinoza が描くような形而上学的な直観が、物理学をはじめとする自然科学が依拠する前提を成していると言った方が正確である。

次に Spinoza のパラダイムは—— Spinoza 自身がはっきりと述べているように——人間の自由意志を否定することを説明する。ここで自由意志とは、因果律の連鎖または物理法則の支配を断ち切り、純粋に自発的な行動を引き起こす超自然的な精神の作用として定義できる。言い換えれば自由意志とは言わば無からの創造であり、不可能を可能にするという自己矛盾であり、その定義により虚構に他ならないことが明らかである。実際 Spinoza が主張するように、一切は神の必然性によって完全に決定されており、また精神は身体に影響を及ぼさないならば、自由意志は存在し得ない。また人間も自然の一部であって、神の現れであるならば、自由意志を行使し得る行為の主体ははじめから存在しないことになる。これは一見すると能動的・主体的な人間の行為も、渾然一体とした単なる物理的な出来事 (例えばミクロな粒子の運動や場の時間変化) から成るという、要素還元論的な見方に対応する。さらに量子力学の描くような非決定論的な自然観を導入しても、自由意志を救うことにはならないことに注意しよう。なるほど、「決定論が正しければ自由意志は存在しない」という伝統的な議論は分かりやすい。ただしこの命題の裏も成り立つとは限らない。実際、事物がランダムに確率的に生起するとしても、人は世界のなすがままに振り回されてしまうのであれば、我々はそのにも自由意志を見出せないだろう。

自由意志は存在しないと主張することは、露悪的だという印象を与えかねない。とは言え人は時として、このことを括弧に入れて考えることが許されないような、差し迫った苦境に陥ることも確かである。そのような人生の局面の象徴的な例として、受験勉強が挙げられる。勉強しなくてはいけないと思いつつもやる気が出ず、一向に行動を起こせないという金縛りのような無気力状態を、誰しも少なからず経験したことがあるだろう。このときもし意志の力で言うことを聞かない身体を強制的に行動へと駆り立てられるならば、それは無気力の中でも自由に発動させることができる精神の能力、すなわち自由意志でなければならない。ところが自由意志は存在しない以上、意志を抱くことや努力することは、それが神即自然の必然性に従って自動的に達成されない場合には絶対に不可能である。このような認識は必ずしも状況の解決には役立たないものの、思うに真なる認識であって、それを安易に無視することはかえって「無責任」な言動や実践に繋がりがかねない。現代社会を伏流している新自由主義的な自己責任論のイデオロギーもその例外ではなく、それは本来、哲学的に正当化し得ないということも、ここで強調しておきたい。

最後に事実と価値の対立について論じる。一般に「……べきだ」という形に帰着できる、規範を表す命題を当為命題という。受験勉強をすべきとされながらもそれができない先の受験生の例は、自由意志なき世界では、我々がしばしば相容れない事実と当為の間で否応なく引き裂かれる運命にあることを示している。またそれ以前に、当為命題はいかに論理で武装しようとも、恣意性・無根拠性を免れないということも言える。その理由は次のようにまとめられる。まず素朴に理解できるように、自然にはもともと絶対的な善悪の区別は存在

しない。(これは Spinoza の採る立場であると同時に、科学が自明視する暗黙の了解でもある。) このため当為命題は事実命題だけからは導けない(このことは Hume の法則と呼ばれる)。しかるに、ある当為命題を導く論理が循環論法や無限後退に陥らないためには、何らかの前提条件を出発点として認めなければならない。よってこの前提条件にもまた、何らかの当為命題が含まれることになる。再び Hume の法則より、この当為命題は単に現実世界との一致・不一致に基づいて真偽を判断できるものではないため、無条件に認めることを強えられる。以上よりあらゆる当為命題は独断論であることを免れない。ただし——ここが重要だが——「こうあるべき」とは言えずとも、事実として「こうあってほしい(と思っている)」と述べる分には間違いにならない。このことを踏まえてはじめて、我々は普遍的な「正義」を求める答のない(擬似)問題と、それをめぐって弁論術を競うだけの表面的な水掛け論を脱し、個々人の気持ちを「感情論」として排除しない、地に足のついた真に倫理的な対話を行うことができる。

## 2 Spinoza 描像 (新自由主義的イデオロギーに対抗する哲学として)

本稿は「Spinoza 描像」に関するエッセイである。Spinoza 描像は「自由意志の否定」と「当為命題の虚構性」を二大柱として図 1 のように要約される。本章では資本主義・新自由主義のイデオロギーに対抗する理論体系として Spinoza 描像を語り直し、これを通じて改めて Spinoza 描像を導入するための最小限の議論を行う。

### 2.1 資本主義・新自由主義のイデオロギー

背景として、我々の社会を取り巻く資本主義は図 2 のように特徴付けられる。詳しく順番に見ていこう [1] [2].

- 資本主義
  - かつては誰もがアクセス可能だった社会の富を商品化
  - 生産手段・共同体から切り離され、自給自足できない賃労働者
- 資本=(交換)価値の自己増殖運動
  - 人間・環境を酷使・破壊
  - 手段と目的の倒錯(「遊びとしての勉強」は「役に立たない」)
- 新自由主義
  - 市場の競争原理に委ねて利潤獲得を追求する政策
  - 「競争が社会を発展させる」は事実認識からして誤り

図 2 資本主義とその周辺

参考 ポスト資本主義については以下のページに詳しくまとめてある。

<http://everything-arises-from-the-principle-of-physics.com/post-capitalism>

■**資本主義** 近代に特有の資本主義社会においては、社会の「富」は悉く「商品」に姿を変え、我々はお金を稼いで商品を手に入れなければ、もはや生きていくことはできない。かつては誰もがアクセスできるコモン(共有財産)だった富は、資本家によって私的財産として囲い込まれ、独占された。そして囲い込みによって農地などを締め出され、生産手段や共同体の相互扶助の関係から切り離された人々は、資本家に労働力を(商品として)提供する「賃労働者」とならざるを得ず、さらに生産された商品の買い手となって資本家に市場をも提供した。こうして我々が生きていく上で必要な物質代謝が、商品を通じて行われるようになった社会の体制を資本主義という。なお労働者が資本の需要に対して過剰となれば、「代わりの人間はいくらでもいる」ため、低賃金で過酷な労働を強いることができる。

■**資本の運動と弊害** 資本の目的はあくまで価値——貨幣によって測られる「交換価値」——の自己増殖であって、人間を幸福にすることではない。実際、価値増殖あるいは市場の自由競争で勝つことのみを目的とした商品生産は、質(使用価値)を蔑ろにし、本当に必要な物やサービスを劣化させたり削ったりして、社会の富を貧しくしさえする。また技術革新によって生産性は向上しているにも関わらず、いまだに人類は長時間労働

## 【新自由主義】市場の競争原理に委ねて利潤獲得を追求する政策

- 「規制緩和」「小さな政府」「福祉削減」「緊縮財政」「民営化」「自己責任」「選択と集中」「アウトソーシング」「雇用の脱正規化」
  - ▶ 「負け組の自業自得」という自己責任論は哲学的に支持し得ない (Spinozaの自由意志否定論, 標語的には「実力も運のうち」)
- 「競争が社会を発展させる」は事実認識からして誤り
  - ▶ 競争のペースに合わせた商品開発は小手先の変化ばかりに(スマホや冷蔵庫)
  - ▶ 画期的な新技術はすぐに模倣されるため、一時的な利潤しかもたらさず、イノベーション競争はイタチごっこ
  - ▶ 仮に事実だとしても「競争すべきだ」とは言えない(Humeの“法則”)
- グローバル化 → 途上国の安価な労働力を使い倒す
- 「人間の価値=資本に奉仕するスキル・能力」というイデオロギー

図3 新自由主義

から解放されていない。それどころか、情報関連部門に典型的な高給取りの仕事を中心に近年、いわゆる「ブルシット・ジョブ(クソどうでもいい仕事)」が急増し、労働者の精神を蝕んでいる。さらに格差は拡大する一方であり、環境破壊にも歯止めがかからない。

資本の価値増殖運動に組み込まれた人間は、本来手段であるはずのお金の増殖(金儲け)それ自体を目的として行動するようになる。これは端的に言って倒錯であるが、お金の普遍性の下では、個々の具体的な事物そのものが持つ固有の価値は色褪せてしまい、「役に立たない」ものや必ずしもお金にならないものの価値を理解できなくなる。例えば「将来のために勉強しろ」という大人も、学問そのものに価値を認めているとは限らず、「それ自体が喜びをもたらす自己充足的な遊び」としての勉強のあり方にはかえって嫌悪感を示すことさえあり得る。その遊びこそはおそらく勉強の本質であり、資本主義の論理から自由であるための鍵なのだが。

■新自由主義 資本主義経済の停滞が顕著になった20世紀後半では、各国で「新自由主義(ネオリベラリズム)」が台頭し、公共事業の民営化や規制緩和による市場の自由化が進められた。新自由主義は詮ずるところ、市場の競争原理に委ねて利潤獲得を追求する政策であり、「小さな政府」「福祉削減」「緊縮財政」「自己責任」「選択と集中」「アウトソーシング」などのスローガンによって特徴付けられる(図3)。

社会を発展させる合理的な原動力として競争を正当化できるという発想はあまりに単純であり、事実認識からして既に誤っている。アイデアには限りがある以上、絶えざる競争のペースに合わせた商品開発を強いられている限り、希少価値を生み出すには無理やり知恵を絞り出す他なくなる。このためスマホや冷蔵庫を見れば分かるように、新商品の開発は小手先の変化ばかりになってしまう。また画期的な新技術もすぐに模倣されるため、一時的な利潤しかもたらさず、イノベーション競争はイタチごっこの様相を呈する。

新自由主義はグローバル化を後押しした。その主要な目的は途上国の安価な労働力を使い倒すことにある。

■資本主義・新自由主義のイデオロギー 今や資本にとって役立つ能力(あるいはその結果と見られるところの経済的成功・報酬)によって人の価値を定義する新自由主義的な発想は自明視され、「稼ぎが低いのはスキルがないからであり、それは人として価値がない証拠である」という通念が社会に浸透している。そして「スキルや能力がないのは、それを身につける努力を怠った“負け組”の自業自得だ」という論法は、現代社会を伏

流し、幅を利かせている支配的なイデオロギーとなっている。しかしながら、このような新自由主義的な自己責任論は哲学的に容認できない。と言うのも、形而上学的なレベルに遡って考えれば、人間は決して行為の自由な主体ではあり得ないからである。それは動かし得ない根源的な真理であるが故に、「言い訳だ」などの一言で片付けたり、括弧に入れて考えたりすることが許されない。

職業選択の自由もまた形式的なものである。それにも関わらず労働者は「自分で選んで、自発的に働いている」と錯覚し、資本家にとって都合の良い労働者像を、あたかも自分が目指すべき姿、人間として優れた姿だと思ひ込むようになっていく(例えば現代では忙しきは美德とされる)。これは労働者の責任感や向上心、主体性といった精神性までもが、資本の論理に「包摂」される過程と言える。

このように資本主義的な価値観を内面化させた人間は周りの人間にも、理不尽な労働倫理を「あるべき姿」として強要するだろう。そのような理念は当為命題の形をとる。当為命題とは「……べきだ」という形に帰着できる、規範を表す命題のことである。ところが一般的に言って、当為命題は事実だけからは導くことができず、恣意性を免れない。例えば仕事が充実しているに越したことはないが、「社会人は仕事こそが生き甲斐であるべきだ」「仕事は全力で取り組まなければならない」とまでは言えない。また会社の命令には素直に従うのが日本人の当たり前働き方だったからと言って、それに従うべきだとは言えない。あるいは現代社会が市場の競争原理で動いているというだけの理由で、「競争するべきだ」「グローバルな世界で通用する人材になるべきだ」とは言えない。これらはいずれも本質的には「資本に奉仕する人材になるべきだ」と述べているのであり、与えられた資本制社会の論理を無批判に受容しているにすぎない。なるほど、もちろん同じ理由で資本主義を終わらせる「べきだ」とまでは言えない。しかし「資本主義が終わってほしい」と言えば、嘘にはならない。

■Spinoza 描像 以上のように、新自由主義的な自己責任論と理不尽な労働倫理には、それぞれ「自由意志の否定」と「当為命題の虚構性」でもって対抗できる(図4参照)。私はこれらをまとめて Spinoza 描像と呼んでいる。以下では Spinoza 描像をより詳細に導入するための最小限の議論を行う。

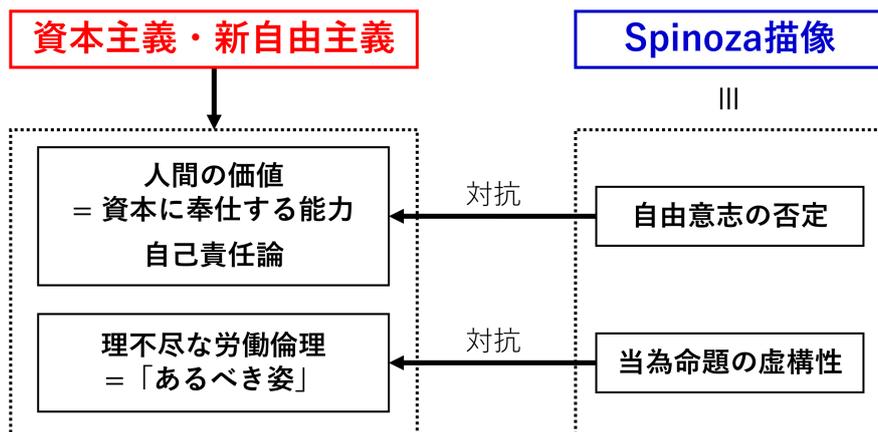


図4 新自由主義的イデオロギーのアンチテーゼとしての Spinoza 描像

## 2.2 自由意志の否定

自由意志の否定から始めよう。自由意志を行使することが重要とされる人生の局面の最も象徴的な例は、おそらく受験勉強という形をとる。ところが実際には勉強しなくてはいけないと思いつつもやる気が出ず、一向に行動を起こせないという金縛りのような無気力状態を、誰も少なからず経験したことがあるだろう。ここで注目されることは、常識に反して主観的には他の選択をすることが全く不可能に思われるということである。このような直観の正しさは、哲学的考察によって裏付けられる。もし意志の力で言うことを聞かない身体を強制的に行動へと駆り立てられるならば、それは無気力の中でも自由に発動させることができる精神の作用、すなわち自由意志でなければならない。言い換えれば自由意志は、過去からの影響、または物理法則の支配を断ち切り、自発的な行動を引き起こす精神の作用、あるいは行為の純粹かつ絶対的な始まりとして定義される(図5参照)。つまり自由意志とは言わば無からの創造であり、不可能を可能にするという自己矛盾であり、その定義により存在し得ないことが明らかである\*1。

自由意志が存在しないことは、科学的・物理学的世界観からも導き出される(図6参照)。

- 実際、自由意志は精神が身体に影響を及ぼし得ることを前提としている。  
しかし精神と身体は異質な存在であるため、その相互作用を考えることはできない。
- また一見すると能動的・主体的・自発的な人間の行為も  
渾然一体としたミクロな粒子の運動や場の時間変化に還元されるため、  
自由意志を行使し得るような行為の主体は見出せない(要素還元論)。
- さらにあらゆる出来事は自然法則に従って必然的に生起していると考えられ、  
そこに自由意志の入り込む余地はない。

もちろん以上の議論は形而上学に属しており、信じるか信じないかという問題だとも言える。形而上学的命題の正しさは、帰納的推論の産物である蓋然的な経験科学の知見によって証明できるものではない。むしろそのような形而上学的な思想が、物理学を始めとする自然科学の前提を成していると言った方が正確である。とは言え、これらは説得力があり、充分もってもらしく思われる。(付け加えると、物理学が自由意志の否定と整合していることは、理論物理学を学ぶ1つの原動力にもなり得る。)

## 2.3 当為命題の虚構性

次に当為命題の虚構性に移ろう。当為命題はいかに論理で武装しようとも、独断論であることを免れないと考えられる。このことはほとんど自明だと思われるが、あえてその理由を述べれば次のようになるだろう。まず、ある当為命題を導く論理が循環論法や無限後退に陥らないためには、何らかの前提条件を出発点として認めなければならない。ところで当為命題は事実命題だけからは、導けないと考えられる。(「である」から「すべき」は導けない。このことは **Hume** の“法則”と呼ばれる。) よって出発点を成す前提条件にもまた何らかの当為命題が含まれることになる。もし前提条件が当為命題を含まず、単に事実命題だけから構成されるのであれば、その主張は現実世界と一致するかを確かめて真偽を判断できる可能性がある。しかし当為命題は

---

\*1 ここまでの議論から理解されるように、自由意志否定論は無気力や鬱状態に陥っている人のための哲学的な理論武装ともなり得る(実際、本稿ではこれに関連する話題に度々触れることになる)。Spinoza 描像の打ち出し方を新自由主義的イデオロギーに対するアンチテーゼに限定する必要はどこにもない。



図5 自由意志

**心身平行論**

精神と身体は相互作用しないこと

**要素還元論**

一見すると能動的・主体的な人間の行為も、渾然一体としたミクロナ粒子の運動や場の時間変化に還元されること

**自然法則の支配**

あらゆる事物は自然法則に従って必然的に生起すること

図6 自由意志の否定

Humeの“法則”

「である」 →  → 「べきだ」

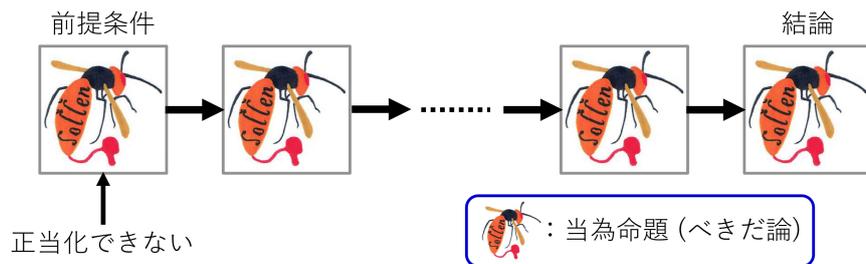


図7 当為命題の恣意性・無根拠性・虚構性

事実命題と違って、そのような方法で真偽を判断できるものではないため、前提条件に含まれる当為命題は無条件に認めることになる。これはあらゆる当為命題が独断論であることを免れないことを意味している (図7 参照)。

## 2.4 Spinoza 哲学

以上のアイデアは哲学者 Spinoza の思想と重なる。実際 Spinoza によれば、神はこの世界そのものであり、それ故、神即自然と呼ばれる。(したがって Spinoza の考える神は人格を持たない。)そしてあらゆる事物は神の必然性に従って生起している (図8 参照)。このような考え方は汎神論と呼ばれ、自由意志や目的論の否定へと導く。Spinoza の汎神論は『エティカ』第1部定理29の言葉に端的に表されている。曰く、

自然の中には何一つ偶然的なものは存在しない、いっさいは神の本性の必然性から一定の仕方存在や作用へと決定されている [3, p.54].

意志を抱くことや努力することは、それが可能な場合には神即自然の必然性に従って自動的に達成されるのに対し、それが神の時間発展に含まれていない場合には、空から自由意志でも降ってこない限り不可能であ

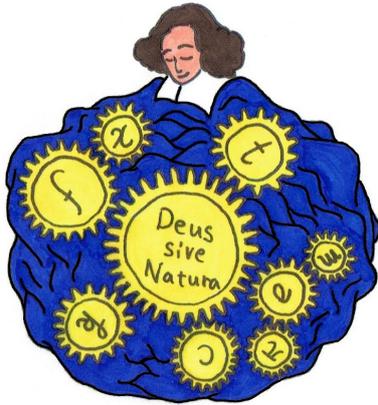


図8 Spinozaの汎神論

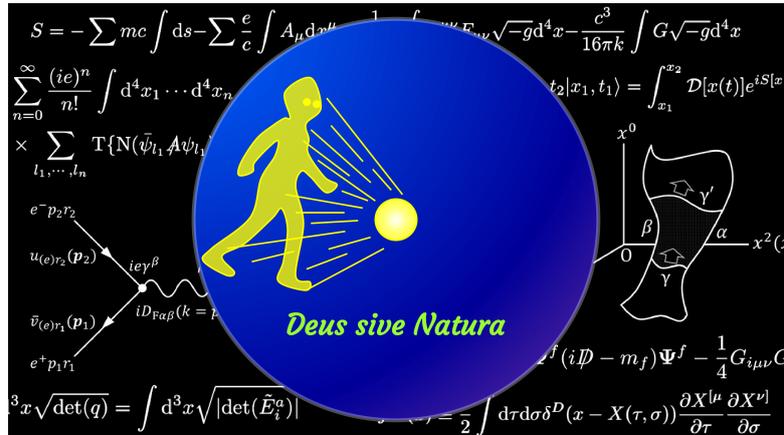


図9 Spinozaの汎神論(改)

る。ところが自由意志は存在しないため、それは絶対に不可能である。「無理なことは無理である」というのはトートロジーではあるが、正しいという意味では、「不可能を可能にする」という自由意志の概念の自己矛盾よりも、はるかにまともである。

Spinoza 哲学においても、精神と身体との相互作用は否定されている。それにも関わらず心と身体の状態に対応関係が見られるのは、これらが同一の神の異なる2つの側面を表しているからであると説明される。このように精神的状態と身体的状態は対応しているけれども、精神と身体は相互作用せず、物理的な出来事と精神的な出来事は独立に進行するという立場は心身平行論と呼ばれる。これは勿論、自由意志の否定と整合している。

さらに Spinoza 哲学は絶対的な善悪を認めない。これは当為命題の虚構性に対応するものと見ることができる。

なお Spinoza の自然観は決定論的であり、決定論が正しければ自由意志は存在しないと考えられる。しかし量子力学の描くような非決定論的な自然観を導入しても、自由意志を救うことにはならない。事物がランダムに確率的に生起するとしても、人は世界のなすがままに振り回されてしまうのであれば、そこにも自由意志は見出せない：

$$\begin{aligned} \text{決定論} &\Rightarrow \text{自由意志なし} && (p \Rightarrow q), \\ \text{非決定論} &\Leftrightarrow \text{自由意志あり} && (\bar{p} \Leftrightarrow \bar{q}). \end{aligned}$$

## 2.5 ポスト資本主義

最後に文献 [1] の章ごとの要約を載せ、ポスト資本主義の構想を示す (図 10 参照).

**第1章 「商品」に振り回される私たち** かつては誰もがアクセスできるコモン (共有財産) だった社会の「富」を、資本主義は悉く「商品」に変え、今では私たちは必死にお金を手に入れないと生きていけない。また「使用価値」よりも「(交換) 価値」を優先する資本主義は、社会の「富」を劣化させ破壊していき、人間は「商品」に振り回されるようになる (物象化)。

**第2章 なぜ過労死はなくなるのか** 資本家は単に労働時間を延ばすことで絶対的剰余価値を手に入れるため、長時間労働が蔓延することになる。そして生産手段や共同体の相互扶助から「自由」になり (切

り離され), また自分は「自由」で自発的に働いていると思い込んでいる労働者は, 過酷な長時間労働から逃げ出せない。資本主義を弱めるには, 賃上げよりも労働時間の短縮が重要であり, 世界では資本主義に挑む大胆な労働時間短縮の動きも出てきている。

**第3章 イノベーションが「クソどうでもいい仕事」を生む** 単に生産力の観点からは私たちはとっくに長時間労働から解放されていても良いはずだが, 資本主義の下では技術革新(イノベーション)による生産力の向上は, 「仕事を奪われる」というディストピアとして現れてしまう\*2。また技術革新により労働者は単純作業だけを「実行」するようになり, 自ら「構想」する機会を奪われ, 資本家の労働者に対する「支配」が強化されてしまう。さらにエッセンシャル・ワーカーが低賃金に苦しめられている一方で, 際限なく価値増殖を求める資本主義は, 高給取りの仕事を中心に「ブルシット・ジョブ(クソどうでもいい仕事)」を大量に生み出し, 私たちを長時間労働から解放しない。

**第4章 緑の資本主義というおとぎ話** 資本は人間だけでなく自然からも掠奪し, その代償を将来世代や途上国へと「外部化」し, 見せかけの環境対策をしながら自然の商品化をさらに進めている。資本主義に代わる新たな社会において大切なのは, 「アソシエート」した労働者が, 人間と自然との物質代謝を合理的に, 持続可能な形で制御することだ, とマルクスは述べている。

**第5章 グッバイ・レーニン!** 社会主義を標榜するソ連や中国の実態は, 生産手段を国有化し, 官僚が労働者を搾取する独裁的な「国家資本主義」であり, 社会主義の理想からかけ離れている。またベーシックインカム(BI)や現代貨幣理論(MMT)のような, 国家の力を介したトップダウン型の資本主義改革は, 資本の側の抵抗や物象化を解決できないだろう。私たちの目指す未来社会は, 民主的なボトムアップ型の自発的連帯(アソシエーション)を通じて「脱商品化」を推し進め, 貨幣なしで暮らせる社会の領域を広げることであり, これこそがマルクスの構想する「社会主義」ないし「コミュニズム」である。

**第6章 コミュニズムが不可能だなんて誰が言った?** エコロジー研究と原古的な共同体研究を行っていた晩年のマルクスは, やがて自然の「持続可能性」と人間社会における「平等」の連関に気付いていく。彼が構想していた将来社会は, 社会の「富」が「商品」として現れないように, みんなでシェアして, 自治管理していく, 平等で持続可能な定常型経済社会(したがって「脱成長」型経済)であり, コモンに基づいた社会であるため, コミュニズムと呼べる。

■**共同体のディストピア性** 今日「流行」している, 資本主義の外部として共同体内の贈与のネットワークをロマンチックに提示する意識の高い言説について, 宇野常寛は次のように辛辣だが冷静な批判を投げかける [5, # 8 § 3].

「贈与」とか「共同体」をその表面的なハートフルなイメージに依存して主張する人は, 「醤油が切れたら近所の人に貸してもらえ社会がいい」というが, それは共同体のなかで相対的によい位置にいられる人のことしか考えていない発想で, 弱者のことをまるで考えていない。共同体の周辺に配置され, ときに迫害され, 人間関係が構築しづらい人のことをまるで考えていない。

(中略)

\*2 A. ベナナフによれば技術革新は衰退しており, 実際に雇用を破壊しているのはテクノロジーの進歩ではなく経済の長期低迷である。とは言え, オートメーション化がなくとも社会運動を通じて民主的に必要労働を再配分し, ポスト希少性と自由な余暇社会を実現することは既に可能であるとするベナナフの見解は, 斎藤幸平がポスト資本主義として構想する民主的な脱商品コミュニズムと軌を一にする [4].

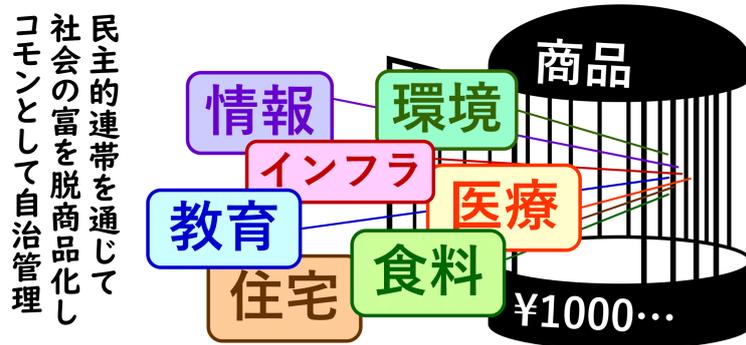


図 10 ポスト資本主義 = 脱商品コミュニズム

答えはすでに明らかだ。たとえその人がどこの誰で、過去に何があろうと〔国家等による適切な再配分が成され〕百円を商店にもっていけば百円の醤油が買える社会こそが正義なのだ。

私は斎藤幸平に代表されるコミュニズム論に希望を見出しながらも、同時にもともと人間が嫌いであるという矛盾した感情を抱えていた。コミュニズム論に思いを馳せるとき、我々は共同体を美化してイメージしがちである。しかし冷静に考えれば、世の中の誰もが心優しい人間であるわけではない。こちらがいくら好意的に接しても友好関係を築きようのない、話の通じない頑迷な相手や、不当な要求を押し付けてくる者、傍若無人な連中もいる。また一般に共同体は絶えず外部——端的には「敵」——との境界線を(再)設定することで維持され、したがって集団には自ずといじめも発生する(勿論それを正当化するつもりは毛頭ない)。こうして自分の周りに連帯できる人々を得られるかは、運に大きく左右される<sup>\*3</sup>。

さらに共同体は社会的弱者を救わないどころか、場合によっては不利な状況に追い込む。私に言わせれば「コミュニケーション能力」という言葉は、交友関係を築けないマイノリティにその責任を押し付ける方便に過ぎない。それは人間関係を築くことに成功したマジョリティが用いる、自分たちにとって都合の良い審判の言葉の言葉に他ならない。さらにそれ以前に、私にはミソフォニアという難病があるため、極力他人との接触を避けなければ、まともに生活を送ること自体が困難である。このため共同体からの援助を求めることは、少なくとも私にとって現実的ではない。これを踏まえると、共同体に属していなくても生きていける社会こそが弱者に優しい社会であるという、宇野の主張の説得力には抗い難い。

ところで宇野は『庭の話』[5]において、大多数の人間が今日中毒になっているプラットフォーム上の承認交換というゲームを相対化して内破する必要条件として、サイバースペースと実空間の双方において、人が孤独に人間外の事物と向き合える「場所」をゲリラ的に構築することを考えており、そのような場が「庭」の比喩で構想されている<sup>\*4</sup>。また「庭」には人々が承認を得ずとも「何者でもないまま」尊重される(少なくとも互いを排除しない)空間であることが求められる。(ただし1つの空間が全ての「庭」の条件を同時に満たしている必要はない。)

<sup>\*3</sup> 自由意志は存在しない以上、あらゆることは運次第であるということ、ここではわきに置くとしても。

<sup>\*4</sup> なお私が余技として行っている理論物理のノートの制作も、はじめは満たされない承認欲求にドライブされて始めたことではあるものの、ひとまずは物理学そのものに対峙する営みであるという意味で、承認交換ゲームからは一線を画するものだと思いたい。もっとも物理のノートはその難解さゆえに容易には近づき難いものになっているとすれば、それはネット空間上の庭というよりもむしろ、城や要塞に近いかもしれない。あるいはそれは物理的直観と数式の海の中を泳げる人々に開かれた水中庭園なのだ。

思うに結論としては、コモン型の社会と庭的な構想のどちらか一方だけを選ぶ必要はない\*<sup>5</sup>。ポスト資本主義を実現する上で、いずれの回路も並行して確保・実装できるのが好ましいのは言うまでもない。

---

\*<sup>5</sup> 同様に衣食住などの脱商品化と資産の再配分は同時に進めることができる。物理学において、例外のある原理というのは形容矛盾である。他方で社会問題の文脈では、必ずしも1つの原理(規範的原則)にこだわる必要はない。

### 3 Spinoza 描像の図示

Spinoza 描像は「自由意志の否定」と「当為命題の虚構性」を二大柱として図 1 のように要約される。図 1 の右半分が「自由意志の否定」に、左半分が「当為命題の虚構性」に対応する。第 2 章との内容の重複を厭わず、これについて改めて説明する。

図には「自由意志の否定」に関係する 3 つの論点が描き込まれている。それらを順番に見ていこう。図中央には「延長・物理的世界」が描かれており、ここでは

一見すると能動的・主体的な人間の行為も、  
渾然一体としたミクロな粒子の運動や場の時間変化に還元されること

が表現されている。その右側には計算用紙が連なっている。図の最も右側に書き込まれた“Deus sive Natura”というのは神即自然と訳される Spinoza 哲学のキーワードである。これは自然の原理と言い換えても、当たらずとも遠くはないだろう。ここでは

神はこの世界そのものであり、あらゆる事物は神の必然性に従って生起するということ

が表現されている。このような考え方は汎神論と呼ばれる。さらに図中央の「物理的世界」の上側では、キューピッドの矢が切り落とされている。ここでは精神の身体への作用をキューピッドの矢に見立てて、

精神と身体は相互作用しないこと

が表現されている。このような考え方は心身平行論と呼ばれる。これらは Spinoza の思想と重なるものである。

図の左半分には蜂が連なっている。毒針は親指を下に向けた形をしており、これは非難を表している。蜂に書き込まれた“Sollen”というのは当為命題のことであり、「～すべき」という形に帰着できる規範を表す命題を意味する。ここで表現されているように、いかなる当為命題も例外なく虚構にすぎず、現実世界から遊離している。

■Spinoza 描像の雰囲気描写 図 11 では Spinoza 描像の図 1 を簡略化したものである。ここでは人間は存在全体を表す水面と一体化しており、神即自然 (Deus sive Natura) から決定された水面の動きが人間の振舞いを成している。その頭上を飛び回る蜂は図 1 と同様、当為命題を表しており、噛み合うことなく平行線をたどる事実命題と当為命題の二項対立が露骨に表現されている。



図 11 神即自然 (Deus sive Natura) と当為命題の対立

## 4 Spinoza 哲学

初めに 4.1 節では、手引きとして Spinoza の哲学を簡単に要約する。その際、形の上では正しいことが“論証”された彼の思想も、あくまで形而上学の域を出ないことを併せて確認する。続く 4.2 節では Spinoza の決定論に着目し、仮に世界が非決定論的に振舞うとしても人間の自由意志は依然として認められないことを強調する。これを踏まえて自由意志を否定する議論を完成させる。

### 4.1 Spinoza の形而上学

Spinoza は 17 世紀のオランダの哲学者であり、彼の思想は主著『エティカ』に体系的に示されている。その形而上学について必要最小限の内容を以下のようにまとめられるだろう (4.3 節も参照せよ) [3, pp.1-81,p.91,pp.179-187].

Spinoza 哲学の中心的な概念の 1 つは神である。神と言うと、読者は世界の外から世界に働きかけるような、人格をもった神を想像するかもしれない。「神は乗り越えられる試練しか与えない」と言うときの神である。しかし Spinoza 哲学における神は、このような世界を外から操る人格神ではない。むしろ神はこの世界そのものであり、それゆえ神即自然 (Deus sive Natura) と呼ばれる。あるいは神は世界に内在し、全てを生起させる第一原因であり、自らの必然性に従って世界を産出する自由原因のことであり、神は自然法則として世界を言わば内部から操っているのである。

Spinoza の神は図 12 のような水の塊としてイメージできるかもしれない (ただしそれは無限に大きいものとし、また分裂することはないものとする)。水の塊は勝手に、或いは自らの必然性にしたがって時々刻々とその形状を変えていく。そしてその結果として現れる表面の波の運動が、私たち人間を含む事物の振舞いを成す。このとき事物は神から必然的に生起すると同時に神の内にあり、神は自然そのものであることになる。

Spinoza によれば、自分の振舞いが原因に駆り立てられていることに無知な人間は、自らを自由な存在と思いつく。ここから賞讃や非難と言った概念が作り出される。さらに人間は目的のために活動するという偏見が

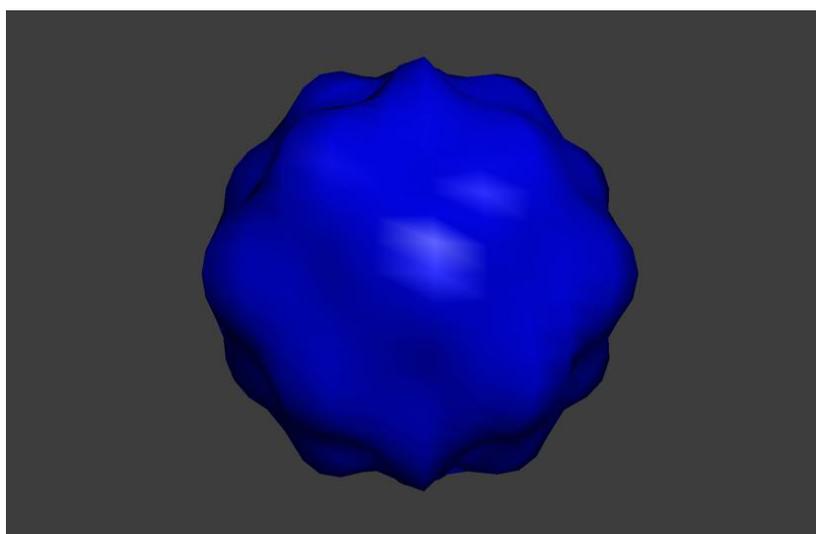


図 12 Spinoza の神のイメージ

生み出される。これは自然物も人間の (役に立つという目的の) ために創造されたという考えや、自然物に (その有用性の度合いに応じた) 善悪の価値が元から備わっているという更なる偏見に繋がる。

最後に身体と精神の関係についての、Spinoza 哲学の考え方について述べる。身体と精神は異質な存在なので相互作用しない。それにも関わらず心身の状態に対応関係が見られるのは、これらが同一の神の異なる二側面を表しているからである。と説明される。このように身体的状態と精神的状態は対応しているけれども、身体と精神は相互作用せず、物理的な出来事と精神的な出来事は独立に進行するという立場は心身平行論と呼ばれる (図 13 参照)。

■Spinoza 哲学の方法論 なお『エティカ』は定義・要請・公理から出発して定理を導出するいわゆる幾何学的方法で展開されており、それゆえ数学同様に頭の中で完結している。必ずしもこれを現実世界についての正しい主張と受け止めなければならないわけではない\*6。

## 4.2 自由意志の否定

■自由意志を否定する説 『エティカ』において意志活動は神の必然性の帰結であるため、あるいは神から存在や作用へと決定されるものであるため、自由意志は否定されている (第一部定理 32)。このことは心身平行論の下で身体が自然の法則に従ってのみ活動することと対応関係にある。そして身体の活動を注意深く観察したとき、人間の行動が渾然一体としたミクロな粒子の運動や場の時間変化に還元され、行為者のアイデンティティが埋没・消失してしまうなら、やはりそこに自由意志の入り込む余地はないだろう。さらに自由意志が精神の身体への作用を前提としている以上、心身平行論そのものも人間の自由意志を否定する根拠となると考えられる。

なお精神の身体への作用を否定する立場は心身平行論に限らない。例えば随伴現象説と呼ばれる立場もまた精神の身体への作用を否定するものであり、したがって自由意志を否定する根拠となり得る。これは精神状態が脳活動に随伴する、すなわち脳活動が精神を生むのに対して精神活動が脳の状態に影響を及ぼすことはないという見方のことである。すなわち身体から精神への一方向的な作用のみが認められることになる (図 14 参照) [6, p.20]。しかし身体と精神はあくまで相互作用しないと考える心身平行論の方が、よりもっともらしく思われる。そこで Spinoza 描像では随伴現象説を排除し、心身平行論を採用する。

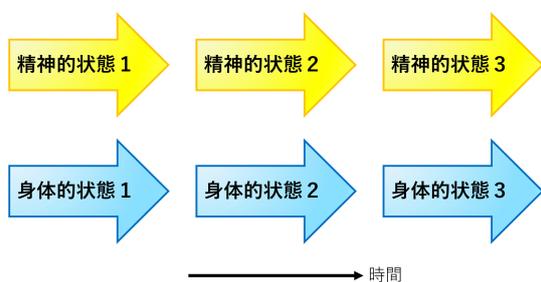


図 13 心身平行論

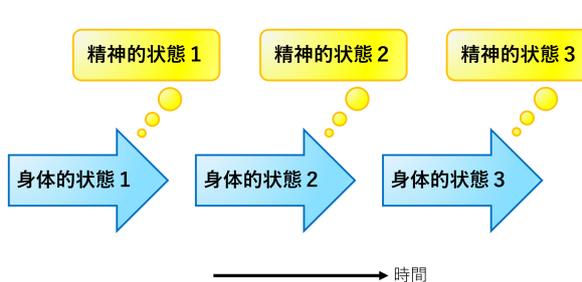


図 14 随伴現象説

\*6 これは演繹的推論の宿命である (13.1 節参照)。特に『エティカ』第一部定理 11 では神の存在が「証明」されているが、その神の「存在証明」も例外ではないことを 4.3.2 節で述べる。

Schrödinger の見解 梵我一如を中心教義とするウパニシャド哲学に共感を抱いていた Schrödinger は、Spinoza の汎神論を基調とした心身平行論に一定の理解を示しつつも、これを「形式的にすぎる解決策」として退けている [7, p.160].

仏教との関係 「仏教的な見方はさして特別なものではない」として、國分功一郎は次のように述べている [8, p.186].

例えば、意志や責任について考えるならばあらゆる事象がつながっているということはすぐにわかるわけですね。仏教的な認識はその意味では実に自然なものに思えますし、ライプニッツやスピノザの考え方もそれに近い。すると、仏教の方からそこに向かってもいいし、別のところからそこに向かってもいいことになる。

なお「仏教は、近代科学と両立可能な唯一の宗教である」と Einstein は述べている。

■汎神論の非決定論との両立 『エティカ』第一部定理 33 では、次のように述べられている。

ものは現に産出されているのとは異なった仕方でも、また異なった秩序によって神から産出されることができなかった [3, p.60].

これは、未来は決まっているという決定論の立場を表明しているように読める。そして決定論が正しければ、自由意志は否定されると考えて良いだろう。しかし、だからと言って決定論を否定しても、必ずしも自由意志の存在は保証されない:

$$\begin{array}{ll} \text{決定論} & \Rightarrow \text{自由意志なし} & (p \Rightarrow q), \\ \text{非決定論} & \nRightarrow \text{自由意志あり} & (\bar{p} \nRightarrow \bar{q}). \end{array}$$

実際、

あらゆることが確率的に生起し、自分の行動に関しても確率論的に決定される世界があったとしたら、そこにもやはり意志の自由はないだろう。決定論の世界でも確率論的世界でも、私は世界のなすがままにふりまわされてしまうからである [9, pp.157-158].

このように事物が神から産出される過程が非決定論的であったとしても、やはり神から産出されたあらゆる事件は避けられなかったことになり、Spinoza 哲学全体にとっての致命傷にはならないと考えられる。こうして汎神論と矛盾することなく、(量子力学の描くような)非決定論的な自然観を認めることができる。

■自由意志の否定 以上を踏まえると、自由意志を否定する根拠は次のようにまとめられる。

- 要素還元論
  - 一見すると能動的・主体的な人間の行為も、  
渾然一体としたミクロな粒子の運動や場の時間変化に還元されること
- 心身平行論
  - 精神と身体は相互作用しないこと
- Spinoza 哲学の意味での汎神論
  - 神はこの世界そのものであり、あらゆる事物は神の必然性に従って生起するということ
    - \* これは「要素還元論」、「心身平行論」を含んでいると見なせる
    - \* 事物が神から産出される過程は非決定論的であっても良い

もちろん、このような見方が形而上学の域を出ないことは承知である。とは言え(いや、それ故)これらはリアリティーがあり、もっともらしく思われる。

### 4.3 Spinoza の形而上学 (詳細)

Spinoza の形而上学について 4.1 節との内容の重複を厭わずまとめておく [3, pp.1-81,p.91,pp.179-187]. 断りのない限り、以下で言及している『エティカ』の定理は第一部のものである。

- 神即自然 (Deus sive Natura)
  - － 神は存在する (定理 11)
  - － 神以外の実体は存在しないこと (定理 14) → 神即自然
  - － 神なしに存在し得るものはない (定理 15)
- 第一原因・自由原因
  - － 神は第一原因である (定理 16 系 3)
  - － 神は自由原因である、すなわち自らの本性の必然性によってのみ活動する (定理 17 と系 2)
- 内在的原因
  - － 神はあらゆるものの内在的原因である (定理 18)
- 必然性
  - － 神から決定されなければものは自分自身を作用へと決定することはできず (定理 26), 決定には逆らえない (定理 27)
  - － いっさいは神によって必然的に存在や作用へと決定されている (定理 29)
  - － 事物は別なふうにはあり得なかった (定理 33)

■自由意志の否定 意志は神から存在や作用へと決定される思惟の様態なので、自由原因ではない (定理 32). こうして神の自由意志も人間の自由意志も否定される。そして人々が「自分たちを自由であると思うことによって、賞讃と非難、罪業と功勞というような概念が生じてきた (強調ママ)」(第一部付録)とされる [3, p.76].

■目的論と絶対的価値の否定 第一部付録では目的論的世界観と自然に本来的に備わっている価値が偏見として退けられる。人々は自分が目的を持って行動していると考え自分を意欲や衝動に駆り立てる原因に無知であり、自然物も自分と同様に目的因に従っていると考えがちである。さらには神も人間のために自然物を提供する目的のために活動していると思ひ込み、こうして造られた自然物には人間の想像力とは無関係な価値が存在するようになる。

■心身平行論 身体と精神は異質な存在で相互作用しない。それにも関わらず心身の状態に対応関係が見られるのは、それらが同一の神の異なる二側面を表しているからである (第二部定理 7, 第三部定理 2).

#### 4.3.1 『エティカ』第一部公理 2 は証明に用いられていない？

私が『エティカ』の第一部に目を通した限り、次の公理 2 は 1 度も (第一部の) 定理の証明に用いられていないようである [3, pp.3-81].

公理 2 他のもことによって考えられないものは、それ自身によって考えられなければならない。

公理 2 が用いられている箇所を私が見落としたのだろうか。それとも Spinoza を専門に研究されている方々の間では、公理 2 が証明に用いられていないことはよく知られていることなのだろうか。『エティカ』は定義、公理、定理の参照を多く含んだ書物であり、これがパソコンの単語検索機能を使えない時代に書かれたことを考えると、実際に Spinoza が公理 2 を使うことなく定理の証明を書き終えてしまい、そのことに気付かなかったとしても不思議ではない。

#### 4.3.2 『エティカ』における神の「存在証明」

『エティカ』第一部定理 11 に与えられている 3 つの神の「存在証明」は次のように要約される [3, pp.18-21].

証明 1      神 ≡ 実体    ⇒    他のものから産出されえない  
                  ⇒    自己原因 ≡ 本質が存在を含むもの    ⇒    存在する

証明 2      背理法  
                  神の存在を除去するものが

                 神の  $\left\{ \begin{array}{l} \text{外部にある} \Rightarrow \text{神と相互作用できない} \\ \text{内部にある} \Rightarrow \text{自己矛盾} \end{array} \right.$

証明 3      有限の存在者である我々が存在  
                  ⇒    無限の存在者である神はなおさら存在

証明 1 を短く言えば、神は定義より存在するものだから現実に存在する、となる。このような論法は神の存在論的証明と呼ばれ、証明 2、証明 3 もそれと同列と考えられる。これが 4.1 節および 13.1 節で述べた理由で成功していないことは、Kant の次の言葉に端的に表されている\*7。

最高の存在者という概念は (中略) たんなる理念にすぎないのだから、これだけによって現存するものについてのわたしたちの認識を拡張することは、まったくできない。この理念は、経験に含まれないものについても、それが可能であること以上は何も教えてくれない [10, p.76].

実際、少し乱暴に言うとも、もし神をこの世界そのものと定義するならば、神が存在するのはほぼ自明である (哲学的にはなお議論の余地が残るかもしれないが)。Spinoza 哲学の文脈において「神は存在する」というのは勿論、このような自明な主張ではない。むしろ自然に生起する出来事を誰も避けることはできないという意味で世界は絶対であり、それ故、神と呼ぶにふさわしいものであるという世界観を提示しているのだと考えられる。

#### 4.3.3 「神即自然」は『エティカ』第四部定理 4 の証明

Spinoza が『エチカ』の中で「神即自然 (Deus sive Natura)」と明記したのは 1 度だけ、第四部定理 4 の証明においてである [11].

『エチカ』の該当する箇所を引用する [3, pp.306-307].

定理 4    人間が自然の部分でないということは不可能であり、またそれ自身の本性のみによって認識され、そしてその十全な原因であるような変化しかうけないことも不可能である。

証明    個物、したがってまた人間が、自己の存在を維持する能力は、〔第 1 部定理 24 の系により〕神、あるいは自然 (神即自然, Deus sive Natura) の力そのものである。……

\*7 Kant が直接 Spinoza の神の存在証明に言及したか自分は知らない。Descartes や Leibniz には触れている [10, pp.77-78].

#### 4.4 Spinoza 哲学と Spinoza 描像

なお、図 1 で表される世界観は Spinoza 哲学と主要なアイデアを共有しているものの、必ずしも Spinoza 哲学を忠実に表現したものではない。また、Spinoza 哲学を紹介することが本稿の目的ではない。私がこの図に描かれた思想を Spinoza 哲学と区別して Spinoza 描像と呼ぶのはそのためである。

- ただし Spinoza 描像は Spinoza 哲学の単なる焼き直しではない。むしろ Spinoza 描像の原型となるアイデアがほぼ出そろった後で私は Spinoza 哲学を知り、(畏れ多くも) 我が意を得たりと思ったという方が正確である (6.3 節参照)。
- 思想や哲学は人間を通して世界が語るものと考えていた Spinoza にとって、「Spinoza の思想」、「Spinoza の哲学」といった、思想や哲学を人間に帰属させるような表現は不本意かもしれないことを断っておく [12, pp.4-6]。

## 5 自由意志の否定 (周辺議論)

### 5.1 「自由 ⇒ 責任」という因果関係への疑問

小坂井は「自由 ⇒ 責任」という因果関係を疑問視し、人を罰するのに行為者が自由か否かはもともと問題にならなかった可能性を指摘する。

自由だから責任が発生するのではない。逆に我々は責任者を見つけなければならないから、つまり事件のけじめをつける必要があるから行為者を自由だと社会が宣言するのである。言い換えるならば、自由は責任のための必要条件ではなく逆に、因果論的な発想で責任概念を定立する結果、論理的に要請される社会的虚構に他ならない。(中略)我々が今日考えるように因果律を基に責任概念が派生したのではなく、事実はその逆で、責任や罰の方がより基礎的な観念だった。客観的因果律など知らないうちから人間は責任や罰とともに生きてきた [13].

國分もこれと同じ趣旨のことを述べている。

人は能動的であったから責任を負わされるというよりも、責任あるものと見なしてよいと判断されたときに、能動的であったと解釈されるということである。意志を有していたから責任を負わされるのではない。責任を負わせてよいと判断された瞬間に、意志の概念が突如出現する(強調ママ) [14, p.26].

責任を問うためには、この選択の開始地点を確定しなければならない。その確定のために呼び出されるのが意志という概念である。この概念は私の選択の脇に来て、選択と過去のつながりを切り裂き、選択の開始地点を私の中に置こうとする。(中略)意志は後からやってきてその選択に取り憑く [14, p.132].

孫引きになるが、Kant は『単なる理性の限界内の宗教』の中で人が以下のような奇妙な倫理的推論を行うことを指摘している。このことも、人は相手が自由か否かに関係なく責任を問うという見方を支持しているように見える。

人は、非常に性悪な人間に出会ったときに、その人間は、(中略)先天的に悪いのであって、その悪さは「死ななければ直らない」といった印象をもつ [15, p.35].

そして生まれつきの性格を人は選択できないにも関わらず、同時に「その生まれつき悪い性格をもっているということに関して彼に責任がある」と我々は推論するのである [15, p.35].

以上のことは何を意味しているのだろうか。まず現代社会では「自由 ⇒ 責任」という因果関係を前提として責任概念が定立されるため、自由意志を否定すれば自己責任論を退けることができる。実際、自由意志が存在せず起こったことは仕方がなかったのならば、誰かにその責任を問うことはできないだろう。しかしある人に責任を帰すということは、その人を罰するための口実にすぎない。そうであるならば自分が何らかの過ちを犯したとき、自由意志は存在しないと主張して責任を逃れたとしても、自由意志が存在しないというまさにそのことから、周りの人が依然として自分を罰しようとするのも同時に仕方がないことになる。逆に人を罰する立場に立てば、たとえ自由意志を否定している者であっても犯罪を憎む気持ちを抱くのは自然なことと言えるだろう。

要するにこのパラダイムでは結論ありきであって、誰かを許さないという気持ちは最初から動かしがたいものだということである。責任を負わせるために意志を帰属させるということは、裏を返せば、自らの意志で犯罪を犯したと本人に正直に認められることもまた、かえって許しがたいことになる。それどころか、それはむしろ一層「無責任」な態度と捉えられかねない。熊谷による次の一節がこのような事情を明快に物語っている [8, pp.426-427].

しかし、本書で展開したのは、現在の司法システムにおいて支配的な、こういった能動態／受動態的な責任の捉え方〔行為の原因を誰かの意志に帰属させ、その人に責任を取らせるという発想〕では、本当の意味で責任を取ることに繋がらないのではないかと、という問題提起だった。そもそも、相手を傷つけてしまった自分の行為に関し、「それは自分の意志でやったことだ」という解釈で思考停止し、生い立ちなどを含め、行為に先立って存在していたさまざまな原因群に思いを馳せることさえもしない加害者のことを、周囲の人は、責任を果たしているなどと感じられるだろうか。2016年に起きた相模原殺傷事件の犯人の裁判所での言動が、少なくとも私にとって許しがたかった理由の1つは、彼が自分の行為について、自分の意志で行ったということを認めなかったからではない。いや、むしろ彼が過度に、自分の意志にのみ帰属させたことが、許しがたかったのだ。

このように一般的に受け入れられている責任概念は問題含みである。もう1つ示唆的なエピソードを取り上げよう。例えばつねに安全運転を心がけていたトラック運転手が、道路に急に飛び出してきた子供を轢いてしまったとする。このとき「どうしようもなかった」と友人に慰められたとしても、この運転手はなお「自責の念」と呼べる苦々しい想いを抱くだろう\*8。これを踏まえると「ひとは自分がコントロールするものに対してのみ責任を負う」という発想は、物事を過度に単純化していることに気付かされる。その上で古田徹也は、《ひとは運に翻弄される存在なのだ》という認識が、私たちの倫理的思考を〈地に足のついたもの〉にする重要な基礎であると考え [16, pp.138-140].

実はこの逆説的な問題に光を当て、現代の墮落した責任概念を鍛え上げ再定義する契機は、障害者の間の当事者研究と呼ばれる営みにも見出される。

不思議なことに、一度それらの行為を外在化し〔問題行動を本人から切り離し〕、自然現象のようにして捉える、すなわち免責すると、外在化された現象のメカニズムが次第に解明され、その結果、自分のしたことの責任を引き受けられるようになってくるのです。このことが、当事者研究によってわかってきた。とても不思議なことですが、一度免責することによって、最終的にきちんと引責できるようになるのです [8, p.43].

(この話題に関しては5.21節で再び簡単に触れる。)

自由意志否定論の観点からは、自由意志の概念に基づく責任転嫁のゲームは不毛である。それは建設的な対話に置き換えられねばならない。

### 5.1.1 本当に自由なら責任は生じ得ない

一般に自由は責任を伴うものとされているが、これには疑問の余地が残る。この点を見るために、例えば人が責任を問われる場面として、ある学生が授業中に居眠りをしてしまった場合を考えよう。この学生を叱責す

\*8 筆者にとってより卑近な例を挙げれば、ミソフォニアの患者の多くは、自分がトリガー音に対して闘争・逃走反応を起こしてしまうのを不可避と痛感している一方で、自らの問題行動に罪悪感を抱いている。

るのが妥当だとされるのは、彼または彼女が昨晚早く寝るか夜更かしするかを自由に、あるいは能動的に選択できた場合であろう(他行為可能性)\*9。ところが早く寝ることもできたのに夜更かしをしたならば、その同じ学生を意志が弱い受動的な人物とも見なし得ることになる。このように能動や意志の概念は、人に責任を負わせるために都合良く使われるものである。言い換えれば自由だったから責任が生じる(自由→責任)というよりもむしろ、その人に責任を負わせて良いと判断された結果、その人は自由だったと見なされる(責任→自由)。 (以上の議論の着想は國分による [14, p.26]. )

また以上のことは一般に、責任を問われる人は自由であるどころか、しばしば不自由であり、結局その人に帰責することはできなくなるということを示唆している。(実際、形而上学的なレベルでは自由意志は存在しないから、これは常に正しい。極端な例として「やる気がないのか」という非難を考えると分かりやすい。このように無気力そのものを叱責することは、不自由に対して責任を問おうとしているようなものであり、不条理である。この事情を反映して、「やる気がないのか」と叱責されたなら、「だから困っているのだ」と返すことができる。

最後に、「責任を問われる人は実は不自由である」という命題の対偶をとれば、「本当に自由ならば責任は生じ得ない」という命題を得ることができる。

## 5.2 意志と自由意志

本稿では自由意志の存在を否定している。しかし意志の存在は認めている。実際、人が何らかの意志を抱くことは現実に起こり得る。ただしその場合には、人が何らかの意志を抱くことはこの世界の動力因である神の必然性に駆動されて自動的に達成される。このため意志は存在するけれども、自由意志は存在しないということになる。

なお、「意志が弱い」ということが言われるとき、意志の力で物事が解決できるためには、それは無気力の中でも自由に発動させることができなければならないため、正確にはそこで問題にされているのは「意志」ではなく「自由意志」だということになるだろう。

■willusionist 意志は幻想だと主張する人々を表す造語である。正確には意志ではなく、自由意志が幻想である。

## 5.3 自由意志は要らないという幸せ

■「見掛けの自由」こそが真の自由 自由意志が存在しない以上、自分が欲したままに振舞えるとしてもそれは「見掛けの自由」であることになる。拘束時間が少ないことや、良好な人間関係に恵まれ他人の支配を受けないといったことも「見掛けの自由」である。

しかしながら、このように自らの必然性に従って生きていけることこそが本当の自由なのかもしれない。実際 Spinoza は『エティカ』第一部の定義7で自由を次のように定義している。

自由といわれるものは、みずからの本性の必然性によってのみ存在し、それ自身の本性によってのみ活動するように決定されるものである [3, p.4].

河野も次のように書いている。

---

\*9 十分な睡眠をとっていても、眠くなるときは眠くなるものだということを、今は言わないことにしよう。

私たちが自由という場合、その自由とは、他人や社会などの外部からの強制や拘束、束縛がないこと、つまり、自分が欲したままに振る舞えることを意味している。(中略) 自分の内部の必然にしたがって振る舞い、自分以外のものからの強制や拘束が存在しない状態こそが自由なのだといえる [9, pp.152-153].

■自由意志を求めるのは不幸の証 従って自由な者は、自由意志の助けを求めなくても問題なく生きていける。これに対し自由意志を求めるのは、そうせざるを得ないほどに追い詰められた不幸な人々なのだと考えられる。言い換えれば、「何とかしなければ」と思いつつも行動を起こせない人にとって、自由意志が存在しないことは退き引きならない問題となる。このような人が行動を起こすということは神即自然からは導かれないため、空から自由意志でも降ってこない限り絶対に不可能だからである。

自分が近い将来、失態を演じ非難されるのが目に見えていながら、金縛りのように体が動かず、身の破滅が確実に迫る。このようなとき自由意志は存在しないと人は思い知るのだろう。

自由意志が存在しないという問題を括弧に入れて考えることは許されない。このような実践の中での困難はまさに自由意志が存在しないという問題に由来しているからである。これは動かし難い事実であり、我々は形而上学的なレベルの問題に日常的に直面しているのである。

哲学は暇人の貴族的な遊びではない 「やるべき」とされることがありながら、やる気が起きないというような困難は、誰もが経験するものであろう。そしてこのようなとき、本人の意志の力で「やるべきこと」をやるという選択をできるのか、やる気がなく「やるべきこと」をやらなかった者に責任を問えるのかということは、本人がどう捉えるかはともかくとして、実に哲学的な問題である。(本人がそれを理解している場合、周りの無理解が歯がゆいだろう。) したがって誰でも自分の陥っている状況を正直に言語化しようと努めさえすれば、それは必然的に哲学となるのであり、それは「時間がないから」「お金がないから」「教育を受けていないから」できないというようなことでは決してない。

■自由意志発生機 「やらなければ」と思いつつも行動を起こせないとき、人は自由意志が存在しないことを思い知る。もし自由意志が存在すれば、このような理想と現実の乖離に苦しむことはないのだから。それならば自由意志は存在しないけれども、自由意志をそれと同等の機能を持つ SF 的な装置で代用することが考えられる。すなわち装置は「やらなければ」という思いに対応する神経活動を感知・検出し、その活動が拮抗する脳内の他の活動を圧倒するように何らかの信号をフィードバックする。あたかも自由意志がキューピッドの矢のごとく入射するかのよう、指向性のある電磁波が脳の狙った部位に撃ち込まれ、上手いこと特定の神経細胞の発火を誘起すると想像すれば良い。この装置を、皮肉を込めて、《自由意志発生機 (生成機, 送信機)》と呼ぼう\*10。

《自由意志発生機》は文字通り「頭を使い」、「自分と戦う」こと、「克己」、「自律」、「自己管理」を実現する。ニーチェの言葉を借りれば、「泥沼からわれとわが身の髪の毛を掴んで助け出そうとする」仕組みを形にしたものである [17, p.39]。《自由意志発生機》が「やる気スイッチを押して」くれるため、人は二度寝することなく早起きでき、モチベーションの伴わない仕事をこなすことができ、筋トレを多めにでき、お酒などの誘惑を我慢することができる。

ここでは《自由意志発生機》のような装置があった場合、それとどのように関わる“べき”かという規範的

\*10 これは架空の装置であり、その詳細な機構は問わない。既に脳の特定の部位を刺激する装置として経頭蓋磁気刺激装置と呼ばれるようなものがあるため、《自由意志発生機》はそれほど非現実的なものではないかもしれない。

な考察には立ち入らない。それは擬似問題である。とは言え、このような装置に頼ってまで人が任務を遂行する姿には抵抗を感じる。それは栄養ドリンクを飲み、無理して仕事をこなす人の姿に対するものと同じである。《自由意志発生機》を用いると身体の酷使による副作用が出るかもしれない。装置に依存する人が現れることも十分に想像できる。やはり自由意志を求めることは不幸であり、《自由意志発生機》など無くても生きていけることが健康的というものである。それでも「《自由意志発生機》など無くても生きていける」ようになるための自由意志は存在しないのだから、《自由意志発生機》に手を出す人は後を絶たず、装置の需要がなくなることはないだろう。

なお、このような自由意志の人工的な代用品を用いることはある種のドーピングであり、これを用いて成功したとしてもそれは自分の力・実力とは言えないのではないかとと思われるかもしれない。しかし本物の自由意志が存在しない以上、「自分の力・実力」と呼べるようなものは最初から不可能なのである。

最後に、このような意志の作用（に対応する神経活動）を増幅する SF 的装置を脳に組み込む場合にも、そのデバイスと脳から成る全体系を改めて脳と再定義できることに注意しよう。この事実はもとより、脳から独立した「自分をコントロールする主体」を定義することが不可能であることを反映している。しかるにデバイスによるフィードバックを得た意志作用も、拮抗する脳活動に打ち克つのに充分でないならば、最初から状況は変わらないことになる。（デバイスを補強する第 2 のデバイスを用意したとしても、同じ論法が適用されるため無限後退に陥ることが容易に分かる。）硬派な SF 作家として知られる Greg Egan（グレッグ・イーガン）の作品『しあわせの理由』（の表題作）[18, pp.349-417] はこのことに思い至らせる。

## 5.4 努力と才能

「努力の才能がない」という表現が用いられることがある。そのような典型的な見解として、努力と才能、欲望（模倣的）と快楽（個人的）を対置させる内田の議論を以下にまとめる [19, pp.108-111]。

才能の不足 才能は努力できるということを含んでいる。能力の不足を個人的努力で埋め合わせられないのは、あるいはその努力をできないのは才能がないからである。

「あるべき生き方」の否定 他人の能力や外面的成功に対する欲望は模倣的で原動力に乏しい。一方で無理なく快楽に導かれるとき、人は——やや挑発的に言えば——努力などというものをあざ笑うような力を引き出せる。

このような見方はある程度、的を射ているように思われる。しかし自由意志が存在しないということを知っている私たちにとって、「才能がない」という言い方ではまだ物足りない。より正確には、才能の有無に関わらず、努力をするかしないかを選べるような自由意志が存在しないのである。意志を抱くことや努力することは、それが神即自然の必然性に駆動されて自動的に成される場合には自由意志の助けを借りずとも可能であるのに対し、それが神即自然から導かれない場合には絶対に不可能である。こうして才能についての以上の議論は Spinoza 描像に帰着する：<sup>\*11</sup>

才能の不足 → 自由意志の否定、  
「あるべき生き方」の否定 → 当為命題の恣意性・無根拠性・虚構性の認識。

<sup>\*11</sup> もちろんこれは積極的な飛躍である。Spinoza 描像に比べると才能に関する議論は粗削りだから、ここから Spinoza 描像というより根源的な思想に至るようなボトムアップ式の議論は必然的に飛躍を含む。

■**先天的要因と後天的要因** 努力と才能の話に関連して、「人の能力は全てが先天的に決まっているのではなく、後天的な努力によって獲得される能力もある」という主張を取り上げよう。私はこの主張自体を否定するつもりはない。しかしもしここで後天的な努力によって得られる能力については、それを習得しないのは自己責任だと想定されているのであれば、Spinoza 描像の観点から次のように言わねばなるまい。すなわち自由意志が存在しない以上、先天的な要因であろうが後天的な要因であろうが、いずれも人の思い通りにはならない。

なお一般論としてあらかじめ予期されることではあるが、先天的要因と後天的要因は相互作用するものであり、したがって「生まれか育ちか」(nature or nurture) という二項対立的な見方は表層的である。実際、遺伝的性質は環境的要因によって発現または抑制されるため、今や生物学的には「生まれを通した育ち」(nature via nurture) を考えなければならない。

## 5.5 感情と理性

前節では人の性質について、その先天的な要因のみならず後天的な要因もまた自由意志によってコントロールできるものではないことを指摘した。同様に

- 感情のみならず理性もまた自由意志によってコントロールすることはできない。
- 無意識の行動のみならず意識的な行動もまた自由意志によってコントロールすることはできない。

ここでは特に感情と理性の関係をとり上げよう。私たちは感情に流されると痛い目に合うことを知っており、それ故しばしば感情を理性によってコントロールすることが重要だと言われる。もっと言えば、感情には責任を問えないが、理性にはそれをコントロールする責任があるとすら考えられる。しかし経験の示すところによれば、感情と理性が闘ったとき、いつでも勝つのは感情である。恐らくヒトの脳は、感情が理性に対して支配的な影響力を持つように仕組まれているのだろう。実際、大まかに言ってヒトの脳は内側から順に

原始は虫類脳， 大脳辺縁系， 大脳新皮質

の3階建てになっており、それぞれ

本能， 感情， 理性

を司っている\*12。そして上位構造は下位構造に支えられており、感情や欲望が原動力となって初めて理性もまた機能する。我々は本能や感情・欲望がなければやっていけず、必ずしもそれらを抑えるべきものとして否定的に捉える必要はない。むしろそれらを上手に味方に付けたとき、人間はその力を発揮できるのである。

## 5.6 生物の能動性は自由意志ではない

直観的に言って人間をはじめとする生物は、石のような無生物と比べて「能動的」であるように思われる。実際、生物の振舞いには外部からの刺激に応答する、個体に固有の複雑な内的プロセスが多分に反映されている\*13。生物に能動性を見出す我々の直観はこの点に由来するのだろう。

しかし一見「能動的」に振舞っているように思われる生物も、外界からの刺激に反応する一連のプロセスは突き詰めて考えれば機械的・自動的である。言い換えれば生物の振舞いも必然的に生起する出来事の連なりで

\*12 もっともこのように言う分には間違いのないとしても、このように脳の各部位にその機能に対応させたところで到底、脳の仕組みを理解したことにはならない(第14章の「骨相学的誤謬」も参照)。

\*13 ここでは便宜的に生物の「内部」と「外部」の間の線引きが可能であるとした。実際には分子レベルにまで降りていけば、生物の「内部」と「外部」の境界は消失するため、自由意志を擁護することは一層困難となるだろう。

ある。そしてこの物理的な過程は物理的世界で閉じており、そこに因果律や物理法則の支配を断ち切り、純粋に能動的・自発的な行為を引き起こす精神的作用——自由意志——の介入する余地はない。いかなる生物も純粋に能動的な行為の主体ではあり得ない。

■「自己駆動粒子」「自走粒子」「アクティブマター」 人の群衆や生物の群れの挙動は「自己駆動粒子」「自走粒子」としてモデル化されることがある。これは自ら推進力を生み出す粒子のことであり、単純な物理的粒子に比べて「能動的」であることから「アクティブマター」とも呼ばれる。ところが通常、非活性的・受動的な対象と見なされる単純な物理的粒子もまた、それが一様不変な外場(電場や重力場)の作用の下で媒質中を運動する場合、自己駆動粒子の時間発展方程式と同じ形の運動方程式に従うことになる(この場合、推進力の項は外場から受ける力に対応する)。このように「能動的」な対象と「受動的」な対象が共通の運動方程式に従う粒子としてモデル化されるのである。

このことは一見すると奇妙に思われるかもしれない。しかし、ものの振舞いがものの性質を十分に表現・反映していることとして能動性を定義するならば、「能動」とか「受動」とか言うのはあくまで程度の問題であることになる。能動性が相対的な概念である以上、「能動的」な対象と「受動的」な対象との間の線引きは人為的なものとならざるを得ない。言い換えれば自然には本来、能動と受動の区別はないのである。さらに人間をはじめとする生物にも自由意志は存在しないという点では、物理的な粒子と何ら変わらない。以上のことが「能動的」と言われる対象と「受動的」と言われる対象を、自己駆動粒子の時間発展方程式に従う粒子系として同列に扱うことを可能にしていると考え得る。

## 5.7 運命と人生の意味——必然主義から見た『JIN-仁-』

ここでは運命(宿命論, 決定論)を取り上げる。運命について述べている以下の議論は「世界が非決定論的であって、かつ自由意志が存在しない場合」にも(必要に応じて多少の修正を施せば)適用できると考えられる。と言うのも、出来事が非決定論的に生起し、それ故に運命は存在しないとしても、自由意志の存在は保証されないからである。

■宿命論と人生の意味 山口は『ジョジョの奇妙な冒険』第五部のエピローグを題材として、宿命論と人生の意味について論じている [20]。この論文によれば、宿命論と人生の意味の問題は次のように言い表される。すなわち未来の出来事は既に決まっているとすると宿命論は、私たちから創造性としての人生の意味を奪う。その上でネーゲルの議論を踏まえ、「宿命論的な世界観を前提する『ジョジョ』がいかにして読者に《人生には何か意味があるにちがいない》という希望を与えうるのか」に答えている。

以下では《宿命論は、私たちから創造性としての人生の意味を奪う》という、議論の前提となる部分について再考したい。確かに未来が決まっているなら、人生の意味が奪われる、という感覚は分からなくない。またそこで問題となる人生の意味とは、創造性のことであるというのも頷ける。しかし人は宿命論を唱えられたとき、常にこのような喪失感を覚えるわけではないと思う(私自身がそうだから)。運命があるとすれば、何かを成し遂げたとしても、運命で定められた結果と比べれば何も創造していないことになるが、過去と比べれば新しく何かを創造したことになる。そしてそのような成長から、人は十分に達成感や喜びを引き出すことができる。これは必ずしも運命論によって損なわれたり、妨げられたりしない。むしろ人は何かを成し遂げたとき、「自分ならこういうことをやっただろう」と思えることがあるけれど、それはある意味で自分の仕事を必然と実感していることを意味している。そしてそれこそが——陳腐な言い方ではあるが——自己実現というものであろう。自己実現とは自由意志によってではなく、むしろ必然として実現されるものである。

なお自らにミッションを課している人は、「いつそれを完成できるだろうか」「最後までやり切れるだろうか」といった焦りや不安に陥る。そのようなとき、遅かれ早かれ自分はそれをやる運命にあるだろうと信じることは、むしろ救いになる(気休め程度だが)。

市井の人の自由意志信念と“突然変異” 人は普段、人生がうまくいってればそれで満足するものであり、思い上がった人を除けばそれが自分の自由意志によるものかどうかなど気にしていない(「自由意志はありません」と指摘した瞬間、猛反発されるとしても)。一方「やるべきこと」ができずに追い詰められた者は、状況を変えるための超自然的な能力としての自由意志を求める。そしてその一部は「自由意志は存在しない」という真理にたどり着く。

■必然主義から見た『JIN-仁-』 運命と人生の意味をテーマとした作品として、他にもテレビドラマ『JIN-仁-』が挙げられる。これについて、必然主義の観点から簡単にコメントしておこう。

主人公、南方仁は江戸時代にタイムスリップする。そこで彼は、「自分の行為が歴史を変えてしまうのではないか」「自分が歴史を変えることは許されるか」と自問し、苦悩する。しかし彼が過去にタイムスリップしたこともまた歴史の一部なら、彼が歴史を書き換え得る状況を歴史自身が許しているとも言える。実際に起こっていることは歴史によって(Spinoza 哲学の言葉では、神即自然によって)肯定されているのである。

ストーリーの後半では、仁はより良い未来を目指して積極的に歴史を変えようとするようになる。これは一見すると、運命に抗い未来を変えることであるように思われる(作品中では運命の力は「歴史の修正力」と呼ばれる)。しかし未来を変えと言っても、それはあくまでタイムスリップする以前の歴史に比べて変わっているということである。彼が江戸時代に未来を変えようとすることも必然であり、それ故ある意味、彼は全く運命を変えてはいないと考えることも可能である。このとき「私は何を成すべきか」という問いは意味を失う。神について「神は乗り越えられる試練しか与えない」というのはこのドラマのキーフレーズであり、神は「歴史の修正力」を通して世界に働きかける存在と想定されている。しかし Spinoza 哲学では、神はこの世界そのものである!

## 5.8 「未来を分かっていたら変えられるはず」という人情について

「未来が分かっていたら、それを変えられるのではないか」と考えたくなるのが人情というものだろう。しかし未来を知っているということは、未来は決まっているということを含んでいるため、それを変えることはできない。これは一種のパラドックスである。この点に関して、例えば著名な物理学者 Feynman は次のように述べている。

こういう話 [占師に関する話] 自体には、またたくさんパラドックスが含まれている。もしも将来何かが起こるといことがわかっているのなら、適当なときに適当なことをすれば、それは確かに避けられるのではないか、等々 [21].

SF『あなたの人生の物語』にも、過去と未来のすべての事象を記録した年代記、『三世の書』に関する次のような件がある。

『三世の書』はその定義上、正しくなくてはならない。しかるに、彼女がどうするかを『書』がなんと言っているように、彼女は別のことをする選択をなせる。いかにすれば、これらふたつの事実を両立させることができるのか? 両立しえない、というのが通常的な答えになる。『三世の書』のような書物は、その存在自体が右記のような矛盾を生むという明確な根拠からして、論理的に不可能だと [22, pp.251-252].

なるほど、確かにこれらには一理あるかもしれない。すなわち、たとえ未来が決まっていようと、それを予言することは現実的には不可能であり、結果的にこのようなパラドックスは起こりえない。もっとも原理的にも、このようなパラドックスは人間の心理的な過ちに由来する、単なる見かけ上のものだと考えられるだろう。実際、これは次のように考えれば解消することができる。まず未来を知っていて、なおかつそれを変えられないことが明らかな例を考えよう。そのような例としては、崖から転落した場合を考えれば良い。このときその人には、10メートル下の地面に叩きつけられることになるのが分かり、かつそれを避けることはもはやできない。未来が決まっている場合には、一見すると避けられそうなことも、本質的にはこれと同じことだということになる。

未来を知っているいま、その未来に反する行動は、自分の知っていることを他者に語ることも含めて、わたしはけっしてしないだろう。未来を知るものは、そのことを語らない。『三世の書』を読んだ者は、そのことをけっして認めない [22, pp.262-263].

なお『スローターハウス 5』は、著者の第二次世界大戦におけるドレスデン無差別爆撃の戦争体験を決定論的世界観と融合し、文学作品へと昇華させた SF である。作品中には主人公ビリー・ピルグリムと、彼を誘拐した「トラルファマドール星人」の間の次のようなやり取りがある。これは未来は変えられるという人間的な考えと、未来を知っているトラルファマドール星人の決定論的世界観との間の隔たりを印象的に描いた箇所(の一つ)である。少し長くなるが、引用しよう。

「どうして——どうして私はこんなところにいるんだ？」

「それは地球人でなくては説明できないね。地球人は偉大な説明家だ。これこれのできごとがこうした構造になっているのはなぜか、これを避けるには、あるいはべつの結果を得るにはどうしたらよいか、みんな説明してくれる。わたしはトラルファマドール星人だ。きみたちがロッキー山脈をながめるのと同じように、すべての時間を見ることができる。すべての時間とは、すべての時間だ。それは決して変ることはない。予告や説明によって、いささかも動かされるものではない。それは、ただあるのだ。瞬間瞬間をとりだせば、きみたちにもわれわれが、まえにいったように琥珀のなかの虫でしかなくことがわかるだろう」

「いまの話からすると、きみたちは自由意志というものを信じていないようだね」と、ビリー・ピルグリムはいった。[実写版の日本語字幕は残念ながら、「自由意志」の部分が単に「意志」となっている。]

「もしわたしがこれまで多くの時間を地球人の研究に費やしてこなかったら」と、トラルファマドール星人はいった、「自由意志などといわれても何のことも分からなかっただろう。わたしは知的生命の存在する三十一の惑星を訪れ、その他百以上の惑星に関する報告書を読んできた。しかしそのなかで、自由意志といったものが語られる世界は、地球だけだったよ」 [23]

このように未来を知っている立場からすれば、未来をいかにして変えるかといった発想はナンセンスである。また決定論的世界観は自由意志を否定する(非決定論的世界においても自由意志は依然として認められないということ、今は言わないとしても)。

- 同著には自由意志と決定論に関する詩(ニーバーの祈り)が登場する。

God, give us grace to accept with serenity the things that cannot be changed, courage to change the things that should be changed, and the wisdom to distinguish the one from the other.

- 「そういうものだ (so it goes)」という表現が至るところで用いられている。
- 著者カート・ヴォネガット・ジュニアの自由意志を (1つの) テーマとした小説として、他にも『チャンピオンたちの朝食』が挙げられる。人間を機械として描写する箇所が作品のあちこちに見られる。私は自分がミソフォニアという病気であることを知ったばかりであり、特定の人が繰り返すトリガー音を立てること、私とその都度ミソフォニック反応を起こすことはまさしく機械のようだと思わずにはいられなかった。

さらにギリシア神話には以下のように、「未来を知っていること」と「未来を変えられないこと」が矛盾しないような仕掛けが施されているエピソードが見出される。

**カッサンドラ物語** アポロンの能力によりカッサンドラは未来を正確に予言するが、周りはそれに耳を貸さないという宿命を負う。その結果、カッサンドラの予言通りトロイア戦争においてトロイアはギリシア軍に敗れる。

**オイディプス物語** アポロンの信託により、自分は父を殺し、母を娶ると言われていたオイディプスは、結局そうと知らずに信託の通りに行動してしまう。エディプス・コンプレックスの語源となるエピソードである。

このようにギリシア神話が予言の通りの未来を実現できるのは、予言の内容が大まかなものであり (局所的運命論)、それ故物語の細部に適当な設定を施すことで辻褃合わせが可能であることと関係していると言えるかもしれない。

これがギリシア神話であれば、諸般の事情が重なって、彼女は最善の努力にもかかわらず、みずからの運命のままにふるまうことを余儀なくされるわけだが、ギリシア神話の予言があいまいなのは周知のとおりだ [22, p.251].

## 5.9 量子力学と自由意志 (を巡る混乱について)

### 5.9.1 自由意志定理は自由意志の有無に言及しない

Conway と Kochen は自由意志定理と名付けた定理の中で次のように主張した [24].

もし我々が測定の方法に関して自由意志に基づく選択が可能であって、かつ局所性が満たされているとすれば、我々と同じ意味での自由意志が測定の対象である物理系にも存在する

ところが量子力学は局所性が必ずしも成り立たないことを示唆している。それ以前にそもそもここで言う自由意志とは、正確には決定論からの逸脱または非決定性のことである [24, p.39,p.84]. 非決定性を導入し事物がランダムに確率的に生起する非決定論的な世界を考えても、人は世界のなすがままに振り回されるのだとすれば本当の意味での自由意志は保証されない:

$$\begin{array}{l} \text{決定論} \Rightarrow \text{自由意志なし} \quad (p \Rightarrow q) \\ \text{非決定論} \not\Rightarrow \text{自由意志あり} \quad (\bar{p} \not\Rightarrow \bar{q}). \end{array}$$

このように自由意志定理は自由意志の有無に言及するものではないことが分かる。

詳細は次のページに置いたノートを参照されたい。

<http://everything-arises-from-the-principle-of-physics.com/preamble/spinoza-picture>

### 5.9.2 Feynman「量子力学の不確定さが心の動き、感情、意志の自由を説明する」を批判 [25]

われわれはすでに量子力学の不決定性について、二、三説明をしてきた。それは出来るだけ注意して環境を整えても、物理学の範囲で、その中におこることを予言することが、いまのところできないということであった。励起状態にある原子は、光子を放出しようとする、われわれはいつ原子が光子を放出するのかを、いうことができない。任意の時刻で、光子の放出をきめるある振幅があり、われわれには放出の確率が予言できるだけである。将来を正確に予言することはできない。ここから、意志の自由の意味について、またこの世が無常だという考えについての、いろいろなナンセンスや疑問が発生したのである。

もちろん、古典物理学もまたある意味で不確定であることを強調しておかなければならない。われわれが将来を予測することができないというこの不確定さは、重要な量子力学的な性質とふつつ考えられ、これで心の動き、感情、意志の自由などが説明できるといわれている。しかし世界が古典的であったとしたなら——古典的な力学の法則に支配されるとしたら——心がだいたい同じような感じ方をしなくなるかどうか、それは全くわからない。世界の中の、または気体の箱の中のすべての粒子の位置と速度とを知ったなら、将来なにが起るかを正確に予知できるということは、古典的な立場からすれば正しい。それで古典的な世界は決定論的であるといわれる。しかしわれわれのもつ正確さには限度があり、ただ一つの原子の位置が正確にはわからなかったとしてみよう。たとえば 10 億分の 1 の不確かさでもよい。さてそれが進むにつれて他の原子につき当たる。位置の不確かさは 10 億分の 1 の程度であるとしても、衝突後の位置にはさらに大きな誤差をとまなうことになる。そしてもちろん、つぎの衝突ではさらに増幅される。それでごく僅かな誤差で出発しても、急速にひじょうに大きな不確かさに増大する。一例をあげよう。水がダムから落ちるとき、しぶきが飛ぶ。そばにわれわれが立っていると、絶えず水滴が顔にかかる。このことは完全にでたらめなことのように見えるけれど、この現象は純粋に古典的な法則で予知できるはずである。どうして？ごくわずかな不規則さが、落下する間に増大され、完全にでたらめ目になってしまうのである。明らかに、われわれが水の運動を絶対に正確に知るのだから、水滴の位置を実際に予知することはできない。

もっと正確に言えば、精度を与えた場合、それがどれほど正確であろうとも、十分長い時間経過すれば、もはや正確な予知が不可能になるような、そういう時間を見出すことができる。さて肝心な点はこの時間がそれほど長くないということである。正確度が 10 億分の 1 というものであっても、時間は何百万年というようなものではない。事実、時間は誤差に対して対数的にしか変化しないので、ごくごくわずかな時間のうちに、あらゆる情報が失われてしまうことがわかる。正確度が 10 億分の 1 の、そのまた 10 億分の 1 の、さらにそのまた 10 億分の 1 であろうとも、——とにかくそれがどこかで止るものなら、10 億分の 1 が何回続こうとかまわない——その正確度を述べるに必要な時間よりもさらに短かい時間のうちに、なにがおこるか最早予知できなくなってしまう。したがって人間の心の見かけの自由さや不決定さから、古典的“決定論的”な物理学がそれを理解することを望むことさえできないといったり、また“完全に機械論的な”宇宙から解放させるものとして量子力学を歓迎したりすることは、公平な立場とはいえない。すでに古典力学の中にも、実際的な観点からすれば不決定性というもの存在するからである。

## 5.10 両立論的自由意志の不徹底

4.2 節では自由意志を的確に定義したため、自由意志は存在しないという結論に容易にたどり着くことができた。実際そこで与えた自由意志の定義は、自由意志という概念の無理をも暴いている。

これに対し自由意志は存在するという結論ありきでは、その結論を導くために自由意志を不自然に定義しかねない。両立論的自由意志はそのような事態に陥りがちであり、その典型的な例は河野の議論に見られる。おそらく河野は次のような思考を経て、自由意志の(不自然な)定義に導かれたものと想像される [9, pp.158-164].

- 大前提 自由意志は存在する。
- 小前提 自由意志は意図的行為(随意的運動)を生成する。  
意図的行為は徐々に形成される文脈や背景に動機づけられる。
- 結論 意図的行為を生じる文脈や背景が自由意志を可能にする。  
自由意志が意図的行為の文脈や背景から独立した一種の決意であると言うのは、自由を過度に狭い意味で概念化していることになる。

この結論は自由意志を不自由のことと定義付けてしまっているも同然であり、不条理である。実際これは河野自身による次のもう一つの自由の定義とも相容れないだろう。

自由があるとは、ある仕方とは別の仕方で行動できること、すなわち、行為の選択がある場合をいう [9, p.167].

これは自由意志が存在するとした大前提が誤りであったためである、という背理法を基にして上の推論を次のように修正できる。

- 大前提 自由意志は意図的行為の文脈や背景から独立した一種の決意である。
- 小前提 自由意志は意図的行為(随意的運動)を生成する。  
意図的行為は徐々に形成される文脈や背景に動機づけられる。
- 結論 自由意志は存在しない。

## 5.11 他行為可能性に欠けるもの：精神の作用

自由意志を定義するには他行為可能性を要求するだけでは不十分である。非決定論を仮定すれば他行為可能性は満たされるけれど、単なるランダム性は自由意志を意味しないから。(逆に人間の自由意志を否定するには、神の他行為可能性なるものがあるとしても良い。) 他行為可能性に欠けているのは、心の概念である。自由意志とは、心の命令によって他行為が可能となる場合を言う。したがってある場合には、自由意志とは思い通りの行動を引き起こす精神の作用である。ただしこの「思い通り」について、どのような思いを抱くかに関する選択の自由度(言わば“他思惟”可能性)までは要求しないことにする。

■ “他思惟”可能性 この他思惟可能性は Schopenhauer (ショーペンハウアー) の、「人は思ったことをできても、何を意志するかを意志することはできない」という言葉で表されている。(Man can do what he wants,

but he cannot will what he wills.) これは「意志はあっても自由意志はない」というのと重なるかもしれない。ただし付け加えると、人は意志したことを思い通りに実行できるとすら限らない。自由意志が存在しないというのは、そういうことである。

## 5.12 客観性・普遍性

言うまでもなく、自由意志否定論を知ったときに人は自由意志を“失い”神の様態(必然性の現れ)に“なる”のではない。個々人の認識とは無関係にはじめから自由意志は存在せず、またあらゆるものは常に神の様態であって、全ては一つである。

## 5.13 人を説得すること

やや乱暴に言えば、自由意志が存在しないことは(自分にとっては)自明であり、その意味では自由意志問題は解決している。すると「自由意志問題」に問題が残るとすれば、それは自由意志が存在しないことをいかに人に納得させるかという実践的(あるいは政治的)な問題となるのでないか。少なくとも、そのように自由意志問題を改めて定式化することは可能である。

■自由意志否定論に対する理解・無理解はどこから来るか 勤の良い人は無気力に陥ると、自由意志の不在を直視せざるを得なくなる。しかし自由意志は存在しないという《真理》を周りに伝えようとしても、しばしば聞く耳を持たず、「屁理屈だ」「言い訳するな」「いいからやれ」「つべこべ言わずにやれ」などと面倒臭そうに片付けられるのがオチである\*14。行動を起こす気力が湧かないときは湧かないものであるということは、まさしくその面倒な形而上学の問題に由来しており、そうである以上それを括弧に入れて考えることは許されないはずであるにも関わらず、である。あるいは簡単な捨て台詞で逃げようとしているその「言い訳」こそが、事の本質であるにも関わらず、である。理解を拒んでいるのはおそらく「やるべきことはやるべきだ」という常識的判断であろう。それは当為命題(sollen)の形をとる以上、「できないことはできない」という事実命題(sein)とは相容れない。ここに2つの異なる意味体系の衝突を見ることができる。

いったいどうすれば、あるいはどのようなときに、このような常識の暗闇が取り払われ、自由意志否定論に対する理解が得られるのだろうか。少なくともそれは神(即自然)の必然性、あるいは物理学理論を熟知することによってではあるまい。実際、読者はLaplaceの悪魔のごとく、与えられた初期条件から場と粒子の時間発展を悉く計算し、ある人が期限までに仕事に取り掛かれなことを証明したというような話など、聞いたことがないだろう!むしろ自由意志否定論へ理解は、「自分にもそういうとき(無気力に囚われたとき)があったなあ」というような、個々人の経験に基づく共感に由来するものと考えられる。その裏もある程度正しいかもしれない。すなわち無気力そのものを非難できると考えている人は、そもそも無気力に苦しんだ経験などなく、そのことで罪悪感を抱いたり自己嫌悪に陥ったりしたこともないのではないか(そのこと自体を非難することはできないけれど)。その証拠となるかは分からないけれど、例えば信田は息子たちが問題行動を起こしている父親のグループ・カウンセリングを行っており、信田によれば、カウンセリングに来る父親は自分を責めたことがなく、自分を責めるということ自体がよく分からないという。父親たちの人物像は、信田の言葉

\*14 しかし真実はそのような捨て台詞で消し去ることができるものではないため、このように聞く耳を持たず理解を拒む態度は事態を悪化させることはあっても、何の解決ももたらさない。このように人の話を聞くことを忘れ、想像力の欠如した頑迷な者の無理解の代償は、無理解そのものである。すなわち自分の頭で考えない「常識的な人間」は永久に真理を悟ることなく盲目の内に生き、他者と分かり合える日が訪れることはない——そのことに対して責任は問えないけれど。

を借りれば以下。

全員が 50 代以上。名のある企業に勤める管理職だったり定年間近だったり、もしくは定年退職したという方々。高度経済成長の時代を生きて「自分の食い扶持くらい自分で稼ぐのが当然。やればできる。努力してできないことはない、できないのは努力しないからだ。だから息子にもやる気を起こさせ、本当に何をやりたいかわからせれば、息子はすぐにでも就活し始めるはずだ」って信じて疑わない男たち [26]。

ただし無気力のような経験だけでは、自由意志否定論への理解をもたらすには十分ではないかもしれない。実際、無気力に陥ったことがあったとしても、あまりにも愚直に「努力するべきだ」といった教訓を当然視しているためか、自分が今まで自由意志という幻想を盲目的に受け入れ内面化させてきたということに気付かない人もいよう。「努力するべきだ」という当為命題が「自分は本当は頑張れるはず」と脳内変換されてしまっただけ(とんでもない飛躍である!)、自由意志の存在を疑うことはおろか、自由意志を概念化することすらできない。自由意志信念の根強さの理由の 1 つはここにある。

#### 5.14 因果律

私たちは自分の行動を引き起こす原因の全てを、或いは神即自然の必然性の全てを知ることはできない。またそれは私たちに理解できる、主観的なフィルターを通して粗視化した意味レベルの解釈では捉え切れない(本当のことは言わば神のみぞ知るのである\*15)。それは場と膨大な数の粒子の相互作用、或いはこれを記述する完全な物理法則から成るのだから。したがって、例えば「何故、学校に行きたくないのか」「何故、仕事をしないのか」と問われても、必ずしもその理由を明確に答えることはできない。下手に理由を言おうとすると、それは「言い訳」めいたものになってしまうこともあり得る。しかし私たちのすべての行動には、それを否応なく引き起こすような原因が確かに存在しているのである。

この水面下の不気味で機械的・必然な物理学レベルの因果律を、「偶然」という言葉でまとめることが許されるならば、次のように述べることができる [27, pp.127-128]。

つまり、無意識とはいろんな過去の出来事が偶然的にある構造をかたちづけているもので、自分の人生のわからなさは、過去の諸々のつながりの偶然性なのです [強調は原著者]。(中略)ただそのことに直面するのが通常は怖いので、人は「意識の表面で」さまざまな物語的理由づけをします。しかし精神分析の知見によれば、まさにそのような物語的理由づけによって症状が固定されているのです。むしろ、無意識のなかで要素同士がどういう関係づけにあるのかを脱意味的に構造分析することで初めて、症状が解きほぐされることになるのです。

■意味レベルの粗い解釈 例えば「何故、居眠りをしているのだ」と問われたとき、「昨日、夜更かしして寝不足だったから」と答えれば、一応は理解・納得できてしまうだろう(少なくとも、理解した気になれる)。これが意味レベルの粗い解釈というものである。現実には複雑だから、いつもこのような仕方では物事を説明できるとは限らない。

\*15 ただしこの慣用語における神は人格神を指すと考えられる。

■特定の事象を原因として取り出すこと　そもそも特定の事象を原因として取り出すことは、いかにして可能なのだろうか。物理学的な観点からは、事物の真の原因は例えば、過去のある時刻  $t$  における粒子系に対する力学変数とその時間変化率の組  $\{q_i, \dot{q}_i\}$ 、あるいは固定された背景時空中の場の古典論の文脈における（過去の光円錐内の）時空点  $x = (ct, \mathbf{x})$  で評価された場とその時間変化率の組  $\{\phi_i(x), \dot{\phi}_i(x)\}$  のようなものであることになる。以下ではややペダンティックな議論となるが、この点を考えよう。簡単のために現実世界の現象を、決定論的な法則に従う単一の古典場  $\phi(\mathbf{x}, t)$  の時間発展と見なす。空間を離散的な格子点  $\mathbf{x}$  から成るものと想定し、時間も間隔  $\Delta t$  おきに離散化する。こうすれば「時刻  $t$  に位置  $\mathbf{x}$  の格子点が場の値  $\phi(\mathbf{x}, t)$  を持つこと」を、1つの「事象」に特定できる。

次にある位置  $\mathbf{x}$  の微小時間後（時刻  $t + \Delta t$ ）での場の値  $\phi(\mathbf{x}, t + \Delta t)$  は、時刻  $t$  における位置  $\mathbf{x}$  およびその最近接の格子点  $\mathbf{x}', \mathbf{x}'', \dots$  での  $\phi, \dot{\phi}$  の値によって決定されるものと仮定する。ただし場の時間変化率  $\dot{\phi}$  は

$$\dot{\phi}(\mathbf{x}, t) \equiv \frac{\phi(\mathbf{x}, t) - \phi(\mathbf{x}, t - \Delta t)}{\Delta t}$$

のことと了解する。

- これは空間に関して場が近接相互作用することを意味している。
- また時間に関しては、場の方程式が2階の微分方程式であり、それ故に初期条件として  $\phi, \dot{\phi}$  の値を与えると、その後の場の時間発展が決定されるという意味での古典的因果律を仮定していることになる。

すると時空点  $(\mathbf{x}, t + \Delta t)$  における事象の直接的原因は

$$\phi(\mathbf{x}, t), \phi(\mathbf{x}', t), \phi(\mathbf{x}'', t), \dots, \phi(\mathbf{x}, t - \Delta t), \phi(\mathbf{x}', t - \Delta t), \phi(\mathbf{x}'', t - \Delta t), \dots$$

の値に特定される。こうして図15のように因果律の連鎖を、視覚的にイメージすることができる。

- 厳密には原因となる時空点は光円錐の内部に限定する必要がある。
- 粒子系に対しても場の値  $\phi(\mathbf{x}, t)$  の代わりに力学変数として一般座標  $q_i(t)$  をとって、同様の議論を行える。
- ループ量子重力理論では実際にミクロなスケールで離散化された空間・時間が想定される [28, § 1.2]. またループ量子重力が基礎を置く古典的な一般相対性理論の解釈では、時空の歪みが重力場であるというよりもむしろ、重力場から時空が現れると捉えることができ、物理的存在は背景時空に対してではなく、他の力学的存在（重力場を含む）に対して位置付けられる [28, § 2.2].

## 5.15 自由意志がピンと来ない人のために

辞書的な定義だけでは自由意志が何を意味しているのかピンと来ない人のために、以下では無気力と呼ばれる状態を取り上げ、これについて1つの例え話をしてみたい。無気力とは何か。もし人間を自動車と見なすなら、無気力は、ガソリン切れに例えられるかもしれない。ガソリンがなくなってしまうと、外から燃料を補給してやらない限り、それ以上は動けなくなってしまう。しかしこのような例えは不適切だと読者は思われるかもしれない。人間は自動車と違って、自分の力で行動を起こすことができる、と。なるほど、確かにそれは、常識的な見方だと言えるだろう。しかし言うまでもなく、常識的な判断だからと言って、常にそれが正論であるとは限らない。実際、自分次第というのは言わば自分で自分を操縦するという自己矛盾であり、今の場合、

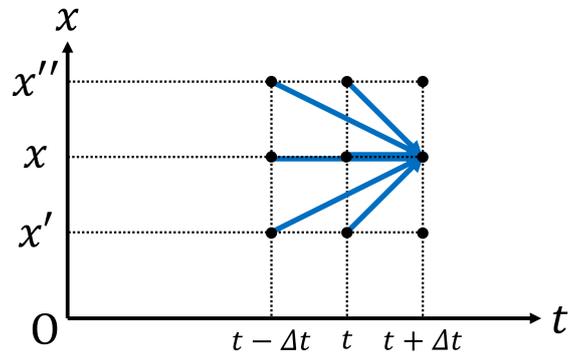


図 15 時空図で見た因果律の連鎖

いかなる無気力の中でもエンジンをかけ得る超自然的な力を仮定する必要がある。そしてまさにその、いかなる無気力の中でもエンジンをかけ得る超自然的な力こそ、自由意志と呼ばれるものであり、哲学的には支持し得ないものなのだ。

■自由意志問題の縮図としての寝坊・長風呂 もう少し卑近な例を挙げよう。おそらく誰もが経験しているように、朝、睡魔に打ち勝って布団から出ることや、お風呂に気持ち良く浸かって脱力しているときに湯船から出るとは至難の業である。一見すると、これには強靱な意志力を要するよう見える。しかし我々は何だかんだで毎日朝起きていますし(基本的には)、お風呂からも有限時間内に脱することができている。しかも面白いことに、それは意志の力によってではなく、むしろ無意識のうちに行われているように思われる。言い換えれば、いつの間にか身体が“決断を下して”おり、気付いたら布団から出て身体を起こしていたり、湯船から出ていたりしているのである。

以上は次の一般論の、分かりやすいミニチュア版である。すなわち、いかなる行為もそれが可能な場合には神(即自然)の必然性に従って自動的に達成されるのに対し、それが神の時間発展の中に含まれていない場合には、空から自由意志でも降ってこない限り不可能である。ところが自由意志は存在しないから、それは絶対に不可能である。ただしここで、単なる意識や意志を自由意志と混同してはならない：

- 無意識の行動のみならず、意識的な行動もまた自由意志によって発動させることはできない。
- 意志の力は存在し得るけれど、神(即自然)の必然性に従って現れるものであり、行為の純粋かつ絶対的なはじまり、あるいは自由意志ではあり得ない。

なお朝起きようとしても起きられないとき、筆者は金縛りに遭いやすい。またそのようなときには、這いずり回って布団から出る経験を確かにするのであるが、それは夢の中の出来事であり、目が覚めると布団の中に引き戻されている(正確には、そこから動けていない)ということは何度も繰り返したりすることがある。

## 5.16 魔法と自由意志

魔法は通常、不可能とされていることを可能にするという意味で、ある種の自由と言える。ところが自由の行使とは往々にして、多くの制約条件の上に成り立っている。実際しばしば言及される例を挙げれば、言葉を操る自由は、文法のような数々の複雑なルールに縛られる不自由と引き換えに得られるものである。ハリポッターなどを観ると、魔法にもルールや仕組みがあるようだ。正しく呪文を唱えなければ、魔法の誤発動に

より事故に繋がる。(少なくともこの映画の世界では)魔法は超自然的であるという点では自由意志に似ているけれど、魔法を使えることは自由意志の行使のように思い通りになるものではなく、むしろ Spinoza 哲学における能動性や〈必然としての自由〉に近いと言えるかもしれない。

## 5.17 言葉遊び, レトリック

### 5.17.1 「無理」の文字通りの意味

「無理」という言葉はある事柄が不可能である理由を適切に表している。すなわち実現され得ないことは、神(即自然)の時間発展の中に含まれていない、あるいは《神の必然性 = 理》を破っているが故に不可能なのである。もう少し言葉遊びを続けよう。

- understand  
under- (…の下に) + stand (立つ) → 物事をそれが生じてくる水面下の原因から理解する。
  - 物理学理論においてより上位に置かれるはずの根源的な法則・原理は、私の中でのイメージとしては“下に”ある。
- 諦める  
明らめる → 「できないこと」を明らかにする。

### 5.17.2 “Let it go” “Let it be”

このような表現は、なるがままに身を委ねるか、それに抗うかを選べる余地があるかのような印象を僅かながら与える。これに対して自由意志が存在しないという主張は、そもそもそのような選択の余地が存在しないということの意味しており、より根本的で徹底した主張である。

- なるようになる
  - whatever happens, happens
- なるようにしかならない
  - that’s the way it goes
- そういふものだ
  - so it goes

### 5.17.3 「自由意志はその定義により存在し得ない」をレトリカルに言うと……

自由意志は生まれた瞬間から死んでおり、ただ亡霊のように概念として彷徨う他ない。「無理なものは無理」というのは正しいけれどトートロジーであり、「不可能を可能にする」と言ったら自己矛盾となる。

### 5.17.4 (腕を上げる) – (腕が上がる)

問 「私が腕を上げる時、私の腕は上がる。ここに問題が生まれる。私が手を上げるという事実から、私の手が上がるという事実を差し引くと何が残るのだろうか。」

答 何も残らない。

問 「私が歩く」から「私のもとで歩行が実現されている」を引いたら、何が残るだろうか？ [14, p.22]

答 何も残らない。

## 5.18 アクラシア (意志の弱さ) について

アクラシアとは、やるべき (とされていること) をせず、誘惑に負けて他のことをやってしまうことを指し、しばしば「意志の弱さ」と訳される。アクラシアを克服するために、何度も誘惑に負けて後悔し、自責の念が生じることが必要だとするならば、誘惑に従うか否かの選択は自由でなければならない。しかし

- これはあくまでアクラシアが自由であることを要請しているに過ぎず、実際にそれが自由であることを意味している訳ではない。
- 誘惑に負けることが自由な選択だと思っていなくても、誘惑に流されるデメリットを体が覚えるまで、何度も痛い目に遭いさえすれば、“別の選択をする” ようになる学習は機械的にも可能であろう。

なお誘惑に負けてやってしまうような別の何かが“逃げ場” としてあるのは、まだマシというものである。逃げ場がない場合には、やるべき (とされている) ことをできずに自責の念の内に留まるしかないため、事態は悲惨なものとなる。遊びも大事だということである。

また人は誘惑に負けて堕ちていくときの落下エネルギーを上手く変換して、何かを成し遂げるということもある。私はたとえば、受験勉強しているフリをして、受験と関係ない勉強ばかりしていた。アクラシアに他ならぬこうした事態は、自由な選択であるどころかむしろ必然であるように考えられるけれど、必然性に従っているからこそ、そこには自由が実現されているように見える (必然としての自由)。

最後に、誘惑には消化 (消費) できるものとそうでないものがある。例えばダイエット中に何かを食べたくなるといった誘惑は、一度それに負けて食べてしまったとしても、次の日にはまた何か食べたくなくなるという意味で、「消化できない誘惑」に分類し得る。これに対し例えば純粋に自分の快樂のためにではなく、世間的な評価を求める欲望から何かを書き上げてしまおうという誘惑は、一度それにはまってしまっても最後まで書き上げてしまえばそれで終わりである。つまり、消化できる誘惑である。

## 5.19 自由意志の否定は論理の問題ではなく、世界観の提示を必要とするか

「自由意志は不可能を可能にするという自己矛盾である」のように、一見すると自由意志は論理の中だけで退けることができるようにも思われる。しかし「自由意志は不可能を可能にする」という仮定は既に、「今考えていることは不可能である」という論点を先取りしており、実際にはこの論法は「必然性」のような、世界のモデルを必要としていることに気付かされる。すると自由意志を否定するには、必ず何らかの世界観を提示する作業が伴わなければならないのかもしれない。ではどのような世界観が自由意志を退ける上で最も重要なものとなるだろうか。私は Spinoza 描像において、自由意志を否定し得る論拠として以下の 3 つを挙げた。

- 要素還元論
- 心身平行論
- 汎神論 (物理法則の支配)

(決定論は自由意志を否定する十分条件ではあるが、必要条件ではない。) 自由意志を否定する上で、これらの間の優劣を判断することは困難である。あるいはこれらの世界観は実は同等なのではないか。(実際、上の 3 つは Spinoza の汎神論に統合され、Spinoza 哲学においては排他的なものではないように。) 例えば心身平行論から出発して精神の身体への影響を否定すると、身体の振舞いは、したがって行為は物体の世界で運行さ

れることになり、「自分の行為」と思っていたものは《他者＝世界》の行為(あるいは出来事)となる。ここでこの《他者＝世界》を神と名付ければ、汎神論へと導かれる、といった具合である。

## 5.20 自由意志と行為

### 5.20.1 「矛盾なく『自由意志は存在しない』とは言えない」の間違い探し

我々は矛盾なく自由意志を否定することができないとする、次のような議論を取り上げよう。すなわち「自由意志は存在しない」と言うことが単なる発声ではなく意味を持つためには、そのように述べることは単なる出来事ではなく行為でなければならない。ところがこれは自由意志が存在しないとするとき、行為もまた存在しなくなることに矛盾する。

以上の議論の問題点は、ひたすら要素還元論的な立場に徹すれば見抜くことができる。すなわち「自由意志は存在しない」と述べるのが、意図した通りの内容を伝える行為と見なせることは、それが実は単なる発声であることと何ら矛盾しない。同様に聞き手がその単なる発声に意味を見出してしまうのも、物理的な粒子の運動や場の時間変化といった出来事の連なりの結果である。「自由意志が存在しない」と主張したり、その主張を理解したりすることは、出来事の連なりの結果現れる「見かけの行為」として充分、実現可能である。そして「自由意志が存在しない」と述べるのが行為と「見なせる」だけならば、それが本当は行為ではなく、自由意志が存在しないことと何ら矛盾しない。「行為」というのは比喩に過ぎないのだから。

### 5.20.2 「行為の契機・源泉は自由意志である」の簡単な反例

自由意志は他行為可能性に関係する精神の作用である。これを行為と出来事の区別の観点から定義するのは無理があるように思われる。例えば食虫植物が昆虫を捕まえ消化するのは「捕食」という行為と捉え得るけれど、これはその植物に自由意志があることを意味しない。

### 5.20.3 主観が行為主体を見出すことは、自由意志を意味するのではなく、不自由な登場人物による物語の描像へと導く

自由意志は存在しない。しかしながら太陽は遠くにあると知っていても、我々は太陽が近くにあるかのように錯覚してしまう。これと同様に、他方で人は人として生きる限り、否応なく「人間」という1つのまとまった存在を見出し、これを行為の主体と認識してしまうことも事実である。しかしこのことを以って、我々が主観的には人の内に、自由意志を想起せざるを得ないと結論するのは早計である。実際、我々が昆虫の飛翔や食虫植物の捕食といった“行為”を普段、機械的なものと見なしていることを踏まえると、人の行為を行為たらしめるのが、自由意志である必要はない。「自由意志は存在しない」という認識の下では、主観が行為主体を捉えることはむしろ、不自由な登場人物の演じる物語の世界へと導くだろう。

## 5.21 帰責と免責

「病気だから仕方ない」と誰かの責任を減免する人が、常に自由意志否定論者とは限らない。免責と引責の関係は、それほど単純ではない。

例えば統合失調症の人が爆発してガラスを壊したとか、誰かに他害的な行為をしたということが起きたときに、二つの態度が生まれる。一つは「あの人病気だからいいよ、いいよ」っていう立場。もう一つは「彼も人間だからちゃんと責任を取らせるべきだ」っていう立場。そういうのがいつも臨床の場で

は対立するんです。実は前者の病気だからいいんだよってという立場の人のほうが、当事者が人間的なことをすればするほど「人と問題」が一緒になったような責任性をその人に押し付けてしまいがちで、結果としてその人を問題視してしまったりする [29, p.163].

また逆説的ではあるが、障害を持つ人をいったん免責することで、かえって本人が責任を引き受けることのできる主体へと生成することが、当事者研究と呼ばれる営みの中では知られている [29, p.162].

## 5.22 病気の責任？

現代社会で幅を利かせている能力主義には、「成功を収める人びとはその成功に値する」という見方が含まれる。そしてこのような信念は容易に、不運な境遇は本人の落ち度だという一種の摂理主義的倫理に通じる。(それは人間の自由を束縛のない意志の実践と考え、人間には自分の運命に対して徹底的な責任があるとするあらゆる倫理の特徴である。) 病気ですらその例外ではない。現に病気は本人が健康でいるための努力を怠った結果であり、自業自得・自己責任であり、救済に値しないとといった政治的な主張も公然となされている [30, pp.68-73].

■責任のレトリック [30, pp.96-100] 1980年代から1990年代にかけて、社会保障制度をめぐる論争では、責任のレトリックが際立った役割を果たした。責任のレトリックによれば「自らに落ち度がないにもかかわらず」困窮している人びとは、コミュニティに助けを求める権利があるとされるが、それは同時に自ら不幸の種をまいた人がそれに値しないことを示唆している。

責任のレトリックは、いまではあまりにもなじみ深いものになっているため、この数十年におけるその独特の意味や、成功に関する能力主義的理解との結びつきは見落とされやすい。(中略) 責任はいまや「自分自身の面倒を見る責任、そしてそれに失敗すれば、結果は自分で引き受ける責任」の意味で使われている。(中略) 間違った行動によるのではなく、不運のせいで苦境にある人びとの福祉受給資格を制限することは、人間を能力や功績に応じて処遇しようとする試みであり、その一例である。

note 背景には自己責任論に基づき福祉削減を目論む新自由主義の流れがある。本来、医療はあらゆる人が生きていく上で欠かせないコモン(共有財産)であり、そこから特定の人のアクセスを排除することは正当化できない。宇沢弘文の言葉を借りれば、医療は市場原理にゆだねてはならない「社会的共通資本」の1つである。

■弱者へのバッシング 弱者をバッシングする者は、自分も病気や事故で簡単に同じ立場に陥る可能性を見落としている。そのような者は邪悪なのではなく、単に想像力を欠いているのであり、端的に言って未熟なのである。新自由主義的な自己責任論の下で弱者をスケープゴートにして切り捨てることは、哲学的なレベルで既に没論理的である(Spinoza 描像)。こうした問題は本来、市場原理の価値観を物差しとしてビジネス用語で語ることはない。しかしここでは敢えてプラグマティックな観点からも述べれば、「生産性」に寄与しない弱者やフリーライダーの排除の徹底を図る社会はかえってコスト・パフォーマンスが悪い。それ以前に、弱者に転落したら自分も切り捨てられるような社会を、誰も住み心地が良いとは思わないだろう。また生活保護受給者に対し「フリーライダーを許すな」「生活保護受給者は遊んでいる」と罵倒する人々は、自身が職を失って生活保護受給者になった場合、身を挺して「フリーライダー」になるだろう。そうでなければ彼らの主張は首尾一貫しないからである [31, p.42].

### 5.22.1 「正常」と「異常」の脱構築

特にミソフォニアのように新しく定義された病気は大抵、医学界内部からも非現実的とされ、信用されない。このため病気をそれとして認めてもらうことは、当事者にとって重要なことである。しかし他方で、病気を「異常」と見なし「治療」という発想も一定の危険性を孕んでおり、完全に無批判に受け容れることはできない。

現代ならば発達障害を考えるとわかりやすいでしょう。昔だったら「風変わりな子」とか「こだわりがある子」と思われていた人たちが、「コミュニケーションの障害がある」、「人の心をうまく先読みできない」などと捉えられるようになりました。つまり、マジョリティの社会のなかでうまくサバイブできないと価値づけされ、括られるわけです。

そうやって初めて、受けられるべきケアが受けられるようになったのだからよかったと多くの人は思うのかもしれませんが、しかしそれは、主流派の世界のなかで主流派のやり方に合わせて生きていくことが前提になっている。ここに注意する必要があります。

(中略)

そして近代化には、ある意味、隔離よりも重要な側面があります。古い時代には隔離していた者たちを、だんだんと、「治療」して社会のなかに戻す動きが出てきます。しかし、それは人に優しい世の中になつたということなのかといたら、そんなことはありません。フーコー的な観点からすると、統治がより巧妙になつたと捉えるべきなんです。つまり、ただ排除しておくのだったらコストがかかるばかりだけれど、そういう人々を主流派の価値観で洗脳し、多少でも役に立つ人間に変化させることができるのであれば、統治する側からすればより都合がいいわけですから。

(中略)

その上で、フーコーには、正常と異常がはっきり区別されないで、曖昧に互いに対して寛容であるような状態をよしとするような、そういう価値観が全体的にあると捉えたらよいと思います [27, pp.90-92].

### 5.22.2 フーコーを超えた「斜め」の関係 [32, 第5章, 第7章]

歴史的にもかつて、精神医療には、医師も患者も、強制入院や隔離や拘束を自明のものとする既存の仕組みに自発的に隷従し、その仕組みの単なる「受益者」「服従集団」である時代があった。このような精神医療の仕組みに対するラディカルな否定から、反精神医学のような「68年」的な思想と運動が生まれた。反精神医学は、おおむね次のような主張を持っていたと言える。すなわち、精神疾患とは、家族や社会のなかの歪みがひとりの人間の心にあらわれたものであり、必ずしもその「患者」が治療されるべきなのではなく、家族や社会の問題もまた検討されるべきである。このことが理解されずにいると、精神医療は、スケープゴートにされた個人に精神疾患というレッテルを貼り、その個人を隔離・監禁する仕組みになってしまう。だからこそ、隔離・監禁の舞台となっている精神病院を改革したり、廃絶したり、それに代わるオルタナティブな場所を自主管理的に運営することを通じて、解放の道を探らなければならない、という主張である。しかし、精神病院を全廃するようなラディカルな運動は、必ずしも成功したわけではない。そこで「ポスト68年」の世代は、既存の精神医学・精神医療に「ノー」を突きつけた運動を受け止めたうえで、それでも精神医学・精神医療を全否定するのではなく、どうにかしてそれらを成立させうる土壌を再整備するという、困難で両義的な課題に取

り組んだのである。具体的には日本やフランスのラ・ボルド病院の場合、精神病院をなくすことよりも、むしろ精神病院は維持したうえで、そのなかでいかに抑圧的でないような実践ができるか、ということが問われた。特にラ・ボルド病院を開院したラカン派の医師ジャン・ウリは、精神病院を廃止すればいいという反精神医学の粗雑な議論の元凶として、フーコーのことも批判していることに注意しよう。「べてるの家」で2001年に始まった当事者研究も、既存の医学を半分借りる「ポスト反精神医学」的な取り組みと言える。精神分析家ガタリの「服従集団(隷属集団)」から「主体集団」へ、というスローガンを参考にすれば、彼らは既存の精神医療という(しばしば抑圧的な)仕組みを自分たちで工夫して組み換えていき、精神医療の実践それ自体を自主管理する「主体集団」、すなわち「当事者」となったのである。空間の比喩を使うなら、そのような「主体集団」は、単に垂直的なヒエラルキーを撤廃するのではなく、水平的なあり方を重視しながらも、かつて存在した垂直的なもの(精神病院)を弱毒化して使う、いわば「斜め」の関係をめざしたのである。そして単にマイノリティとしての「当事者“である”」ことに留まらず、自分とよく似た人たちとの共同研究を通じて、「当事者“になる”」という不断の生成変化のプロセスが「自治」である。

なお、旧来の精神科病棟における「医者が上、患者が下」という垂直的関係を、20世紀型の垂直的政治に、病院の解体と治療の中止を、ウォール街占拠運動に始まる21世紀の水平的な社会運動に対応付けるならば、「ポスト68年」「ポスト反精神医学」の「斜め」の関係は、「ムニシパリズム」や「リーダーフルな運動」と呼ばれる、新しい社会運動の形態にあたる。これらはポスト資本主義としてのコモン型社会を実現するための鍵であり、日本でも岸本聡子が区長を務める杉並区における地べたからの民主主義や、各人が自分の得意分野で組織化を進めている神宮外苑再開発反対運動など、その萌芽が見られる。理論的に言えば、「制度化」や「組織化」そのものは必ずしも上下関係や支配従属を意味せず、「素朴政治」に陥らないためには、積極的に組織化や制度化を行う必要がある。ただし大衆のほうが先に「戦略」を考え、政治家やリーダーたちがそれを実現させる「戦術」を考える、というのが、ネグリたちが提示する「第三の道」である。そして迷いながらも、万人に開かれた形で絶えず組織や制度を作り直し、自己立法を行うことが平等で自律的な「自治」を、宗教セクトや排外主義運動、陰謀論政党などの、所与の価値観に支配されるだけの他律的なアソシエーションから区別するのである。これは明らかに、「当事者“になる”」という不断の生成変化のプロセスに対応している。

## 5.23 自由意志という幻想の適用限界

我々は日常的にはおそらく自由意志を幻想として受け容れている。人は幻想なくして生きられない。しかしながら人が自由意志で選んだと思っている行動は、実際には物理的な出来事から立ち現れる見かけの行為であり、自由意志に基づく行為というのは言わば近似的な見方である。ところが周知のように、あらゆる近似には適用限界がある。それはちょうど物体の運動が光の速度と同程度となる場合や、原子や素粒子のようなマイクロな対象に関しては、非相対論的または古典的な理論が破綻し、自然が相対性理論や量子力学といった本性をあらわにするのと同じことである。自由意志という幻想に関しては、その適用限界は極端な例としては薬物・アルコール依存症といった病気において、卑近な例では受験勉強に対する無気力といった場面で現れる。このような観点からは、理想的な世界とは自由意志の適用限界と対峙せざるを得ない苦境を減らすことであると言える。それを実現するための1つの重要な手段はおそらく、直観に任せて飛躍すれば、新自由主義を資本主義とともに終わらせ、コモンの民主的な自治に基づくポスト希少性と自由の社会を打ち立てることだろう。(実際、心の病気や過激な受験戦争はかなりの程度、資本主義の暴力性の産物と考えられる。6.1節も参照。12節では教育の脱商品化により、受験戦争が緩和(場合によっては消滅)する可能性に言及した。)しかしこのように単なる現実の客観的な記述を超えて理想を語る時、そしてそれを求めて闘うとき、我々は再び主体性(自由意

志) という幻想の助けを必要とするのかもしれない。私は自由意志を認めていないが、私にも人間としての意思はあるということである。

■自由意志を幻想として認める不正義・欺瞞 「自由意志は幻想である」と言っても我々はその幻想を認めなければ生きていけないのだとすれば、それは我々が、自由意志を幻想として認める不正義・欺瞞を逃れられないことを意味する。

## 5.24 山口尚『日本哲学の最前線』第二章について

山口尚『日本哲学の最前線』は2010年代の「日本哲学」を〈自由のための不自由論〉という観点から統一的に捉えており、その第二章では青山拓央『時間と自由意志』が取り上げられている [16, pp.51-78]。以下はそれについてのメモである。

### 概要

青山は時間論に関係する「分岐問題」の考察から、自由意志の概念の矛盾を暴く。他方で人は人間として生きる限り、他者の「二人称的自由」を見出さざるを得ないことを指摘し、人間は自由でありかつ無自由である、とする。

### 「二人称的自由」について

二人称的な他者に関しては「他者の意識が見えないからこそ他者の身体行動の背後に自由意志の働きを想定する」という理路が可能とのことであるが [16, p.61]、自由意志は想定できるというだけであって、それを拒むことは可能であろう。実際、人間を精巧な機械と見なせば、二人称的な他者に特有の(あるいは二人称に限らない他者一般の)予測不可能性は説明がつく。(もっと言えば、人間は精巧な機械である必要すらない。二重振り子のような単純な系であっても、その振舞いは事実上、予測不可能である。) そのように死せる機械、あるいは客観的な物体と見なされた人間は二人称的ではなく三人称的であり、二人称的他者という言葉の中には既に自由意志の契機が含まれているのだと反論されるかもしれない。しかしそれでは言葉の定義が論点を先取りしてしまっている。相手の自由意志を疑いつつ二人称的な他者と接するという事態は、本当に考えられないだろうか。自由意志性に依らず、単に注意をひく度合いから二人称を三人称と区別して特徴付けることは、それほど無理のあることではないように思われる。

### 喫茶店の例について(余談)

蛇足であるが、著者は二人称的自由の導入的な説明を行うにあたって、自身の次のような日常的体験を挙げている [16, p.57]。

例えば私は独りで街に出るのが好きだ。すれ違うひとたちは誰も私のことを気にしていない。私は喫茶店に入り、ゆったりとした時間の流れの中で原稿を書く。周囲の控えめなざわめきが心地よい。ここでは、各席の客は自分のことを行っており、互いへの干渉がない。ひとのいない丘で寝そべて自然の中の自由を満喫する若者のように、私は喫茶店の孤独の中で自由を楽しむ。私を妨げるものは何もなく、私はただ自分のやっていることをやればよい。

この部分は、私のものの感じ方との違いに大いに驚かされた。(もちろん私は著者の感性を批判しているのではない。) 同じような状況では、私は周囲の人間を意識せずにはいられず、(少なくとも主観的には) 周囲の人

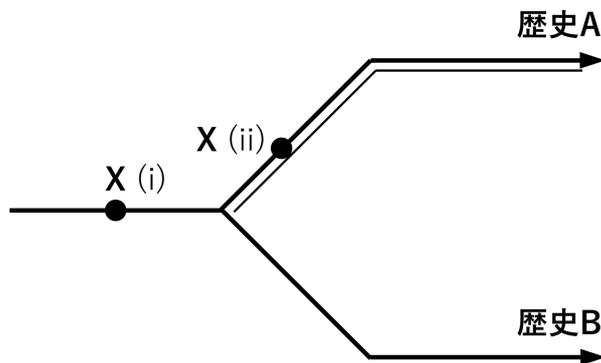


図 16 分岐問題——決断・自由意志が不可能であることの青山拓央による論証

間との間の緊張を経験するだろう。(私の持病ミソフォニアはそれに拍車をかける。) 著者の心境が羨ましい。

#### 分岐問題について

決断の概念は矛盾しており，論理的に不可能であることを示す青山の議論は，率直に言ってやや冗長で未整理の感がある。この点を説明する前に，まずは青山による論証を確認しよう [16, pp.66-69]。図 16 のように，2 通りの未来 (歴史) A,B への枝分かれを想定し，決断の結果，A へ進むことが選ばれたと仮定する。このとき決断 X は分岐点またはその手前にあるか，分岐点より後にあるかのいずれかである。[以下では X が単なる点の名前ではなく，決断という能動的作用を表すことに注意されたい.]

(i) 決断 X が分岐点またはその手前にある場合。

X の時点では B への道が遮断されておらず，B へ進む可能性が残されているため，決断 X は A を選んでいない。[ただしここでは，ダイアグラムにおいて線がつながっている未来は，依然として選び得ることを表すものと暗に約束していることになる.]

(ii) 決断 X が分岐点より後にある場合。

すでに歴史は A へと進むことが決まっているため，X が決断であることに矛盾する。以上より決断はいずれにしても矛盾を生じるから，決断は不可能である。

さて，以上の議論において時間的な要素は，あってもなくても良い挟雑物のように見える。実際，証明は次のように短く述べることができるだろう。すなわち，決断とは複数の可能性があることを前提としていながら，同時にその中から 1 つの可能性を選び出すことで他の可能性を否定するという自己矛盾である。デュリダンのロバのように<sup>\*16</sup>，複数の選択肢が可能ならどれかを選ぶことはできない。また歩き始めた人は，同時に立ち止まっていることができない。人生は選択の連続ではあり得ない。

では量子力学において，状態はあらゆる可能性の重ね合わせであり，観測によって 1 つの状態が選ばれるというのは矛盾だろうか。結果論であるが，現実世界がそのようなあり方で存在している以上，それは矛盾ではあり得ず，人間にとって「選択」に見えるそれも神即自然にとっては必然であると解釈せねばなるまい。あるいは唯一，神だけがそのような「選ぶ」力を持ち，その結果が現実世界の唯一のあり方となる以上，その「選択」は必然と変わらない，と言えようか。青山の分岐問題の文脈では，決断を行う主体があるとすれば，それは歴

\*16 デュリダンのロバは自由意志というよりもむしろ，物理的には対称性の問題である。

史そのものでなければならない。

### 思慮の浅い自由意志否定論に対する批判について (無自由)

人間には自由意志がないので、脳や遺伝や環境などの物質的機構がすべてを決めてしまっている、としばしば言われる。しかし「脳が決定する」といった言い回しは、擬人的に脳に主体性や自由意志を帰すような、不徹底な言い方であると青山は主張する。著者もこれに賛同している [16, pp.71-74]。確かに分からなくもないが、このような表現は比喩として受け容れられないだろうか。なるほど、脳や遺伝子といった一部の構成要素のみが支配的要因であるとするのは公平な立場とは言えない。では、神即自然ならばどうだろうか。Spinoza 哲学において事物が神の必然性に従って生起することを、Spinoza 自身も述べているように「神から決定される」と言うことには、それほど問題があるようには思われない。ここまで来ると、これは単なる言葉の綾であって、適当に言い方を修正すれば良いだけのことに思えてくる。非人格的な物理法則についても同様に、

- 「古典系の時間発展は最小作用原理から決定される」
- 「クォークとグルーオンの相互作用は量子色力学によって記述される」
- 「D-ブレイン上の電磁場は Born-Infeld 理論に支配される」

といった言い方がしばしば用いられるが、ここから擬人的な行為性を徹底的に排除した、代わりになる表現はどのようなものだろうか。上と同じことを、「雨が降る (It rains)」などの非人称表現 [16, pp.73-74] で表すにはどうすれば良いだろうか。その答こそ、おそらくは著者自身も第一章で取り上げた、國分の中動態にあるのではないか。著者の説明を読む限り、著者は人が活動に巻き込まれ「もまれ」ながら [16, pp.35-37]、荒波のうたえで船を操舵するような [16, p.193]、弱い意味での能動性を中動態の中に認めている。しかしながら忘れてはならないのは、Spinoza が自身の汎神論を表現するのに用いている言葉は中動態と見なせることを、國分が指摘していることである。言い換えれば、中動態は事物が単に出来事として生起することを表現し得る [14, pp.236-243]。したがって國分と Spinoza の構想する中動態の世界は、青山が「無自由 (afree)」と呼ぶ、無主体的な出来事がただ生じるだけの自由意志なき世界 [16, p.72] と (基本的には) 同じものと見なせる。著者が『『無自由』は國分の言う『中動態』と同義ではない』 [16, p.74] としているのには、やや疑問が残る。なお「脳が決める」という言い方に青山と著者が主体性や行為や自由意志を見出してしまうのは、「決定する」というのが能動態だからだという理由だとすれば、それこそ國分の指摘する能動/受動パラダイムの罠に陥っていると云わねばなるまい。

最後に「《世界は無自由なのだから私たちは……すべきだ》と提案することは […] 自己矛盾している」 [16, p.76] という指摘について、この点は「である」(事実命題) から「すべき」(当為命題) は導けないという Hume の“法則”に即して理解することも可能である。また「無自由それ自体から実践的指針を得ることは邪道だが、無自由を垣間見たうたえで思索を先鋭化させることにはいかなる問題もない」 [16, p.77] という著者の見解にも賛成である。これについては、「こうあるべき」という当為は独断論に陥るけれど、「こうあって欲しい」と希望を述べる分には、「自分はそう思っている」という単なる事実の表明なので問題ないと言うことができる。ただしこのような論法は論敵も使い得るという点で、諸刃の剣である。要するに我々は本来、事実命題の土俵の上でしか戦うことができないということである。そしてこの戦いも行為ではなく、化学物質が生体分子を破壊するのと同じ意味での出来事である。我々が紙の上のインクの染みや人の話す声に意味を読み取ることと、それがもたら人の脳の物理的な働きの結果であることの間には何ら矛盾はない。(心と身体の関係の問題は残るが、Spinoza の心身平行論はそれに対する、ある程度満足のいく答であろう。)

## 5.25 占星術とキリスト教の自由意志

アリストテレスの自然学は、自然がその内在的法則のみによって自己展開することを想定しており、人間の自由意志を否定しかねないという点だけでも、キリスト教にとって受け容れ難いものであった。アリストテレス自然学に思想的な基礎を置き、人間の運命は星辰に委ねられているとする占星術も同様であった。ところがトマス・アクィナスとその師アルベルトゥス・マグヌスは、占星術をキリスト教の自由意志と折り合わせる論理を編み出した。すなわち天体は物体としての人間の身体には作用するものの、非物体としての人間の精神や意志には作用し得ないと語ることで、(少なくとも見かけ上は)自由意志を占星術の支配から解放したのである [33, p.11,p.13,pp.224-225]。しかしこの論法には誰もがすぐに思い付く弱点がある。あるいはこの論法は自由意志の概念が本来的に孕んでいる自家撞着をさらけ出している：物体が精神の作用としての自由意志に影響しないのと同様、自由意志もまた物体としての身体に影響を与えることはできないはずである。自らの身体を動かさない自由意志の概念に、いったい何の意味があるのだろうか。

## 6 「自由意志の否定」とは違った仕方

何らかの仕事ができないことを責められている人が、自分の怠慢を「自由意志が存在しないから仕方がない」と弁明するのは、その人の置かれた状況の説明としてあまりにも正しい。(ここでの「仕事」は必ずしも職業に限定しない。例えば勉強も広義の仕事に含めることができる。このことを表すために、以下では《仕事》と表記する。)しかし問題は自由意志が存在しないことに由来しており、それを括弧に入れて考えることは許されないとしても、「不当な非難」を回避するという目的のためには、必ずしも「自由意志を否定する」という戦略を採らなくても良いのかもしれない。例えば批判する側の外野の人間が、実はその《仕事》のこと(問題の難しさや試行錯誤の必要性)をよく理解していないために、「本人のやる気の問題だ」という精神論に基づいて安易な批判をしている場合が考えられる(12.5節も参照)。このようなときには、相手に理解をもたらすことが重要となる。(もっとも相手が頑迷で聞く耳を持たないがために、事態が深刻になっているのかもしれないが。)《仕事》ができないならば、それがどのような点で困難であるかを言語化するだけでもかなり見え方が違ってくるだろう。(私はSpinoza描像において、そのような作業にも部分的に取り組んだ(8.11節, 8.12節)。)また《仕事》の才能があっても、あるいは努力してきたとしても、結果が出ないため周囲から誤解され、不当な扱いを受けているという場合にも、相手に理解をもたらすことが解決策となる(12.5節も参照)。(注:努力できることは才能に含まれる。より正確には、努力するか否かを選べるような自由意志は存在しない。)ここでのアイデアをスローガンの的に言えば、「努力は報われるものではなく、報わせるものである」となる。実に「結果だけでなく、過程も大事」であれば、過程そのものを目に見える形(結果)にすれば良い。(もちろん、そうしなければいけないとまでは思わないが。)例えば、何かを勉強してきたならノートを書き残す(そして公開する)ことなどである。こうすればテストの点数だけが唯一の「結果」ではなくなる。(ある座標軸に関する成分が“小さい”ベクトルも、別の座標軸に関する成分は“大きい”かもしれない。)またいつかは周囲を見返すことができるかもしれない。ただし形にするには時間がかかるため、これはある種の“時間差攻撃”となり、それを達成するのは焦りと不安との戦いになるかもしれない。もちろん以上はあくまで理想の物語であり、それが神の時間発展の中に含まれているかは(神即自然の必然性から導かれるかは)別問題である。

### 6.1 ポスト新自由主義を構想すること

私の中学・高校時代のある社会科の教師は、教育の名のもとに度々、競争の激化した現代社会の実情について説明することを通じて、時にそれとなく、時にあからさまに競争を礼賛し、自己責任論をほめかしていた(それは気持ちの良いことだったのだろう)。私はそれを敵対視していた。自由意志は存在しないという私の哲学観と相容れないものだったからである。しかしながら私は漠然とはあるが、自己責任論に対抗する上で、単に自由意志の不在を訴えるだけでは不十分であり、哲学以外のアプローチも必要になると感じていた。中高時代から10年近く経ってから、ようやくあの教師の話していたことは新自由主義的なイデオロギーそのものだったのだということを私は知った。彼はまさしく新自由主義的な価値観を内面化した典型的な人間の1人だったのである(図3も参照)。これを踏まえると、今では『自由意志の否定』とは違った仕方』に当てはまるものが何であるか、1つの明確な答が見えてくる。それは——一気に結論へ飛躍すれば——コモンの民主的な自治に基づくポスト希少性と自由の社会を打ち立て、新自由主義を資本主義ごと葬り去ることだったのだ。

## 6.2 サンデル『実力も運のうち 能力主義は正義か?』自由意志否定論の文脈として

「運も実力のうち」と言われるけれど、正しくは「実力も運のうち」である。仮に「実力」と呼べるものを定義できるとしても、実力を望むだけ身に付けられるような自由意志は存在しないから。「実力も運のうち」というのは、私が自由意志否定論を標語的に表す謳い文句として思い付いたものである。後日、これと全く同じタイトルの本があることを知った。マイケル・サンデルの『実力も運のうち 能力主義は正義か?』である [30]。この本は自由意志否定論に文脈を与え、それを「現代的な競争社会の論理を克服するための哲学」として打ち出せば良いことに気付かせてくれた。すなわち、努力が報われないことや自分の能力が認められないことへの憤りもよく理解できる。しかしながら競争原理や能力主義の正当性が近・現代的な主体的人間像に求められ、それが「“負け組”の失敗は自業自得だ」という自己責任論や批判と連動するならば、そこには見過ごすことのできない重大な認識の誤りと不正義が含まれると言わねばならない。と言うのも、人間は決して行為の自由な主体ではあり得ないからである、というように。自分が何と戦っていたのか、ようやく言語化できたように思う。Spinoza 描像は「実力も運のうち」と言える哲学的理由である。

サンデル『実力も運のうち』のまとめノートを以下のページに置いておく。

<http://everything-arises-from-the-principle-of-physics.com/preamble/spinoza-picture>

■(コラム) 新しい偶像について ニーチェの次の苛烈な一節は、新自由主義に対する皮肉のようにも読める。

よく見てもらいたい。この余計な人間たちを！連中はいつも病気だ。胆汁を吐き、吐いた胆汁を新聞と呼んでいる。おたがいに相手を呑みこむのだが、消化することすらできない。

よく見てもらいたい。この余計な人間たちを！連中は、富を手に入れ、そのせいでさらに貧しくなる。連中は、権力をほしがる。だがまず、権力の金槌である大金をほしがる。——この貧乏人たちめ！

見てもらいたい。このすばしこい猿たちがよじ登るのを！われ先に高くよじ登ろうとして、引っ張り合って、いっしょに泥沼に落ちていく。

みんなが王座につこうとする。狂気の沙汰だ。——幸せが王座にあるとでも思っているのか！しかし王座にすわっているのは、しばしば泥にすぎない。——それに王座も、しばしば泥のうえにすわっているだけだ。

(中略)

大いなる魂には、まだこの地上に席が用意されている。ひとりぼっちやふたりぼっちには、まだ空席がたくさんある。そこには静かな海の香りがただよっている。

大いなる魂には、自由な生活がまだ自由にできる。じっさい、持たざる者は、心を奪われることもない。ほめられるべきは、小さな貧しさなのだ！ [34, pp.99-101]

## 6.3 Spinoza 描像の歴史

6.1 節、6.2 節では当初から Spinoza 描像の問題意識として、自己責任論を中心とする新自由主義的イデオロギーがあることについてまとめた。

Spinoza 描像は私が中学 3 年生の頃から考え続けてきたことである。主体的人間像や「べきだ」論の支配下・圧力下で、そのアンチテーゼとしての Spinoza 描像にたどり着いたものの、そのようなイデオロギーが幅を利かせている状況にあっては、Spinoza 描像に固執しイデオロギーとの一人相撲を際限なく繰り返す他なかった。

■Spinoza 描像の純粋な魅力 →Spinoza 描像への傾倒 Spinoza 描像の真実味はそれ自体が魅力であり、人を虜にするのに十分である。しかし Spinoza 描像は単に真なる認識であるだけでなく、現代的なイデオロギーを

克服する上での出発点になり得る。

■イデオロギーの圧力 → Spinoza 描像への傾倒・Spinoza 哲学への共感 イデオロギーの圧力が人を Spinoza 描像に (臆げながらも) 開眼させるトリガーとなるという可能性もある。また人間は自然の法則から自由でないことを徹底的に説き、善悪の彼岸に聳え立つ Spinoza 哲学そのものも、イデオロギーの攻撃に曝されている者には心強く痛快だろう。

■Spinoza 描像への傾倒 → Spinoza 哲学への共感 既に Spinoza 描像へと導かれた者が Spinoza 哲学を見れば、(恐れ多くも) 我が意を得たりと思うのはあり得る話である。

実際、私が Spinoza 哲学を知った高校2年生の時点では既に自分の中に Spinoza 描像の原型となるアイデアは出そろっており、Spinoza 哲学を受け容れる下地が出来上がっていた。もっとも当時は心身平行論や汎神論的なイメージはわき役で、人間の振舞いや精神活動を神経活動の帰結・産物とするイメージの方が支配的であった。

■Spinoza 描像への傾倒 → イデオロギーへの反応 一度 Spinoza 描像という免疫を得ると、Spinoza 描像のリアリティーにも関わらずイデオロギーが依然として世間で猛威を振るっていることをかえって敏感に反応し、違和感や不満を抱くようになるかもしれない。

■イデオロギーへの反応 ⇄ Spinoza 描像への傾倒 この事態はアレルギー反応の様相を呈し、より一層 Spinoza 描像を強く求めるという自己完結的な循環過程へと発展し得る。

この「イデオロギー」と「Spinoza 描像への傾倒」の間の振動において、初期状態がどちらなのかを判断するのは困難である。これは鶏と卵のどちらが先かというような問題である。

## 7 Hume の“法則”の適用例

既に述べたように、「である」という事実命題から「すべき」という当為命題は導けないと考えられる。このことは Hume の“法則”と呼ばれている。例えば「競争が社会を発展させる」という主張は、文字通りの意味に受け取れば「事実を言ったまで」と言えるかもしれない。しかし、それに対して「だから何?」と問い質したとき、「だから君たちは競争するべきだ」という答えが返ってきたとしたら、それは論理が飛躍していると言わねばならない<sup>\*17</sup>。「競争が社会を発展させる」という事実命題だけから「競争するべきだ」という当為命題は導けないからである。「競争するべきだ」という当為命題を結論として導く際、「競争が社会を発展させる」という事実命題は小前提にすぎず、大前提として「社会の発展に貢献するべきだ」といった当為命題にも依拠せざるを得ない：

- 競争が社会を発展させると言っても、社会の発展に貢献するべきだという前提を認めなければ、競争するべきだという主張は導けない。
  - － なお競争が社会を発展させるのに十分だとしても、必要だとは言えない。

この他にも事実命題だけから当為命題は導けないことを指摘できるような Hume の“法則”の適用例は、以下のように無数に存在する。このうち初めの 2 つの例は Spinoza 描像の内容と密接に関係している。

- 「自由意志は存在する」と言う人は、  
正確には「自由意志を否定するべきではない」と思っているのではないか。
  - － 「人間には自由意志がある」という信念は往々にしておそらく、人間は責任能力のある主体でなければならないという規範的命題から要請される、「人間には自由意志があるべきだ」という当為命題が知らず知らずのうちに変装したものであって、現実世界に対する純粋な認識として述べられているのではない。
- 「人を殺すべきではない」というのは、正確には「殺人が起きないでほしい」ということだろう。「人を殺すべきではない」と言うとは独断論に陥るけれども、「殺人が起きないでほしい」という分には嘘にならない。
  - － これは殺人を擁護するものではない。
- 仮に本を読まないと「常識」が身に付かないとしても、「常識」を身に付けるべきだという前提を認めなければ、本を読むべきだという主張は導けない。
  - － なお 100 人いれば 100 通りの「常識」の定義があるといっても過言ではなく、「常識」を身につけようとあがいても切りがない。
- 仮にアルバイトをしないと「偏った人間」になるとしても、「偏った人間」にならないべきだという前提を認めなければ、アルバイトをするべきだという主張は導けない。
- 運動は体に「良い」と言っても、体に「良い」ことは何であれすべきだという前提を認めなければ、運動するべきだという主張は導けない。
  - － 「良い」という表現は漠然としている。
  - － 「良い」という表現は無条件に求めるべきものであるという当為命題を含意しており、

<sup>\*17</sup> このように「事実を言ったまで」という場合でも、しばしば言外には相手の「あるべき姿」が想定されている。

「運動は体に良いから運動するべき」という主張は同語反復にすぎないようにも見える。

しかし上記のように運動が健康を維持するのに十分だとしても、必要だとは言えない。

－ 地面に対する静止も広義の運動である。

- 市民清掃は重要だと言っても、重要なことは何であれすべきだという前提を認めなければ、市民清掃に参加するべきだという主張は導けない。

－ 「重要」という表現は漠然としている。

「市民清掃をすれば地域を衛生に保てる」という意味にとったとしても、

＊ 地域の衛生に貢献するべきだという前提を認めなければ云々。

＊ 地域の衛生にとって市民清掃が必要不可欠とは言えない。

- ○○が言い訳であると言っても、言い訳を言うてはならないという前提を認めなければ、○○を言うてはならないという主張は導けない。
- みんな○○をやっていると言っても（協調性がないと言っても）、みんなと行動を共にしなければならぬという前提を認めなければ、自分も○○をしなければならぬという主張は導けない。
- 人間は自然と共生してきたと言っても、自然との関係を変えてはならないという前提を認めなければ、今後自然を一方向的に支配してはならないという主張は導けない。
  - － ここでは人間を自然から区別した。
- 「そんなことは無理だよ（ありえない）」と言われても、  
そうであってほしいという気持ちに変わりはない。  
「理想を抱くべきでない」とまでは言えない。
  - － 「そんなことは無理だよ（ありえない）」という人の本心は  
「上手くいかないでほしい」なのではないか。

■ Hume の“法則”を逆手に取られる可能性 「～すべき」という恣意性・無根拠性・虚構性を免れない発言も、以下のように「～してほしい」と言えば嘘にはならないことになる。

「これぐらい知っているべき」 → 「これぐらい知っていてほしい」

「将来のビジョンを持つべき」 → 「将来のビジョンを持って頑張ってほしい」

偽善的である。

もっともこれらが事実命題の仮面を被った当為命題であることは容易に察知できる。

■ クレームについて 当為命題は絶対的な正当性を持ちえない以上、他者に何らかの配慮を求めることは当然の権利として要求することはできず、原理的には必然的にプラグマティックな「お願い」や「お伺い」という形をとらざるを得ない。実際、それが市民的に成熟した配慮を求める際の方法であり、それが分からないクレマーは端的に言って未熟である。

## 8 Spinoza 描像に抵触する概念・表現

近・現代的な主体的人間像やそれに基づく自己責任論は常識として根深く浸透しており、疑われることなく私たちの社会を伏流し、幅を利かせている支配的なイデオロギーであると考えられる。Spinoza 描像はこのような現代的イデオロギーと関係する批判や偏見に対するアンチテーゼとなっており、競争原理や能力主義の論理から身を守り、これに一矢を報いるような、言わば護身術として機能する。Spinoza 描像の核となるアイデアは「自由意志の否定」と「当為命題の虚構性」であり、これらは論敵の主張を根底からひっくり返して骨抜きにし、無力化・一蹴することができる。Spinoza 描像は「それを言ったらお終い」というような開き直りとも言えるかもしれない。まさしくお終いにしてやろうというわけである。

Spinoza 描像の「やろうとしていること」 私が Spinoza 描像を唱えるのは、単にそれが真理だからというだけではない。ここで改めて Spinoza 描像の導入文を書くとする、Spinoza 描像の「やろうとしていること」は(少なくとも1面的には)次のようなイデオロギー、およびそれに基づく批判に対抗する哲学として粗く理解できる。

- 「頑張らないと生きていけない」という“脅し”
- 「頑張らない本人が悪い」という自己責任論
- 「頑張るべきだ」という不当な“決めつけ・強制”

Spinoza 描像はこれに対して、「自由意志の否定」と「べきだ論(当為命題)の虚構性」で以って応える。こう書くと安易な読者は誤解されるかもしれないが、私は決して「頑張ること」自体を否定しているわけではない。むしろ本人が大事にしており、熱心に取り組んでいるものがある場合、本人のやってきたことがなかったことにされたり、周りが単なる嫉妬心や無理解からそれを否定したりすることは嘆かわしいことである。その人が「周りも自分と同じように頑張るべきだ」などと主張しない限り、何ら問題はないはずだ。

★ Spinoza 描像の「やろうとしていること」は、  
「努力神話の克服」などとも言い表せる(第6.2章を併せて参照)。

本章では「人間には自由意志がある」あるいは「べきだ論(当為命題)を正当化できる」というイデオロギーを背景とする表現などを具体的に取り上げ、Spinoza 描像の立場からこれらについて改めて検討する(既に第7章でも Hume の法則の適用例としていくつか挙げた)。このような作業は読者の理論武装に役立つだろう。

また近・現代的な主体的人間像や「べきだ」論に違和感を抱く読者(皆、潜在的な Spinoza 主義者である)が、その違和感を具体的に言語化する上で Spinoza 描像は有用である。(一般に自分の違和感の正体を言い当て、それに反駁を加え得るような独自の意味体系を発見・確立し、さらにそれを相手に納得させるのは一筋縄ではいかない。考えを洗練させるほど、異なる意味体系に属する周囲の人間の常識とかみ合わなくなるだろう。)

### 8.1 要素還元論に反する表現

- 「自分との戦い(図5参照)」「克己」「自律」「自己管理(self management)」
  - － 「頭を使」い、「自分と戦」い、「己を克服」し、「自らを律」し、「管理」することのできる主体は見出せない(図17参照)。

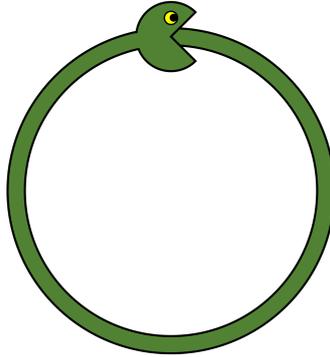


図 17 「自分との戦い」という自己矛盾，あるいは「やる気スイッチを押すためのやる気スイッチを押す必要がある」という無限後退 (9.2 節) は，ウロボロスに似ている。周知のようにウロボロスとは自分の尾に噛みつき輪を成している蛇であり，無限大の記号  $\infty$  の由来でもある。

- 「頭を使え」
  - － 頭は自然に働くものである。
- 「周りに流されるな」
  - － 我々は流れそのものである。つまり流れゆく物質が一時的に形作る淀みである [35]。  
あるいは空間的に分布する場の局所的な模様のようなものである。

思うに人は「自主的・主体的」といった言い回しを軽々しく使いすぎる。自主的・主体的に物事に取り組んでいる人は確かに完全に強制されて仕事をしているわけではないのだろうが，一般的に言って彼ら彼女らは上手く仕事の場という波に乗っているというのが正確であり，それは中動的な過程である (第 11 章を参照)。他方で自主性・主体性という言葉は，完全な能動性という印象を与え得るミスリーディングな表現であって，信用ならない。

「元気はもらうものではなく，自分で出すもの」といったレトリックもまた「能動/受動」のパラダイムに深く囚われており，中動的な視点が欠けていることが窺える。

## 8.2 自由意志を認めるような表現

「未来を選ぶ」「人生は選択の連続である」……錯覚・幻想である。

「自分のことは自分でやるしかない」……なおかつ，本人にもどうにもできない場合がある。

「自分を変える」「未来は変えられる」……以前と比べて物事の在り方が変わることはありうる。

例えば遺伝子治療の発展により難病を治せるようになるなど。  
但しそれは神即自然の必然性を逃れたのではない。

「故意犯は過失犯より悪質」……犯罪は故意・過失に無関係に避けられない。

{ 意識に上る行動 (意識は行動をモニターするだけ)  
 { 無意識の行動 (大部分を占める・ゾンビシステムが実行)  
 のいずれも精神は阻止できない。

### 8.3 出来事の不可避性に反する表現

「できなかったのではなく、やらなかっただけ」  
⇔ 「できたのに、やらなかった」  
⇔ 「ある事態を避けられたのに、避けるのを怠った」  
⇔ 「本気を出していない」

という表現は以下に反する。

「やらなかったこと」 ⇒ 「実際に起きたこと」  
⇒ 「避けられなかったこと」 (∵ Spinoza 描像)  
⇒ 「できなかったこと」

なお上記と

「できなかったこと」 ⇒ 「やらなかったこと」

を合わせると、「やらなかったこと」と「できなかったこと」は同じであることが分かる。  
ある意味、自然は常に「本気を出している」と言える。

### 8.4 Laplace の悪魔と未来からの逆算・無限小の可能性

未来から逆算して今やるべきことを考えろという教訓がある。しかし未来からの逆算ができるためには、この世は決定論的であることが必要であり、同時に私たちは未来からの逆算を正確に実行できる Laplace の悪魔のような頭脳を持ち合わせていなければならない。このとき理想の未来から逆算した現在を現実の現在と比較して、その理想が実現可能か否かが決まってしまうはずである。

また、「君たちには無限の可能性がある」という常套句がある。Laplace の悪魔にとっては未来は一通りだから、任意の理想の実現可能性は1か0のいずれかである。よって実現可能性がゼロの理想に対しては、あえて言えば「君たちには無限小の可能性がある」となる。

### 8.5 Spinoza 描像に抵触するその他の概念・表現

- 「超常現象」「超自然現象」
  - － すべての存在は神即自然の内にある (『エティカ』第一部定理 15 [3, p.26]).  
よって幽霊が実際に現れたらそれも自然現象であることになる  
(そうは言っても幽霊が怖いことには変わらない).
- (人間にとって) 「非合理的」「異常」「不可解」な行動
  - － それが自然法則に従って生起している以上、自然の理には適っている。
- 「天然」と「人工」, 「自然」と「不自然」, 「生」と「死」の区別
  - － これらは自然に本来的に備わった価値・概念ではなく、線引きは人為的である。
- 「精神力」「メンタル」「気持ち」「やる気」「気合」「根性」
  - － これらは身体に働きかけ得ると見なされる限り、心身平行論に反する。

- 「頭では分かる」「身体で覚える」

- 精神が身体状態に対応する状態をとらないかのような印象を与え、心身平行論に反する。

■ 「〇〇力」という表現の氾濫 失敗の原因は個人の「〇〇力」不足にあると言われることがある。「〇〇力」という表現は実体がなく、状況の数だけでちり上げられる：

「コミュニケーション能力」「行動力」「指導力」「提案力」「企画力」「判断力」「注意力」「創造力」「想像力」「女子力」「実力」「計算力」「英語力」「読解力」「運動能力」(運動神経)……。

こうした概念は資本家が諸問題を個々の労働者の能力に帰責するための方便として都合が良い(第9章も参照)。また大学におけるいわゆる「便所飯」の問題は若者の「コミュ力」の低下が原因と考えられがちであるが、それも責任転嫁というものである。真の原因は大学という空間の新自由主義的な再編・管理がサークル・スペースなどを潰し、あらゆる場所を「自分がそこにいて良いことを証明しなければならない場所」に変え、学生の居場所を奪ったことにある [32, pp.39-41]。

■ 心身平行論, 脳の擬人化 「悲しいから泣く」と言うのは心身平行論の立場からすれば正確でない。悲しいという気持ちに対応する身体(特に脳)の状態が人を泣かせるのである。ただし悲しいという気持ちに対応する夥しい数の神経細胞から成る脳の状態を安直に擬人化して、このことを「脳が悲しむと人は泣く」と言うことはできるかもしれない。

■ あの世の存在を仮定すると、あの世はこの世の一部となる やや思弁的な議論となるが、もしあの世が存在するならば、人はこの世からあの世に移る瞬間、この世の法則とあの世の法則に同時に支配されると考え得る。これら2つの法則に従う運動に矛盾が生じないためには、あの世の法則はこの世の物理法則と同一でなければならないように思われる。よって私たちが支配している物理法則に従う世界をこの世と呼ぶならば、あの世はこの世の一部であることになる。これはこの世、すなわち神即自然だけが実在することを意味している。生まれ変わり 我々が神即自然の一時的な現れであり、人は絶えず生まれ、死んだら神へと帰すならば、人は何らかの意味で生まれ変わると考えることはさほど見当違いなことではなからう。

■ 心を無にして一球入魂? 洗練された動作は無意識によって実現されるものであり、そのことで却って、その人は自分の身体を自由にコントロールしていると思なされる。故にスポーツでは心を無にし、動作を無意識に落とし込むことが要求されよう。ところが「一球入魂」(弓道では「一射入魂」)といったスローガンは、これとはベクトルが逆を向いているように思われる。

■ 「病は気から」

- 心の状態は身体の状態に影響を与え得るのか。
- 本当に気持ち次第だとしても、その気持ちは自由にコントロールできるものではないのではないか。
- むしろ気力は病の状態によって制限されているのではないか(気は病から)。

■ 運転免許更新にて 自動車運転安全講習のビデオで、「自動車社会においても主役は人間です」「事故を防ぐのはあなたの心です」といった趣旨のことが述べられていた。人間の意志や主体性がわざとらしいほど大げさに強調されていた。

## 8.6 非難

- あからさまに「あるべき姿」を想定しているもの

「やるべきことをやれ」  
「やるべきと分かっている、  
何故やらないのか?」……このような人間にとっての非合理性も  
神即自然の必然性には矛盾しない。

「(若者なんだから)~して当然だ」  
「幼稚園児じゃないんだから~しろよ」  
「頭が付いてるんだから考えろよ」  
「(人間・社会人として) いかがなものか」 } ……「(若者・大人・人間・社会人は) こうあるべき」と想定。

「違う」「おかしい」……「あるべき姿」と比べて。  
「ちゃんとしろ」「しっかりしろ」……「ちゃんと」した、「しっかり」したあるべき状態を想定。  
「(お前の行動は) あり得ない」……現実起こったのだからあり得たのである。  
「こうあるべき」という「常識」に人間が必ず従うと  
仮定した場合に、「あり得ない」と言っているにすぎない。  
「お前が~すればいいんだよ」……十分条件であったとしても必要条件ではない。

- 自己責任論

「自業自得だよ」「(失敗したのは) お前が注意不足だったからだろ?」「寝てる奴が悪い」

- クローズド・クエスション

「はい」か「いいえ」でしか答えられない問いかけ。相手の答えを誘導する効果がある。

「~したいんでしょ?」……「はい」という答えを引き出し、相手の意思を  
自分に都合の良いように解釈、既成事実化。

「~できるの?」「~できないんでしょ?」……相手の欠点を確認・指摘。

相手を過小評価 → 予言の自己実現

- 単純な語彙で済まされているため、その明確な内容を文脈から把握するのが困難な捨て台詞

「舐めてる」「甘いんだよ」「屁理屈だ」(本当はそうでなくても)「綺麗事だ」「最低」

「馬鹿だね」「すごいね」(皮肉で)「駄目だ」「言語道断だ」

- 言語にはならない、“通り魔的な”シグナル

舌打ち、咳払い、ドアを激しく閉める音、ペンのノック音、新聞をめくる音

今思えばこれらの音に対する突発的な緊張は、ミソフォニアの前兆だったのかもしれない。

ミソフォニアは特定の音に対して反射的に激しい怒りに駆られる病気である。

詳しくは以下のページを参照されたい。

<http://everything-arises-from-the-principle-of-physics.com/misophonia>

ここでの分類は便宜的なものであり、以上とは異なる方法で分類することも可能だろう。例えば上には挙げなかったが、「逃げてる」という非難を考えよう。これは困難に立ち向かうという『あるべき姿』を想定し

た発言と取れる。同時に困難に立ち向かえるにも関わらず勝手に逃げ出している本人が悪いという「自己責任論」に分類することも考え得る。

## 8.7 「やればできる」というトートロジー

「やればできる」というのは結局のところトートロジー(同語反復)に過ぎない。トートロジーとは「毒は体に悪い」「学校は行くべき場所だから行くべきだ」のように、何も言っていないに等しい主張のことである。「やればできる」と言うのも文字通りの意味にとれば、何も言っていないに等しいだろう。と言うのも、やったのならばできたのだから「やればできる」というのは当たり前である。できないことをやったとしたら矛盾である(「不可能を可能にする」という表現も同様に矛盾している)。この点を揶揄して、「やればできるよ」と言われたら「できればやるよ」と返すことができる。実に「やれば」と簡単に言うが、それが簡単にはできないから問題なのである。

もっともこれは揚げ足をとっているだけだという向きもあるだろう。つまり「やればできる」と言う人は、このような意図で「やればできる」と言っている訳ではないと反論されるかもしれない。実際には「やればできる」とは、あなたの直面している試練・困難は乗り越えられるレベルのものであり、自分次第で切り抜かれるということを意味していると考えられる。

なるほど、一見するとこれなら「やればできる」と言うことは意味を成すように思われる。しかし自由意志は存在しないため、試練・困難が乗り越えられるレベルのものであるとしても、それを乗り越えられるか否かが自分次第であるということはある得ない。何故なら、試練・困難が乗り越えられるレベルのものであることは、実際に試練を乗り越えた場合にのみ正しいからである。言い換えれば、乗り越えられそうなレベルであるのに、あえて目標に立ち向かわないという場合にも、自由意志が存在しない以上、目標に立ち向かうということは初めから不可能だったのであり、本当はそれは乗り越えられない試練であったことになるのである。「歩く」という簡単な動作ですら、神(即自然)から決定されない限り不可能である。人は立ち止まっているとき、歩いていることはできないし、歩いているとき、止まっていることはできない。このように突き詰めて考えれば、やはり「やればできる」というのは「やったことはできたことである」というトートロジーであり、「できればやるよ」という反論は依然として有効と考えられる。

以上の議論は前述の、「できなかったこと」と「やらなかったこと」は同じであるということを行っている。この結論は自由意志が存在しないことを定理と見れば、言わばそこから直ちに導かれる定理の系に当たる。

■まとめ 「やればできる」という常套句に違和感を覚えるとするれば、その背後に自由意志に対する信仰が見え隠れするからだろう。事実、「やればできる」という言葉の発している「自分次第」というメッセージ自体、自由意志の概念を強く想起させる。そして自由意志を否定すると、「やればできる」というのは「あなた次第で試練・困難は乗り越えられる」という本来の意味を失い、「やったことはできたことである」という自明なトートロジーへと墮すのである。

■結論 「やればできる」というのは文字通りの意味にとれば自明なトートロジーにすぎず、実際には言外には「やるかやらないかは自分次第」という人間の主体性と自由意志を示唆している。

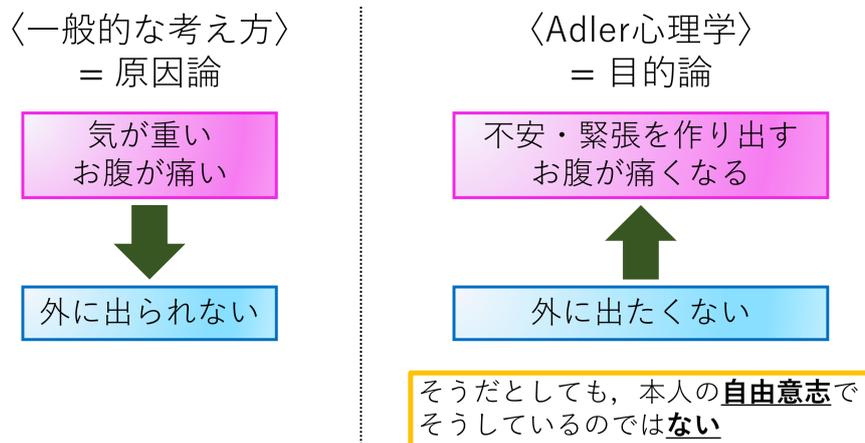
## 8.8 Adler 心理学における目的論

ここで Adler 心理学に触れておく。Adler 心理学では、原因が結果を引き起こすのではなく、目的の達成を後押しするために原因が作り出されると考える [36, pp.27-29, pp.53-54].

- 恋人との関係を始める (やめる) ために相手の長所 (短所) を見つける。
- 相手の同情を引くために悲しみという感情を作り出す。
- 外に出ないという目的のために不安という感情を作り出す。
- 学校に行きたくないから、お腹が痛くなる。
- 告白して振られたくないから、赤面症 (対人関係を避けようとする神経症) を作り出す。

このような目的論に従えば、例えば気が重いから、あるいは体調が悪いから外に出られないのではなく、外に出たくないから不安になったりお腹が痛くなったりするのだということになる。なるほど、こうした観点から理解できる病気も、確かに存在するならば、病気の一定の理解に資するという点で、Adler 心理学は肯定的に評価し得る。

しかしながら、こうした捉え方は原因とされるものを「言い訳」として片付ける見方へと、容易に横滑りする危険がある。言い換えれば、問題は Adler 心理学そのものというよりも、むしろその解釈としての自己責任論にある。実際、仮に Adler 心理学的な目的論が正しいとしても、既に繰り返し説明したように、人は自由意志で不安や緊張、腹痛を作り出しているわけではない (図 18 参照)。外に出たくないと思うことも、不安や緊張に襲われたり、お腹が痛くなったりすることも、本人にはどうしようもないことである。そうであるならば、外に出たくないというまさにそのことで悩んでいる人に、「不安や緊張は言い訳だ」「お前は外に出たくないだけだ」と言うことには、何の意味もない；むしろ相手を追い詰めることになり、逆効果である。



このスライドは  
堀江貴文, 2017, 本音で生きる 一秒も後悔しない強い生き方, SBクリエイティブ株式会社, 東京, 61  
の図を参考にして作成した。

図 18 Adler 心理学の目的論は、自由意志が存在しないことを見過ごしている

このように考えることができないのは、知らず知らずの内に現代人が「自由意志」という信仰に脳髓を汚染されてしまっているせいだろう。あきれたことに Adler 心理学の一般向けの解説書には、目的論を説明した箇所、自由意志は存在すると明記し、このような責任転嫁を露骨に行っているものがある：

人の行為は、原因によってすべてを説明し尽くされるわけではなく、自由意志は必ず原因をすり抜けていきます。すべてが必然に解消されると考えるには、自由意志はあまりに自明でヴィヴィッドです。それにも関わらず、何かによって自分の今の生き方や行動が決定されていると見たい人は、そのように見ることで自分の責任を曖昧にしたいのです [36, p.28].

自由意志の存在を「あまりに自明でヴィヴィッド」の一言で済ませるのは、あまりに強引な説明であり、怠慢な思考停止と言わざるを得ない。むしろ人に責任を帰属させるために自由意志の概念が事後的に適用されるならば [13] [14, p.26,p.132], その自由意志こそが言い訳であることになる。

■学校や会社へ行けるという“惰性” 学校や会社に行けない人は意志が弱いのだと思われるかもしれない。しかし人は普通、意志の力で毎日学校や会社に行っているわけではないだろう。むしろ学校や会社に行くことは当たり前だと思っており、そのことをいちいち疑問視してはいないはずである。このように通勤・通学はある意味で、思考停止という惰性によって可能になっていると言えなくもない (私は必ずしもそれを非難するつもりはない)。そのような人も学校や会社に行くことに一度疑問を覚えると、意志の力を絞り出さないと通勤・通学できないようになるだろう。このような窮地において初めて、意志の概念は前傾化する。ところが意志の力は万能ではない。実際、意志の力に責任を問うことができるためには、それはいかなる無気力の中でも自由に発動させることができ、言うことを聞かない身体を強制的に行動へと駆り立てられる精神の作用、言い換えれば自由意志でなければならないが、云々。

## 8.9 非自発的同意

「嫌々やっても意味ないんだよ」「嫌ならやめれば」という表現の背後には、「であること」と「であるべきこと」の混同が見られる:

- 「嫌々やっても意味ないんだよ」と言われても、嫌であることに変わらない。  
「嫌々やるべきではない」とまでは言えない。
- 「嫌ならやめれば」と言われれば、「よろこんで」と答えられてしまう。  
「やるべき」という暗黙の了解がなければ、  
「嫌ならやめれば」という脅し文句は相手を板挟みにできない。

また「嫌々やっても意味ないんだよ」「嫌ならやめれば」という表現は、物事に「意欲的に取り組むべき」という当為命題を言外にほのめかしていると考えられる。これは次のことと関係している。すなわち、人はしばしば誰かに仕事をさせるとき、仕事をさせるという結論ありきで、敢えて相手に仕事することを形式的に選ばせる。相手が自分の意志で自発的に同意したということにすれば、相手がやる気を出していないとき、その責任を相手に問うことができるからである。つまり「自分で選んだんでしょ?」「あなたがやりたいって言ったんでしょ?」と言えるからである。実際、彼ら/彼女らは相手の同意を自発的なものを見なしたくて仕方なく、それ故、相手が消極的に物事に取り組むのを許さない\*18。「嫌々やっても意味ないんだよ」「嫌ならやめれば」といった表現はこのことを反映している。

もちろん、相手が同意したからといって、必ずしもそれが自発的であったことにはならない。むしろ非自発的な同意は日常にありふれている [14, p.156]:

\*18 哲学者アレントもまた同意を自発的なものとして位置づけることにこだわった [14, pp.156–158].

- 「友達がソバにしようと言うので仕方なくソバにする」。
- 「子どもが泣きわめくので仕方なくお菓子を買ってやる」。
- 「給料がほしいので仕方なく働く」。

なお行為者の同意を得るのに、しばしばクローズド・クエスチョンが用いられる。これは「～したいんでしょ？」のように、上手く答えを保留しない限り「はい」か「いいえ」でしか答えられない問いかけのことである。クローズド・クエスチョンを用いると相手から「はい」という答を引き出し、相手の意思を自分に都合の良いように解釈・既成事実化しやすい。

## 8.10 社会的問題に関する意見

論述などにおいて、社会的問題に関する意見を述べるように求められることがある。そうした場合、しばしば当為命題を論拠と共に主張しなければならない。ここで、

- 説得力不足であれば感情論に陥っていると見なされる。  
この裏も真とは限らないものの、裏を返せば説得力さえあれば正論と見なされることになるため、主張を弁論術だけで押し通せるということになりかねない。  
ここで当為命題の恣意性・無根拠性・虚構性は完全に見落とされている。
- あるいはそれは「答えのない問題」であることが自覚されていながら、そのような「答えのない問題」をめぐる当為命題どうしの水掛け論が、物事を多面的に捉えることに繋がるとして歓迎される。  
しかし「答えのない問題」は擬似問題である。

## 8.11 国語の理由説明問題

国語の問題では「登場人物の行動の理由」や「筆者の主張の理由」を問う、いわゆる理由説明問題が出題される。これは次のような哲学的な問題を孕んでいる。

- 人の行動の理由
  - － 人の気持ちは理由となるか。(心身の相互作用を認めるか。)
  - － 延長の世界の直接原因だけ答えれば良いのか。
  - － 原因は意味のレベルで十分に捉え切れるのか。
  - － そもそも因果律を認めるのか。

こうした疑念を抱く余地がない仮想的な試験問題を作るとすれば次のようになるだろうか。

傍線  $l$  とあるが、A さんは何故このような行動をとったと考えられるか。心身平行論に立脚し、人物の挙動を粒子の運動や場の状態に還元し、第  $n$  段落までに与えられた始状態から傍線  $l$  の状態に移る確率振幅を第一原理より導くことで説明せよ。

- 筆者の主張の理由  
本文中に小前提があっても大前提がなければ、不完全な理由しか答えられないのではないか。  
特に筆者の主張が当為命題の場合、これは第 7 章で述べたことに他ならない。

おそらく「登場人物の行動の理由」や「筆者の主張の理由」を答えよという問いを、正直に文字通りの意味に解釈する限り、国語の問題が問題として成立することはないであろう。

## 8.12 社会の「考える問題」はどうにでも考えられるため解けない件

「考える力を問う」と称する問題は、しばしば「考えれば解ける」とは言えないような悪問に堕しているのではないか。このような事態は特に社会科の問題に顕著であるように思われる。というのも社会現象の説明と言うのは物理法則に基づく厳密な説明と違って粗い「理解」であり、人間の主観を通して得られた意味レベルの解釈・物語にすぎないため、「どうにでも考えられる」ということが起きやすいからである。「どうにでも考えられる」問題として具体的に以下のような例が考えられる。

**問題** 現代の社会情勢を踏まえ、日本において「教育に関心を持っている家庭」（目安となる客観的な指標として、子供を塾に通わせている、など）の全体に占める割合として正しいものを次の（ア）、（イ）、（ウ）から選び、記号で答えなさい。

（ア） 80 %

（イ） 50 %

（ウ） 20 %

**注解** 学歴が重視される現代であって、多くの親は子供の教育に関心を持っており、（ア）が正解であると考えられるのもっともらしい。しかし学歴変量主義に対する反動から、実際には（ウ）が正解だとしてもおかしくはない。さらにこれら2通りの傾向が拮抗して、（イ）が正解であると考えられなくもない。（これは「裏の裏をかく」ともとに戻るといって堂々巡りとどこか似ている。）このように、本当に「どうにでも考えられる」のである。後付けの理由で全ての選択肢を正当化できる。

「考えれば解ける」とは言えない問題の例をさらに挙げる。

### ■漢字の問題

**問題** 次のカタカナを漢字に直せ。

それは健ゼンな疑問だ。

**注解**

「健ゼン」 → 「正常」 → 「欠けたところがない」

と考えれば確かに「健全」という正解を導けそうである。これが「漢字は意味を考えれば分かる」と言われる所以である。しかし

「健ゼン」 → 「健康なさま」

と考えると「健然」という字をあてても意味は通るだろう。このように漢字は意味を考えただけでは一意的には決まらない。

### ■数列の一般項

**問題** 以下のように数がある規則に従って並んでいます。「 $x$ 」に当てはまる数を答えなさい。

2, 8, 24, 64, 160,  $x$ , …

注解

$$2 = 1 \times 2^1, \quad 8 = 2 \times 2^2, \quad 24 = 3 \times 2^3, \quad 64 = 4 \times 2^4, \quad 160 = 5 \times 2^5$$

なのでこれは  $n \times 2^n$  を一般項とする数列であり、

$$x = 6 \times 2^6 = 384$$

と考えられるかもしれない。しかしこれはあくまで帰納的推論であり、これが正しいという保証はない。実際例えば任意の  $x$  の値に対して、与えられた数列は  $\{2, 8, 24, 64, 160, x\}$  を周期的に繰り返すという規則に従っている可能性を排除することはできない。このように数列の一般項を推定する問題は、厳密には数学の問題として成立しないのである。

なお、帰納的推論によって得られた予想が正しいことを証明するのに用いられる数学的帰納法は、その名に反して演繹的な手法である (帰納と演繹については 13.1 節参照)。

以上は月並みな指摘だったかもしれない。実際こうしたことは、誰もが心のどこかで思っていることなのではないか。

### 8.13 「呪いの言葉」

「呪いの言葉」は田口が定義した表現であり [37, pp.273–275]、内田の言葉を借りれば「呪いの言葉」とは、相手の答えを封じて絶句させ生気を奪うために相手に投げかける正論を装った問いや主張を指し、「呪い」をかける者は意識的にであれ無意識のうちにであれ、それを楽しんでいる [19, pp.178–189]。「呪いの言葉」とはそれにきっぱりと答えることのできない曖昧で意味不明の問いかけや要求のことであり、相手の答えを封印して沈黙を強いることを執拗に繰り返すことで、相手から生気を奪い深い疲労を与えるのに用いられる [19, pp.179–184]。内田は「呪い」をかける人間を次のように描写している。

このような「絶句」状況に他人を追いつめることを (それと知らずに) 好む人がいる。他人が自分の問いかけによって言葉を失い、青ざめ、うつむき、沈黙のうちに引きこもるさまを見て、ある種の愉悦を引き出すことのできる人がいる。

むろん、本人はそんな「邪悪」な欲望が自分を駆動していることを知らない。しばしば、「呪い」をかけている人間自身は (意地の悪い教師がそうであったように)、自分の行動を動機づけているのは教化的な善意だと信じている (場合によっては愛情だとさえ) [19, p.184]。

「呪いの言葉」として思い付いたものをいくつか列挙する。以下の分類はあくまで便宜的なものである。

#### 8.13.1 “駄目な” 未来を予言・暗示する形のもの

田口の挙げている「呪いの言葉」には“駄目な”未来を予言・暗示する形のものがある [37, p.275]\*<sup>19</sup>。これについて内田は「それは心のひだに食い込み、ずっと後になってさえ、決定的な状況のときに不意に意識にせりあがってきて、その人の決断を食い荒らす」としている [19, pp.182–183]。ここでは同じく“駄目な”未

\*<sup>19</sup> 厳密にはこれらは内田による定義に反して、問いかけや要求の形をとらない。

来を予言・暗示するような「呪いの言葉」を取り上げる。

「そんなんじゃ生きていけないよ」……言外の意味は「生き方を変えるべき」という当為命題。

「きっと後悔する」……言外の意味は「そんな事やめるべき」という当為命題。

「どうやって責任とるの?」……責任が虚構である以上、とりようがない。

「すみませんじゃ済まされないんだよ」……それ(処罰)は相手が決めることで、

こちらは避けられなかった事態について謝るしかない。

「そんな言い訳、通用しないよ」……実際には神即自然の必然性に基づく説明が成立。

「知らなかったなんて、通用しないよ」……言外の意味は「知っているべき」という当為命題。

知らないのは仕方ない。

「これからどうするの?」 } …… { 「する」のではなく、なるように「なる」もの。  
「どうやって生きていくの?」 } …… { 今後どうなるのかは神のみぞ知る。

Spinoza 描像を標語的に表現すれば、

この世には「する」者や「すべき」ことはなく、「なる」だけがある。

「君たちは社会の中でしか生きていけない」……言外の意味は『『社会的人間』になるべき』という当為命題。

それ以前に自然法則に従う存在としてしか振舞えない。

### 8.13.2 質問の形をとるもの

「若い女性に対する典型的な『性的いやがらせ』として内田は「結婚しないの?」「子どもはできないの?」の二つの質問を挙げている [19, p.183]。また、「沈黙を強いるために向けられる問いかけ」として内田は意地の悪い教師の問いの例を挙げている [19, pp.183-184]。これは以下のような問いかけを類推させる。

「ここ(学校)は勉強する場所だろ?」……事実命題の仮面を被っているが、

「学校では勉強すべき」という当為命題を示唆。

(実際には学校は独学の邪魔をする場所とも言える)

「自ら行動しないと上達はでき……?」……「ない」という答を誘導。

上達すべきことを暗黙の了解とし、自ら行動すべきという当為命題を示唆。

### 8.13.3 生徒に将来の不安を植え付け、高見の見物をする社会科教師

読者の中にはある種の政治的な議論、あるいは社会問題に関する議論が苦手という人もいるだろう。私もその一人である。政治的議論が苦手な理由はいろいろ考えられるが、実は議論の政治性そのものではなく、単に議論の相手の態度に問題があるという場合も考えられる。例えば「それって〇〇なんでしょ」のような「知ってるアピール」をしたり、他人の意見をよく考えもせずに自分の意見として述べて、無思慮に物事を批判したりするような人のことである。彼ら、彼女らは「知っている」ことによって相手より優位に立つことや、「意見を持っている」ことによって相手を圧倒することしか頭にない。そしてその結果として、自らの知性の低さをさらけ出しているのである。あるいは議論の相手を否定することしか頭にない。「それ何て言うの?」のような、話を逸らすような問いかけは明らかに、相手の答えを封じるためだけに成されている。このような人達

に「少しは世の中のことを知りなさい」と言われても、そのような気になれないのは当然である\*20。

では、相手が浅い知識で話しているのではなく、事情に通じている場合はどうだろうか。

単なる事実ではなくイデオロギー 再び 6.1 節で言及したような社会科の教員を考えよう。熱心な社会科の先生ならば、世の中のことについて踏み込んだ話をしてくれるかもしれない。もちろん、それ自体は好ましいことだ。しかしそれが単に事実を伝えるに留まらず、イデオロギーを含むものであるならば、それは必ずしも受け入れられない。

例えば「世の中はグローバル化が進んでいる」というのは、確かに見かけ上は世の中の現状を踏まえて事実を述べているだけである。しかしそれが言外に、「そこからこぼれ落ちないように、グローバルに活躍できる人間になるべきだ」というメッセージを仄めかすものであるなら、それは「社会の求めるような人材になるべきだ」ということを大前提とした当為命題である。そしていかなる当為命題も独断論であることを免れないことは、Spinoza 描像において十分に示した通りである。また「グローバル化」という戦場の存在を示し、自分は高みの見物をしているのだとすれば、相当に悪趣味である。

他にも例えば「～できない人はこれからやっていけない」というのは、確かに見かけ上は世の中の現状を踏まえて事実を述べているだけである。しかし仮にそれが事実であるとしても、その発言が「そして～できないのは自己責任だ」「だから君たちは～するべきだ」というようなメッセージを暗に仄めかすものであるならば、そのようなメッセージは独断論であると言わねばなるまい。

場合によってはそうした言動は、悪意のある言動だとすら言わなければならない。と言うのも、教育者としての善意からこのような話をするのではなく、聞き手(生徒)を絶句状態に追い詰めることを愉しんでいるということがあり得るからである(本人にその自覚がないとしても)。そのような人は「呪い」をかけるのに学問を用いているのである。これは場合によっては、生徒が本来は無害な学問そのものも嫌って避けるようになるという弊害を及ぼしかねない。

イデオロギーは社会に関する知識と切り離して批判できる—— Spinoza 描像 相手が圧倒的に多くの知識を持っていると、相手の主張は有無を言わせぬ雰囲気を持ち、抗い難く感じるかもしれない。しかし自己責任論や「～べきだ」というイデオロギー(当為命題)を退けるには、専門的な知識を必要としない。と言うのも、このようなイデオロギーは、現代社会がどうなっているかという事実によって支持されるものではないからである。そして自己責任論や「～べきだ」というイデオロギー(当為命題)が無効であることは、Spinoza 描像において「自由意志の否定」と「当為命題の虚構性」を通して既に示した通りである。

イデオロギーの是非を現代社会に関する知識から切り離して論じることができることは、強調しても強調しすぎることはない。そのことを知っていれば、たとえ社会のことを教える人のイデオロギーに馴染めなかったとしても、世の中について学ぶことまで諦めることはないと分かるからである。いや、ここではむしろ、知識は必ずしも価値中立的ではなく、文脈依存的だと考えた方が良くかもしれない。新自由主義的なイデオロギーを下地として政治的・経済的リテラシーを育むことができなくとも、資本主義に対する批判的精神を原動力として世の中のことに関心を持つことはできる。

イデオロギーへの反発は「論理的」ではあり得ない こちらが相手の主張に対する違和感を表明しても、「論理的でない」「感情論だ」と返されてしまうかもしれない。しかし相手がそのように言ったならば、それは相手が論理とは何であるかを分かっていない証拠である。と言うのも、論理というのはある結論を導く思考の道筋のことであり、それは出発点となる前提条件を必要としている。そして論理はその前提条件の正しさまでを

\*20 その点、私の友人は良識があると思う。私に分からないこともゆっくり説明してくれるし、話も馬鹿にしないで聞いてくれる。私も友人にそのように接してきていけば良いのだが……。

保証するものではない。このため論理によってイデオロギーの是非に決着をつけることなど、始めから不可能なのである。感情論だ？その通りだ。嫌だと感じていることは事実であり、人の気持ちはその正当性を論証しなければいけないものではない。

市場原理主義や競争、「人参と鞭」で何でも片付けようとする人への批判　ここで具体的に「世の中は競争で動いている」「競争が社会を発展させる」という発言を取り上げよう。仮にこれが正しいとしても、このことだけから「競争するべきだ」という主張は導けないことは、第7章において既に指摘した通りである(当為命題の虚構性)。

これに加えて、現実を捉える上で、何でも競争で片付けようとすることは本当に妥当なのかという観点から批判することも可能である。以下ではこれについて、國分の著書から引用する。「今の時代、知性を向上させるための手段として人が思いつくのは『人参と鞭』だけ」とあるという内田の批判について、國分は次のようにコメントしている。

今はやりの「競争」で何でも片付けようとする人たちも、だいたいこのタイプ [38, p.65].

続けて次のように論じている。

市場原理主義や競争、「人参と鞭」といった考えの問題点とは、それらを高く掲げる人たちが、とても少量の情報しか処理していないということである。

(中略)

つまり、市場原理主義や競争、「人参と鞭」といった考えを高く掲げる人たちは、冷たいのでも、暖かみを欠いているのでもない。自分たちの情報処理能力で扱える範囲のごく少量の情報に固執しているのである。

言い換えれば、彼らは少しも合理的ではない。なぜなら、現実の複雑さをできる限り複雑なままに処理することができなければ、合理的な結論は導けないからである [38, p.67].

市場原理主義や競争、「人参と鞭」といった考えが幅をきかせているという現実には、我々の社会が、あまり多くのことを考えたくないという方向に向かっていることを示している。

そしてその中で人は、知性の最高の状態を体験することができなくなっている。

それを体験できないから、社会の方ではそれを先取りして市場原理主義や競争、「人参と鞭」といった考えを前景化するようになる。こういう悪循環が起こっている [38, p.68].

学問に関して言えば、勉学はそもそも知識の量や学習の速さを競うものではない。それが分からない人はおそらく、学問に向いていない。

## 9 新自由主義による「魂の包摂」

一般に自己啓発とは、資本にとって都合のよい人間になることに他ならない。

- 以下の9.2節で見るマインドセット云々もその1例である。
- またある種の「人事コンサル」は自己啓発の促進そのものを仕事としており(9.3)、今思えば、それは明らかに、資本主義(会社の業績)の行き詰まりを打破するという名目で生み出される典型的なブルシット・ジョブである。

よりキャリアアップするために自己啓発本を読んでやる気を出すとか、(中略)そういう活動は「意識が高い」とされるものでしょう。しかし、仕事の効率を上げ、職場をよりよくするという善意は、剰余価値をピンハネされ続けるという下部構造の問題から目を背けることではないでしょうか。意地悪に言えば、搾取されていても快適であるために、みずから進んで工夫をしているのではないかと、ということです。

このとき、本当に意識を高く持つというのは、搾取されている自分自身の力をより自律的に用いることができないかを考える、ということになります。

もっとも、自分は使われている人間だということを自覚した上で、独立を決意するべきだという自己啓発はたくさんあります。それが意味しているのは、労働者から資本家になれるということです。そうすると結局、誰かを搾取する立場に変わるだけです。

だからマルクス主義では、「あなたも資本家になれる」ではなく、すべての人がこの構造から解放されるにはどうするか、すべての人が自分自身に力を取り戻すにはどうするかを考えようとするのです [27, pp.138-139]. [以上、強調は原著者による.]

マルクスに準拠すれば、自殺に追い込まれるほど過酷な長時間労働に労働者が抗えないのは、労働者が「二重の意味で自由」だからであり(図19)、労働者を突き動かしているのは、「仕事を失ったら生活できなくなる」

労働者が逃げられないのは二重の意味で「自由」だから

- 生産手段・共同体の相互扶助から“フリー”(切り離されている)  
→ 労働力を売ってお金を手に入れることでしか生きていけない
  - 「潜在的貧民」(マルクス)
  - 「すべり台社会」(湯浅誠)
- 「自分は自由で自発的に働いている」という自負  
→ 資本家にとって都合のよい労働者像を、あたかも自分が目指すべき姿だと思込込むようになっていく(「魂の包摂」(白井聡))
  - 高度成長期の「モーレツ社員」
  - バブル期の栄養ドリンクのキャッチフレーズ「24時間戦えますか」
  - ◆ 実際には、労働力を売ってしまえば、後は奴隷と変わらない
  - ◆ そもそも形而上学的なレベルでは、人間は行為の自由な主体ではあり得ない  
自由意志は現代的な宗教

図19 新自由主義による「魂の包摂」

という恐怖、そしてそれ以上に、「自分で選んで、自発的に働いているのだ」という自負である。実際には労働者の自由は自分の労働力を売って、好きな仕事に就くところまでで、一度、労働力を売ってしまえば、後は奴隷とあまり変わらない。好き勝手に働けばクビになるだけである。就活の面接で、「なんでもやります」と自分の自由を進んで手放した経験のある人は多いだろう。それにも関わらず、自分は自由で自発的に働いていると錯覚した労働者は、資本家にとって都合のよい労働者像を、あたかも自分が目指すべき姿、人間として優れた姿だと思いつくようになっていく。このように労働者が資本の論理を内面化する事態を、白井聡は「魂の包摂」と呼んでいる。自己責任の感情をもって仕事に取り組む労働者は、無理やり働かされている奴隷よりもよく働き、いい仕事をする。そしてミスをしたら自分を責め、理不尽なことさえも受け入れる。資本主義社会では、労働者の自発的な責任感や向上心、主体性といったものが、資本の論理に「包摂」されていくのである。高度成長期の「モーレツ社員」や、バブル期に流行った栄養ドリンクのキャッチフレーズ「24時間戦えますか」はその好例だろう [1, pp.74-81].

実際、労働者自身が「経営者目線で」行動し、トヨタ自動車のトヨタイズムが推奨するように、末端の労働者が剰余価値の獲得競争に主体的に参加するようになれば、資本家にとってはこの上なく都合が良い。

残念ながら日本ではまだ(中略)資本主義に挑む大胆な労働時間短縮の動きは見られません。それどころか、生活保護バッシングにも見られるように、「働かざる者食うべからず」という勤労倫理は、ますます強化されています。そして、副業が推奨され、休みの日には自己啓発セミナーが賑わっています。私たちはますます自分の時間を他人に売ろうとしている。でも、本当にそれでいいのでしょうか [1, p.88].

「魂の包摂」を概念化した白井聡本人の説明によれば、新自由主義、ネオリベリズムの価値観とは、「人は資本にとって役に立つスキルや力を身につけて、はじめて価値が出てくる」という考え方である。人間のベーシックな価値、存在しているだけで持っている価値や必ずしもカネにならない価値というものをまったく認めない。だから、人間を資本に奉仕する道具としか見ていない。これは明らかな倒錯であるにも関わらず、多くの人は「何もスキルがなくて、他の人と違いがないようでは賃金を引き下げられて当たり前だ」と言われて納得してしまうほど、魂を資本に包摂されている。そしてそれ故、現状に対する大規模で組織的な抵抗は起こりにくい [2, pp.70-72].

世の中では、「自分の労働者としての価値を高めたいのなら、スキルアップが必要」と言われているが、それは資本に奉仕する能力によって人の価値を決めていくネオリベリズムの価値観である。それに立ち向かうには人間の基礎価値を信じ、「私たちはもっと贅沢を享受していいのだ」と確信し、人間の基礎的価値を切り下げようとする圧力に対しては徹底的に闘わなければならない(図 20)。そのためにはベーシックな感性の部分にまで遡り、人間の思考・感性をも包摂するネオリベリズムから我が身を引きはがすことから始めなければならない [2, pp.278-280].

Spinoza にならって自らを貫く必然性に従って行動することを自由と呼ぶならば、新自由主義はその名に反して人々の自由を踏みにじっている。

最後に、重要な追記を行う。新自由主義的な競争原理と自己責任論は「貧乏人向け」のイデオロギーである：ブルジョワジーほど強力な相互扶助の連帯を形成しており、その狡猾な連係プレーのため、不正や失態を犯しても報道・処罰されない。彼らは新自由主義的なイデオロギーなど信じていない。(http://blog.tatsuru.com/2024/07/21\_0916.html)

**「稼ぎが低いのはスキル・能力が  
ない人間の自己責任であり、人間  
としての価値がない証拠」という  
新自由主義のイデオロギーと戦え**

図 20 白井聡『武器としての「資本論」』の裏のテーマは「新自由主義の打倒」である [2, p.222]

## 9.1 橋下徹の生み出すディストピア

橋下徹が大阪府知事になってから、図書館の弾圧が始まったわけですけど、あの人はまず公務員、それから教育と医療と、文楽のような古典芸能・伝統芸能をピンポイントで狙ってつぶしにかかりましたね。この選択って、ある意味たいへん正確だったと思います。彼が狙ったのは、すべて「異界へ通じる道」だからです。「異界へ通じる道」は全部塞ぐ。しよせん世の中は色と欲、権力と財力をすべての人間は求めている。それ以外のものはこの世には存在理由がない。そういう恐ろしいほどチープでハードな世界にすべての人を閉じ込めようとした。彼のあの「異界つぶし」の熱意はたいしたものだと思います [39, pp.75-76].

だから、橋下徹みたいな人にはそれがわかるんです。そこには異界への扉が開いていることがわかる。それが彼は許せないんです。この世は力のあるもの、競争で勝った者が支配していい思いをし、弱いもの、競争の敗者は身を縮めて生きるというのが彼らの思想です。ですから、この世の権威や価値と無縁のものがこの世に入り込むことが許せない。だから扉は全部閉じる。閉じて、溶接して鉄の扉をつけて、二度と「超越的なもの」がこの世に入り込んできて、子どもたちが知的成熟を遂げることがないようにした。ある意味すばらしく勤のいい人だと思います。本当にピンポイントで人間の感情生活を豊かにし、宗教的感受性を豊かにする機関を片っ端からつぶしていったんですから。

現世しかない。今ここしかない。ここでの勝ち負けだけがすべてだ。相対的な優劣、勝敗、強弱だけが問題だ。これはたしかに反知性主義なんですけれども、それ以上に「外部」に対する憎しみにドライブされている。それに対して多くの日本人が拍手喝采を送っている。それは知性的、感性的、霊的な成熟を拒否するぞという宣言に同意しているということです。末世的な風景です [39, pp.87-88].

なるほど、そのような人たちには Spinoza の汎神論に心を通わせることも、快樂としての学問やミソフォニアのような奇病を理解することもできないだろう。

なお橋下徹を中心とする大阪の維新政治への批判は、内田樹と辰巳孝太郎による次の対談にリーダブルにまとまっている。 [http://blog.tatsuru.com/2023/01/30\\_1613.html](http://blog.tatsuru.com/2023/01/30_1613.html)

## 9.2 マインドセットをリセットする自由意志は存在しない

人の才能・能力は固定されているという心持ちを硬直マインドセット、人の能力は努力で伸ばせるという心持ちを成長マインドセットと呼ぶ。

■無限後退を断ち切る自由意志は存在しない さて、硬直マインドセットから成長マインドセットへ移行するために、「マインドセットは変えられる」という成長マインドセットが必要になるとしよう。このとき成長マ

インドセットを得るための成長マインドセットが必要であることになる。これを繰り返し用いれば、

成長マインドセットを得るための成長マインドセットを得るための  
成長マインドセットが必要、  
成長マインドセットを得るための成長マインドセットを得るための成長マインドセットを得るための  
成長マインドセットが必要、  
……

などとなり、無限後退に陥る。これを断ち切る能力として、自由意志の存在が要請される。ところが自由意志は存在しない。

**やる気スイッチと自由意志** このような無限後退は自由意志に固有の特徴であり、他の題材を用いても示すことができる。例えば「やる気スイッチ」を押すためには、それを押すための「もう一人の自分」を駆動しなければならない。このとき「もう一人の自分」の「やる気スイッチ」を押す必要がある。以下、無限に続く(ウロボロスの図 17 も参照)。これは脳のなかの小人「ホムンクルス」を考えた際に陥る無限後退と同じである(小人を操縦する小人がいる)。

成長マインドセットと硬直マインドセットの2項対立は、努力と才能の2項対立に他ならない。努力することは、それが可能な場合には神即自然の必然性の現れとして自動的に達成されるのに対し、それが神の時間発展に含まれない場合には自由意志の助けを借りなければ不可能である。ところが自由意志は存在しないから、それは絶対に不可能である。

■「成長マインドセットを持つべきだ」とは言えない 「成長マインドセットを身につけさせよう」という試みは端的に言って、余計なお世話であろう。それは個々人の《自由すなわち必然性》を踏みにじることに繋がりが得るものである。「あまり干渉しないでほしい」という気持ちを抱くのは自然なことだ。

「成長マインドセットを身に付けるべきだ」という主張に限らず、一般に「～べきだ」という主張(当為命題)は独断論であることを免れない(当為命題の虚構性)。これは上記の「自由意志の否定」と合わせて、Spinoza 描像において十分に示した通りである(図 21 参照)。

### 9.3 人を動かすには？人を動かしているのは物理法則だ

ビジネスに関する話題では、時に

- 人材(の調達, 育成, 配置)
- 人材マネジメント
- リーダーシップ開発
- 自己改革

といった表現が当たり前のように用いられる [40, pp.136-149]。このような表現は単語レベルで見ても抵抗を感じる。人を積極的に干渉して「改良」することのできる「道具・材料」と見なして、利益を上げるために徹底的に「使う」べきだというイデオロギーを、これらの用語が露骨に反映しているからだろう\*21。

\*21 「使えない奴だ」という悪態もまた、このようなイデオロギーに由来していると言えるかもしれない。「使いな」と言い返したいところだ。

人の才能・能力は固定されているという心持ち = 硬直マインドセット  
人の能力は努力で伸ばせるという心持ち = 成長マインドセット

「マインドセットは変えられる」  
というマインドセットが必要 → 無限後退  
無限後退を断ち切る  
自由意志は存在しない (自由意志の否定)  
「成長マインドセットを持つべきだ」  
とは言えない (当為命題の虚構性)

||

## Spinoza描像

図 21 マインドセットをリセットする自由意志は存在しない

注意しなければならないのは、このようなイデオロギーが必ずしも個人の自由意志を蔑ろにしているわけではないということだ。と言うのも、國分が論じているように、人を「使い」「動かす」には相手がある程度自由であり、ある意味で「能動的」でなければならない。例えば相手に便所掃除をさせるとき、相手の自由を完全に奪ってしまつては「相手の手にブラシをもたせ、その手をつかんで動かす」他なくなり、「事実上、自分が便所掃除をするはめに陥ってしまう」 [14, p.148]。このため労働者はむしろ自由な主体であることが要請され、社員を自発的に動くように仕向けることが目標とされることになる。実際、

- 「人材の意識や行動の変革をうなが」す
- 「社員の自発的なアクションを導く」
- 「自分で考えさせる」
- 「自分で実践させる」

といった表現はこのことを反映しているように見える [40, p.139, pp.146-147]。このように自由意志の概念は、「人材」を「使い」「動かす」という思想・運動の共犯者となるのである。

確かに人が自由意志で動くように仕向けることを目指すのは、一見すると好ましい考え方であるようにも思えるだろう。しかし真の自由とは自らを貫く必然性に基づいて行為することであり、こうした発想はかえって個々人の必然的な法則を踏みじめることに繋がる危険もある。ありもしない自由意志を使うように迫られることがあるとすれば、それは由々しき事態である。

なお、人を動かしていると思いが上がっている人も、結局は物理法則に突き動かされているのだということを付け加えておこう。

## 10 Spinoza 描像から見た就活

### “人間中心の見方”に陥る採用者

就活ではしばしば「あなたは何かができますか」「あなたは何をしてきた人間ですか」といったことが問われ、個人の能力が見られる。そして「この人は力を発揮できる人である」「この人は主体的に動ける人である」「この人は粘り強く頑張れる人である」といった判断が成される。もちろん社員の採用とは人を選ぶことなのだから、それはある程度は仕方のないことなのかもしれない。

しかしこのとき、私たち、特に採用者が“人間中心の見方”とでも呼べるものに陥っているのだとすれば、それには疑問を述べておかねばなるまい。“人間中心の見方”と言ったのは、すなわち、個人が何を成し得るかは純粋に個人の能力で決まり、目立った能力がないのは本人の落ち度と見なされることである。あたかもそこに“能力の持ち主”がいるかのように見なされ、能力と責任を帰属させることができる主体が見出されるのである。言うまでもなく、こうした人間中心的・実存主義的な捉え方は幻想である。人間中心で考えるあまり、人間の振舞いは神の必然性の現れであるということが忘れられてしまうのである (Spinoza の汎神論)。

■「意志の強さ」自己PRの例文に とある就活応援サイトでは、エントリーシートの例文を紹介している。その自己PRの第1文が、「私の強みは、自分で決断したことをやり通す意志が強いことです」となっている。言うまでもなく物事をやり通せるか否かは、単純に「意志の強さ」のような個人の特性に帰せられるものではない。また意志はそれに責任を問うことができるような、行為を開始する純粋に主体的・自発的・能動的な能力ではあり得ない。それにも関わらず現代社会は意志を絶対視し、自由意志へと祭り上げている。もちろんこの例文を「現代社会が意志を盲目的に信仰している証拠」と言うのは短絡的かもしれないが、いかに現代社会が「意志」「意志決定」「選択」といったことに重きを置いているかを考える上で、この例文は示唆的であり、また象徴的はないだろうか。

■学歴と「努力できる人間」 学歴はその人が努力してきた証拠であり、そこで企業の新人採用者は「その人が努力できる人間かどうか」の指標として、学歴を参考にするとと言われることがある。少し考えるとこのレトリックは、努力できるか否かが(大部分は)本人の人間としての性質だという発想に基づいていることが分かる。それは「努力できること」を個人の能力に帰すという誤りである。あるいは採用担当者も、「努力できること」が必ずしも人間性だけで決まるわけではないことは百も承知かもしれない。同じ人間であっても、苦もなくできることと、そうでないことがある。その上で敢えて努力できることを個人の能力と捉える“人間中心”立場を貫くとき、そこで問題とされている能力とは、何であれ根気を要することを実行する「意志の力」だと考えられる。しかし自由意志は存在しない以上、その「意志の力」もまた主体に帰属させることはできない。「意志の力」が宿るところの主体ないし行為者なるものは、よく定義されない。

### 組合せとしての善悪、必然としての自由

この世に絶対的な善悪は存在しない。例えば内向的な人が採用試験で「協調性がない」「コミュニケーション能力がない」と判断され、不採用になったとしよう。このとき内向的な性格それ自体は悪いことではない。ただその会社と合わなかっただけである。このように「人」と「会社」のような組合せの中で初めて、善悪の概念は意味を成す [41, pp.29-36]。

「コミュニケーション能力」に関する誤解 話し上手で口が達者なことだけが「コミュニケーション能力」で

はない。世の中には言葉を選びながら慎重に話すタイプの人もあり、それに丁寧に耳を傾けることも立派な「コミュニケーション能力」である。なお会話が円滑に進むかは話の内容や文脈によることや、簡単には言葉にできないこともあることを考えれば、ある人とコミュニケーションが上手くとれるかは必ずしも単純にその人の「コミュニケーション能力」——もしそのようなものを定義できるならばだが——に帰することができないことは明らかである。同様の指摘が「〇〇能力」と呼ばれるあらゆる他の能力にも当てはまる。

自分の性格を直そうと努力するのも悪くはないかもしれない。しかしそれは容易ではない。時にそれは、言わば自らを貫く必然性をねじ曲げるようなこととなり、自由意志という非現実的な力を必要とする。言い換えれば、それが可能である場合には、神の必然性に駆動されて自動的に成功するのに対し、それが神の時間発展に含まれない場合には、空から自由意志でも降ってこない限り不可能である。そして自由意志は存在しないから、それは絶対に不可能である。一方で自由とは自らを貫く必然性に従って生きることである [41, pp.66–85] :

自由 = 必然性,  
自由意志 = 必然性を断ち切る能力.

そして自らを貫く必然性に従って生きられる場所を探すことの方が、無理に自分を変えるよりも現実的である。そのための就活である。

何か特別なことをしていないといけないのか

「あなたは何をしてきた人間ですか」という、就活にありがちな質問は、人が「何者かであること」を当然のこととして求めている。その根底には、人と違うスキル (ただし資本の役に立つスキル) を身に付けてはじめて人に価値が生まれるとする、新自由主義の発想がある。しかし、人はあえて何かをしていないといけないのだろうか。もちろん答えは No である。「何かをしていなければならない」というのは「何かをなすべき」と言い換えられる当為命題であり、いかなる当為命題も独断論であることを免れないからである (当為命題の虚構性)。

そもそも「何かを成す」というのは行為であるのに対し、生きるというのは言わば勝手に、あるいは自然に起こっている出来事であって、行為ではない。いや、正確には行為と呼ばれるものも、自由意志によって成されるものではなく、神の必然性の現れとして生起する出来事なのである (Spinoza の汎神論)。

仕事は充実していなければならない？

仕事が充実しているに越したことはない。ただし自分の仕事が充実していないとしても (いわゆるブルシット・ジョブのように)、それは本人の落ち度ではない (就職は自由な選択とは言えない)。また「仕事こそが生き甲斐であるべきだ」「仕事は全力で取り組まなければならない」とまでは言えない。これらはちょうど「Spinoza 描像」(下記参照)における「自由意志の否定」と「当為命題の虚構性」に対応している (図 22 参照)。

「新しい階級」——ガルブレイス

経済学者ガルブレイスは「仕事こそが生き甲斐だと感じている人」を「新しい階級」と名付け、「新しい階級」の拡大に「希望」を見出している [42, pp.128–129]。國分はこれに対して、次のように疑問を投げかけている。長くなるが引用しよう。

## Spinoza描像

仕事が充実しているに越したことはない

しかし「仕事は充実しているべきだ」

「仕事に意欲的に取り組むべきだ」

とまでは言えない (当為命題の虚構性)

仕事にやりがいを感じないとしても、  
そのことに責任は問えない (自由意志の否定)

「新しい階級 (ガルブレイス)」を批判

國分功一郎, 2012, 暇と退屈の倫理学, 株式会社朝日出版社, 東京, 128—131.

図 22 「仕事が充実するべきだ」とまでは言えない

仕事が充実することはたしかに素晴らしいかもしれない。だが、仕事が充実することと、「仕事が充実するべきだ」と主張することは別の事柄である。

このように述べるのはなぜかと言えば、ガルブレイスの提案には大変残酷な側面があるからだ。しかも彼自身はその残酷さを残酷さとして理解できていないようなのだ。「仕事が充実するべきだ」という主張は、仕事においてこそ人は充実していなければならないという強迫観念を生む。人は「新しい階級」に入ろうとして、あるいはそこからこぼれ落ちまいとして、過酷な競争を強いられよう [42, p.129].

ガルブレイスは「ガレージの職工になった医者の子」を、「新しい階級」からこぼれ落ちた人間の引き合いに出し、彼は「社会からぞっとするほどのあわれみの目でみられる」と述べている [42, p.130]. 國分はこれを次のように批判する。

「新しい階級」からこぼれ落ちる人間などたくさんいるに決まっている。そしてまた、仮に「ガレージの職工になった医者の子」がそういうこぼれ落ちた人間なのだとしても、彼はいかなる劣等感も感じる必要などない。当たり前だ。

にもかかわらず、彼は周囲の「哀れみの目」によって劣等感の方へと追い詰められていくのだ。まったく恐ろしい事態である。そのような劣等感を生み出すプレッシャーを作り上げ、また増長しているのは、「新しい階級」が拡大していくべきだ」とするガルブレイスのような経済学者の主張に他ならない。

あきれたことにガルブレイス本人も次のように述べている。「この階級〔新しい階級〕の一員が給料以外には報酬のない通常の労働者に没落した場合の悲しみに比べれば、封建的な特権を失った貴族の悲しみも物の数ではないであろう」。その通りだ。そしてガルブレイスよ、よく聞け。君こそがこの「悲しみ」を作り上げているのだ [42, p.131].

### 必要労働の再編と万人の自由の拡大

社会主義者は労働を人間的自由の最高の表現だと見なしてきた。しかし必要労働の再配分により、たとえ家事同様のタダ働きであっても、1日に3〜5時間程度の必要労働をこなせば、生きていくのに必要な財やサー

AIによるオートメーション化がなくとも  
皆が望めば  
民主的に必要労働を再配分し  
**ポスト希少性**  
と余暇社会を既に実現できる

図 23 A. ベナナフ『オートメーションと労働の未来』で構想されるポスト資本主義

ビスの無償提供が可能になるのであれば、万人に潤沢な自由時間がもたらされる。そのようなポスト希少性と余暇社会では、仕事と趣味の境界は曖昧になり、すべての個人は労働中心のアイデンティティの外部で自らの人格性を発展させることができるだろう。技術的にはそれは既に実現可能であり、あとは皆がそれに気付き闘いさえすれば良い(図 23) [4]。

#### 「仕事を選べること」は自由ではない

「仕事を選べること」は自由ではない。自由であるための必要条件かもしれないが、十分条件ではない。ミヒャエル・エンデの寓話『自由の牢獄』のように、選択肢を与えられていながら、いや、選択肢を与えられているが故に自由を行使できないという状況を想像できる [43, pp.211-239]。自由意志は存在しないという形而上学的な命題にまで遡って考えれば、「選択」と呼ばれているものが自由でないことは自明である。いかなる選択も自由意志によって成されるのではない。それにも関わらず、現代では人間を自由な主体と見なす、実存主義的なイデオロギーが支配的である。國分は次のように述べている。

意志をめぐる現代社会の論法というのは次のようなものです。——これだけ選択肢があります。はい、これがあなたの選択ですね。ということはつまり、あなたが自分の意志でお決めになったのがこれです。ご自身の意志で選択されたことですから、その責任はあなたにあります…… [41, p.90]。

非自発的同意を行為の一類型として認めないならば、ある同意に関して、「同意したのだから自発的であったのだ」と見なされてしまう可能性が出てくる。道具等々を用いた強い強制力が働いていなくても、人は、何らかの理由から、疑問を感じているのに同意してしまう場合がある。つまり、暴力によって「あらゆる可能性が閉ざ」されているわけではないが、かといって自発的でもない、にもかかわらず同意してしまうことがありうる(ハラスメントにおいてはこうしたケースが問題になる)。

非自発的な同意というカテゴリーがなければ、そうした同意は単なる同意として、すなわち「あなたが進んで結んだ同意」として理解されてしまうだろう。

(中略)

しかし、すでに指摘した通り、そのような〔自発的な同意を可能にするような、行為の純粋な始まりとなる〕意志の存在は哲学的にはとても支持しえない。純粋な始まりなどないし、純粋に自発的な同意もありえない。選択が常に不純であるように、同意も常に不純であろう。そしてそうしたことはわれわれの日常にあふれている(たとえば、誰もしが糊口の資を得るために、仕方なく働いている) [14, p.159]( [] 内引用者)。

そうであるならば、最初から仕事は嫌なものと割り切れば、「やりたいことが何か分からない」というアポリア (袋小路) を回避できる。そして「仕事とは本来、やりたくないものだから、短時間で済む仕事が理想的」と考えることもできる。実際、労働時間の短縮された社会が理想とされてきたのではないか\*22。

### 労働時間の短縮

では、どのぐらい短時間で済むか？これはどれぐらい稼がなければいけないかということと関係している。「働かないと生きていけない」というのは、分かるようで分からない。定性的には正しいが、本当に1日の大半を労働に充てないと人は生きていけないのだろうか。「どのぐらい働かないと生きていけないか」を具体的に・定量的に評価してみる価値はある。その際、次の点が重要となる。

家は要るか？ 車は要るか？ 結婚するか？ 保険に入るか？

もっとも「結婚するか」などというのは、計画通りにいくものではない。これは結婚に限った話ではない。自由意志は存在しないのだから、何事も思い通りにいく保証はない。

### 個人的な自由

私にとっての充実した時間は、個人的な営みの中にある。それは端的に言って、物理のノートを書いてウェブページにアップすることである。やってきたことを形にしなければという強迫観念に駆り立てられている部分もあり、これは純粋に充実した時間とは言えないかもしれないが (ハイデッガーの退屈論に即して言えば、これはまさしく退屈の第一形式である [42, pp.204-216])。集団の力学に絡めとられない、このような遊びがあっても良いだろう。

以下が理論物理学のノートを公開しているページである。

<http://everything-arises-from-the-principle-of-physics.com/>

ウェブページのモチベーションらしきものについては、以下のページに置いた pdf に長々と書いた。

<http://everything-arises-from-the-principle-of-physics.com/post-capitalism>

---

\*22 もっとも「人は1日の大半を仕事に充てるから、好きなことを仕事にするのが理想的」であること自体はほぼ間違いない。趣味を仕事にできるなら、それに越したことはないだろう。

## 11 中動態——「する」vs「なる」、「すべき」vs「である」

ここでは自由意志否定論と関係の深い、國分功一郎『中動態の世界』 [14] について概要を簡単にまとめる。詳細は以下のノートを参照されたい。

<http://everything-arises-from-the-principle-of-physics.com/wp-content/uploads/2021/05/tyudoutai.pdf>

現在の言語は能動態と受動態が対立しており、「する」のか「される」のかをはっきりさせて、行為者に「お前の意志は？」と尋問するような性格を強く持つ。一方かつての言語には、能動態でも受動態でもない「中動態」が存在し、能動態と中動態が対立していた [14, pp.32-35]。中動態は生まれる、成長する、眠る、のように動作の影響が動作主の内側に留まる事態を表すのに対し、曲げる、与える、のように動作の影響が動作主の外側に及ぶ事態を表すのがかつての能動態であった [14, pp.80-91]。

中動態……動詞の示す過程の内に主語が位置づけられる事態を指す。

能動態……動詞の示す過程が主語の外で完遂する事態を指す。

さて、中動態は出来事が自由意志とは無関係に、必然的に生起していることを表現するのに適している。実際 Spinoza 哲学において、神が自らをある状態へと生成する過程は、中動態によって表現されている [14, pp.236-242]。

一方、個々の人間に注目すると、その上に起こる変状は次の2段階から成ると見ることができる [14, pp.248-252]。

1. 外部の原因が様態に作用する段階。

これは中動態に対立する意味での能動態に対応する。

2. 様態を座とする変状の過程が開始する段階。

ここでは動作主が動作のプロセスの内部にいるため、これは中動態に対応する。

そして Spinoza 哲学における能動と受動とは、この第2段階における変状の質の差を意味す [14, pp.252-257]：

- 能動 ≡ われわれの変状がわれわれの本質を十分に表現している。
- 受動 ≡ 個体の本質が外部からの刺激によって圧倒されてしまっている。

■中動態は救いではない 國分は『中動態の世界』における Spinoza の章で次のように書いている [14, p.260]。

スピノザはいかなる受動の状態にあろうとも、それを明晰に認識さえできれば、その状態から脱することができると言っている (第5部定理3)。

もちろん、この定理が述べているところは言い過ぎに思える。どれだけその状態を明晰に認識したとしても、われわれが完全に受動から脱することはありえないだろう。それに、理論的にはそうだとしてみても、実際にはどうやっても自分では認識しきれないほど受動的な状態に陥ってしまう事態はいくらでも考えられる。われわれの本質が自分たちの行為や思考の純粋な原因になることはありえない。

だが、われわれのもとに起こる変状が、外部からの刺激だけでなく、われわれ自身の〈変状する能力〉にも依存しているのだとすれば、ここには希望があろう。

ここから理解されるように、中動態はそれ自体が救いとなるとは限らない。この点を再確認するために、改めて國分の言葉を引いておく [8, p.148].

そして、「中動態は救いではない」についてですが、僕もそう思います。僕が「中動態」という概念を出したのは、自分たちが生きて、そして考えている「この経験の枠組み」そのものを「これが当たり前ではないのだ」と、改めてもう一度捉え直すためです。中動態はものを考えるためのカテゴリーであって、中動態なるものが良いとか悪いとか、そんなことを判断するつもりはまったくない。ただ、中動態を使ったほうがうまく考えられることがある、というだけのことなのです。

### 11.1 ハイデッガーの退屈論、國分の〈暇と退屈の倫理学〉

同じく國分の著作『暇と退屈の倫理学』では、ハイデッガーの退屈論に即した議論が特に興味を惹く。ハイデッガーは以下のように退屈を第一形式、第二形式、第三形式に分けて描き出した。第一形式から第二形式、第三形式へと進むにつれて退屈は深まっていく [42, p.217,p.234].

- 退屈の第一形式 (何かによって退屈させられること) [42, p.205]
  - 例えば、駅舎でなかなか来ない列車を待っている間に退屈すること [42, pp.206–207].
  - 物が私たちに何も提供してくれないため私たちは〈空虚放置〉され、  
ぐずつく時間に〈引きとめ〉られる [42, pp.214–215].
  - **仕事の奴隷**になっている人間の感じる退屈で、  
時間を失いたくないという強迫観念に取り憑かれた「狂気」がある [42, pp.232–233].
- 退屈の第二形式 (何かに際して退屈すること) [42, p.205]
  - 例えば、パーティーに参加してなぜか退屈してしまうこと [42, p.218].
  - パーティーに際して退屈していると同時に、  
そのパーティーが退屈を押しえ込むための気晴らしである。  
このように退屈と気晴らしとが独特の仕方で絡み合っている [42, p.223].
  - 暇 (客観的) ではないが退屈 (主観的) しているという事態 [42, p.230].
  - **自分に向き合うだけの余裕**があり、「安定」と「正気」がある [42, pp.232–233].
- 退屈の第三形式
  - 「なんとなく退屈だ」という声私たちの存在の奥底から響いてきて、  
そこに耳を傾けないわけにはいかないこと [42, pp.236–237].
  - この声から逃れるにあたり、日々の仕事の奴隷になることを選択すれば、第一形式の退屈が現れる。  
退屈と混じり合うような気晴らしを選択すれば、第二形式の退屈が現れる [42, p.300].
  - 退屈する人間には自由があるのだから、  
決断によってその自由を発揮せよとハイデッガーは言う [42, p.243].

これを踏まえ國分は〈暇と退屈の倫理学〉として次のように論じる\*23。ハイデッガーの結論によれば、第三形式の退屈の中にある人間は決断することで自由という人間の可能性を実現させる。しかし決断した人間は決断された内容の奴隷になるのであり、それは第一形式の退屈のなかにある人間となることに他ならない [42,

\*23 〈暇と退屈の倫理学〉とは、見方を変えれば〈忙しさの倫理学〉でもある。

pp.301–302]. そして人間は普段、第二形式がもたらす安定と均整のある穏やかな生を生きており、何かが原因で「なんとなく退屈だ」の声は途方もなく大きく感じられるようになり苦しくなると、第三形式＝第一形式に逃げ込み仕事・ミッションの奴隷になるのである [42, p.305].

詳細は以下のノートを参照されたい. <http://everything-arises-from-the-principle-of-physics.com/wp-content/uploads/2020/08/%E6%9A%87%E3%81%A8%E9%80%80%E5%B1%88%E3%81%AE%E5%80%AB%E7%90%86%E5%AD%A6.pdf>

■國分功一郎・熊谷普一郎による後日談 國分は『暇と退屈の倫理学』を書く際に、精神疾患の話はしないという制約を自分自身に課していたものの、結果的には精神疾患の話をしてしまっていたと振り返っている。実際「なんとなく退屈だ」という声が心のどこかから聞こえてくるという、ハイデggerの言う退屈の第三形式は、ほとんど幻聴の体験と言える。すると『暇と退屈の倫理学』は肯定的に捉えれば、一見ライトな「退屈」という日常的問題をあえて哲学的に扱うことで、それと地続きな精神疾患というヘビーな問題までを串刺しにした論考だったと言える [8, pp.169–172].

■レトリック 自らの忙しさを自慢げに「私は秒単位で動いている」などと表現・豪語する者がある。しかしそれに動じることはない。基礎物理に興味のある人間なら、例えば「私は Planck スケール (あるいは宇宙論的な時間スケール) でものを考えられる」と言い返せばよい。Planck 時間は  $t_P = \sqrt{\hbar G/c^5} \sim 10^{-44}\text{s}$ .

## 12 受験の正義をめぐって

いわゆる「受験戦争」の激化の背後には、資本主義の下での競争原理があると考えられる。しかるに試験の難度に関わらず、「敗者が落ちぶれるのは努力を怠った本人の自己責任であり、それは人間としての価値が低い証拠である」という資本主義的(とりわけ新自由主義的)イデオロギーはそれ自体で、事実認識として容認できない。そこには哲学のかけらもないことを、本稿では Spinoza 描像に基づいて説明してきた。

### 12.1 教育が脱商品化されたら

社会の富が脱商品化され、コモン(共有財産)として民主的に自治・管理されるポスト資本制社会では、「各人は能力に応じて貢献し、各人は必要に応じて取る」ことが許される。そこでは教育も脱商品化・無償化され、万人がアクセスできるようになる。もし例えば大学の授業内容がネット上で無料で独学できるようになったら、皆、高い学費を払って大学に入学すること、さらには、そのために過酷な受験勉強を乗り切ることさえ、馬鹿馬鹿しくなるだろう。実際、今の学生が授業に出席するよう指導・管理されているのは、学費負担者(≒親)が「教育商品」の買い手の権利として、自分の子供に授業を受けさせるよう大学に要求するようになったことが主要因であるにすぎない [32, pp.41–43]。また周知のように受験勉強は本物の学問と違ってくだらないものであり(そこは共通認識として良いだろう)、入試問題においても、受験に特有の「思考力を問う問題」という名の、事実上、背景知識がなければ解けない無理難題や、パズル要素の強いペダンティックな知的お遊びが出題される傾向がエスカレートしている。もちろん高尚な問題が解けるのは結構なことだが、誤解を恐れずに書けば、入試の難問・奇問が解けなくても、必ずしもその後の勉学に支障はない。したがって受験勉強は決して「誰もが乗り越えるべき試練」だとは言えない。(そもそも一般論として、他人に何かを強制することを正当化できる根拠など存在し得ない(当為命題の虚構性)。) 大学教育を脱商品化しさえすれば、原理的には皆、受験勉強を飛ばして大学レベルの専門分野の学習に無料で進めるはずである(後は学問との相性と時間の問題だ)。教育が脱商品化にはそれだけのインパクトがある。

もちろん友人と学問について議論する場を持つことも重要である。しかしながら空間を新自由主義的に再編し、学生を孤立させて管理している今日の大学に、そのような精神的充実の場を求めることは難しい。また大学によるオンライン授業の導入も、他人との交流を不要にし、学生を孤立させるテクノロジーという側面を持つことには注意が必要である [32, pp.39–43]。とは言え教育の脱商品化という理念自体が間違っているわけではない。

以下のページでは個人的に作成した理論物理学のノート群を公開している。

<http://everything-arises-from-the-principle-of-physics.com/>

これらは公的には結果的に、「教育の脱商品化」という意味を持ち得るだろう(もっとも「焼け石に水」かもしれない)。いずれにせよ、資本の増殖を目的とした強制的な勉強や労働が将来、各人の自由な発展に置き換えられ、それが他人からの怨嗟を招く現在の能力主義・格差社会と違い、万人の自由な発展ともなるような社会が訪れることを強く願っている。

■大学の授業料値上げの背景 [44, pp.49–52] 1970年、国立大学の授業料は年額1万2000円だった(月1000円)。ところが70年代前半に国立大学の授業料が3倍に引き上げられた。当時は高度成長期まっさかりで、政府には十分な税金が入ってきた時代であり、値上げする財政的必然性はなかったにも関わらず、である。これ

は学園闘争後に政府が学生たちを抑え込むために考案した1つの方策と考えられる。実際、数十万人の学生たち1人ひとりを監視するマンパワーは大学にも政府にもない。そこで授業料を大幅に値上げし、政府は学生管理を親たちにアウトソーシングしたのである。つまり、1万円札を窓口に出すと大学生になれた時代では、どこの大学のどこの学部に行くか、親と意見が違っても、「じゃあ、いいよ。授業料自分で出すから、もう口出すな」と啖呵(たんか)を切ることができた。しかし授業料が値上げされると、実質的に学費を払うのは親たちとなった。そして親たちは相当額の「教育投資」を強いられたため、それを回収しようとする。子どもはちゃんと勉強しているのか、単位は取れているのか、4年で卒業できるのか、などと、子どもたちの暮らしぶりをうるさく監視するようになった。こうして政府は学生たちの監視を親たちに代行させ、学生管理のコストを劇的に軽減することに成功したのである。当時の文部省にはなかなかの知恵者がいたものだ。

■加筆 私は余技として個人的に物理の教科書のノートを作成し、ウェブページで公開している。それはもともと私の満たされない承認欲求にドライブされて始めたことではあるが、そのような世俗的な悩みを離れて、少し大きなことを言えば、世間的には、この種の仕事(無償ではあるが)は教育の脱商品化という意味を持ち得る。もはや情報化社会という言葉さえ死語になりつつある時代にあって、あらゆる知識を無償化しようという精神には大いに共感できる。少なくとも理論分野に関しては、既存のメディアを利用して教育を脱商品化することは、技術的には比較的容易と考えられる。例えば図書館にある書籍の1%、いや0.1%だけでも(重要なものから優先的にpdf化して\*24)ネット上でアクセス可能にできれば、その影響力は測り知れない。歴史的にも、近代的な自然科学・物理学の誕生の下地を準備したのは、自らの経験的・実践的な知を重んじ、それを俗語で積極的に公開した、一般大衆(アマチュア)による言わば「16世紀文化革命」であった[33]。

- ただし一部の YouTuber のように人気を得ることを優先し、学問を生煮えのエンターテインメントとして面白おかしく流布している事態にはあまり感心しない。これには YouTuber を人気者に押し上げている有象無象にも非がある。ボードリヤールにならって言えば、おそらく問題の根本は専ら、YouTuber の取り巻き連中が情報に付与された観念やイメージを延々と「消費」するばかりで、情報そのものを知識として受け取り「浪費」することができず、したがって一向に満足が得られないことにあると想像される。
- また Wikipedia 等のネット上の情報は必ずしも信憑性がないという批判もよく聞く。(現況では ChatGPT も理論物理のやや高度な問題にはほとんど歯が立たない。)とは言え、完全に間違いを犯さない人間はいない以上、ネット上であれ出版物であれ、情報の正確性は程度の差の問題ということになる。(ChatGPT の回答の性能もまた近い将来に改善されたとしても、信憑性の問題は原理的には残る。)そうであるならば、個人的に教科書のまとめノートを公開することは、独りよがりな“トンデモ理論”を唱えることや、エンターテインメントへと墮した品のない動画コンテンツと50歩100歩であるとしても、その50歩の差に実効的にものを言わせることができるはずである。
- 最後に教育の無償化によって、仮にいわゆる「機会の平等」延いては「公正な競争」が完全に実現したとしても、競争原理の下での弱肉強食や「負け組は努力を怠った自業自得」といった自己責任論は、もとより哲学的に正当化し得ないことを強調しておきたい。人間には自由意志がない以上、意志を抱くことや努力することは、それが神即自然の必然性として実現しない限り絶対に不可能だからである。確かに学才に恵まれなかった者を馬鹿にしたくなる気持ちや、実際に弱い者虐めをすることが抗い難い誘惑

\*24 ただし重要な本を人気の本と解釈すると、「図書館にはベストセラーだけ置き、閲覧数の少ない本は処分しろ」といった類の、市場原理の適用に横滑りしかねないことに注意を要する。

的な快感をもたらすことも正直よく分かる。しかし Spinoza 描像はそれを矯正し上書きできるほど強力で健全な愉悅を与えてくれるに違いない。

内田樹の言葉を借りつつ、以上の論点をさらに敷衍する。

- [http://blog.tatsuru.com/2024/05/01\\_0912.html](http://blog.tatsuru.com/2024/05/01_0912.html)
- [http://blog.tatsuru.com/2024/07/21\\_0916.html](http://blog.tatsuru.com/2024/07/21_0916.html)
- [http://blog.tatsuru.com/2025/01/20\\_1117.html](http://blog.tatsuru.com/2025/01/20_1117.html)

今日の日本の権力者は金と権力には執着するものの、知識や技能 (文化資本) には関心を示さない。他方で文化資本は金や権力と違い、他人に贈与しても目減りしない。すると文化資本をコモン (共有財産) として開放することを通じて公共を再生し (図書館の開設・維持など)、市民の知的成熟、ひいては現実変成力を養うというコミュニズムの戦略には勝算がある。それは既に日本の水面下で広がっている動きであり、集団のための犠牲を強要するソ連・中国型の共産主義とは対照的に、個人の自発的な貢献に委ねられている。希望的観測としては、私が公開している物理のノート (PDF) もその一環に位置付け得る。確かに最初はそれは、自分の行ってきた独学が周囲から評価されないことに対する欲求不満から始めたことである。しかし当然ながら、自分の賢さを誇示し他人を出し抜くだけの不毛な競争に労力を費やす中で、集団的な知性は衰えてゆく。そもそも学問は知識の量や学習の速さを競うものではない。(それが分からない人はおそらく、学問に向いていない。12.2 節も見よ。) 知的な営みの本質は「競争」よりも、むしろ「協働」であり、知識はコモンの代表例である。

「紙の本にまさる媒体を人類はまだ発明していない」とする一方で [39, p.122], 電子書籍について内田樹は次のように論じている [39, pp.168–171]。すなわち書籍の電子データ化により「アクセシビリティは飛躍的に向上」し、それは「私たちの知的アクティビティをおおきく活性化してくれるはずである」。もちろん「本が売れなくなる」という負の側面はあるものの、「テクノロジーの進歩はその代償として必ず『それまで存在した仕事』を奪う」ものであり、「それは圧倒的な利便性を提供するテクノロジーを導入することの代償として受け入れざるを得ないのではないか」。[コモンが脱商品化されて困るのは我々が資本主義の中にいるからであり、生活に必要なあらゆるものが脱商品化されれば、収入がなくなることは問題にならない。] さらに言えば「紙の本の印税だけによって生計を立てる」という生き方は既に難しく、著作権者の相当数は「それで食っている」著作権者ではなく、著作権の継承者である。

著作権からの収益が確保されないなら、一切テキストの公開を許さないという人はそうされればよいと思う。

それによってその人のテキストへのアクセスが相対的に困難になり、その人の才能や知見が私たちの共有財産となる可能性も損なわれても、そんなことは著作権保護に比べて副次的なことにすぎないというなら、仕方がない [39, p.173]。

[私たちは全員が「無償のテキストを読む」というところから長い読書人生をスタートする以上、] 無償で読めるテキストが量的に増大することは、リテラシーの高い読者を生み出すことに資することはあっても、それを妨げることになるはずはない。

「テキストがリーダブルであるか否かを判定できる目の肥えた読者」が増えることにどうして著作権者たちは反対するのか？

それを説明できる合理的な理由を私は一つしか思いつかないが、それを言うと角が立つので言わない [39, p.173]。

さらに書物全般については、次のように論じられている [39, pp.194–195].

書物は本質的に公共財です。書物が商品として流通しているのは、そうすることで良質の書物がかかれ、スムーズに流通し、多くの人に読まれるチャンスが増えるからです。僕はそう思っています。

もし書物が商品であるせいで、くだらない本がかかれ、流通過程で「中抜き」され、著作権がうるさく言われ、読みたいという人の手になかなか届かないということなら、商品的性格は書物の価値を損じていることとなります。(中略) 僕の本の商品的性格が強まるせいで、本を読む人が減るというのなら、書物の商品的性格は抑制してほしいと思う。

## 12.2 学問は競争と無縁の営みである

学びや知的活動は本来、競争や査定とは無縁である。

生まれてからずっと子どもたちは相対的な優劣を競い、査定されることに慣らされている。学校では成績をつけられ、部活では勝敗を競わされ、会社では勤務考課される。ずっとそうやって育ってきた。だから、問題に答えて、採点されて、その点数に基づいて資源の傾斜配分に与るという生き方以外の生き方がこの世にあることを知らない [強調ママ]。ほとんどの人は「査定に基づく配分」を地球誕生以来の自然界のルールであるかのように信じ込んでいる。

[なるほど、このような状況ではなかなか、純粹に自分の興味に基づいて何かを勝手に独学しようという発想も生まれてこない。] しかし世の中には競争以外の生き方がある。その一例として武道が挙げられる。武道は本来スポーツのように勝敗強弱巧拙を競うものではなく、むしろ修行的な性格を持つ。そして武道修業の目標は「場を主宰する」ことである。この観点からすると、「査定」を求める限り我々は「後手に回る」ことになり、永遠に「場を主宰する」ことができない。(http://blog.tatsuru.com/2023/01/03\_0945.html)

受験勉強も同じです。「みんながしていること」を「他の人よりうまくやる」競争ですから、特定分野での知識や技能は向上するでしょう。でも、**集団全体の知的水準は下がります** [強調ママ]。だって、「他の人がしないこと」に興味を持つことに対して強い規制がかかるからです。「そんなことをしても受験の役にまったく立たないぞ」という言葉で、子どもたちのさまざまな知的関心が抑制されてしまう。

でも、人類の歴史が教えているのは、「さしあたりは受験の役に立たない」ような知的活動がしばしば集団的な規模での知的ブレイクスルーをもたらしてきたということです。受験勉強をさせることには社会的な意味があることは僕も認めます。でも、その代償として、場合によっては致命的な知的リスクを集団的な規模で引き受けているということについてはもっと警戒心を抱くべきだと思います。(http://blog.tatsuru.com/2023/08/29\_1214.html)

## 12.3 算数についての備考

算数では全般的に応用の効く方法として、未知数を文字で置いて立式する習慣を身に付けると良い(算数の問題の大部分は1次方程式を解くことに帰着する)。これは「相当算」「年令算」といった各論の解法を個別的に覚えなくても、それらを統一的に理解することを可能にする。このことは問題の意味レベルの個別的な文脈に依らずに、計算を機械的に行うことができるという事情に依っている。それは良い意味での思考の省略であ

る。逆にそうした代数計算を迂回するには、奇抜な発想(や、場合によっては帰納的推論などによるごまかし)が必要であり、それを「思考力を問う問題」として小学生に押し付けるのは責任転嫁というものである。

## 12.4 学問を続けるには研究者になるしかない？

私は昔から「物理の勉強がしたい」と言うと、「では将来は研究者ですね」と返されることに違和感を覚えていた。自分勝手を承知であえて正直に言えば、私は個人的に勉強がしたかったのであって、必ずしも研究がしたかったわけではないからだ。しかし考えてみれば、「将来は研究者ですね」というような応答も無理はない。と言うのも、かつて興味本位で科学に取り組むことが許されたのは貴族や有閑階級の人間に限られていたのと同様、人生の大半を労働時間に充てることを余儀なくされる現代の資本主義社会にあっては、長期的に学問に携わることが世間的に認められている正当な立場は研究職くらいしかないからだ。今思えば、これは資本主義の構造的な問題なのである。必要労働の再配分により労働時間が大幅に短縮したポスト希少性の世界においては、万人がまとまった時間を気兼ねなく(そして研究成果を要求されることもなく)、趣味や遊びとしての学問に費やすことができるようになるだろう(他方で研究者もまた「社会の役に立つ研究をしる」という抑圧的な倫理観から解放される)。また受験勉強はなくならないとしても、今ほど苛烈なものではなくなり、多少は有意義なものとなるかもしれない。

## 12.5 受験をめぐる家庭内の問題

入試問題が「思考力を問う問題」という名の、事実上、背景知識がなければ解けない無理難題や、パズル要素の強いペダントチックな知的お遊びなどの理不尽さを伴っていることを、現場の受験生本人らはよく熟知している。他方で周りの人間(家族など)が、たとえ教育熱心であっても目が節穴で、勉強の中身についてはまるで理解しておらず、そのような問題を素朴に「やればできる」と思い込んでいるとすれば、それは受験勉強を単なる「やる気の問題」へと矮小化し、結果を出せず万策尽きている受験生を怠慢な悪者へと不当に仕立て上げ、彼または彼女に形ばかりの的外れな「正論」を吐きかけることへと繋がる危険がある。あるいはそうすることで、自分の子ともに対する優位性を保持しようとしているのかもしれない。いずれにせよ、そのような無知や頑迷さは時として、親を話し合いの通用しない分からず屋にする。子供の反論を「言い訳」や「屁理屈」の一言で片付け、本人が悪いという結論ありきで一切、聞く耳を持たない。あるいは子供の言い分を頑なに否定しようとして躍起になるあまり、自分が直前に述べたことを都合良く失念したり、自分の言っていることが明らかに支離滅裂な自己撞着に陥っていても、それを理解できなかつたりする。さらには子供を朝早くにたたき起こし、下校時刻と同時に校門前から車で塾へ連れ出し(本人の意向や周りの目は無視)、家では常に監視されているというプレッシャーを与えながら、四六時中、机に張りつかせる。しかしながら学問では(とりわけ行き詰ったときには)立ち止まって考えることも必要である以上、その一見「無駄で非生産的な時間」を徹底的に排除し、常に机に向かって鉛筆を動かし続けさせることは、かえって無内容な作業や「勉強している振り」を強いることになり、勉強の足枷にすらなる。それ以前に、そのような子供に対する支配や過干渉、虐待はそれ自体で不正義である——たとえそれが善意からの行為だとしても(地獄への道は善意で敷き詰められている)。子供の立場は弱く、自力でそのような状況から逃げ出すのは困難である。このとき追い詰められた子供が怒りから物を壊したりするのは当然のことであるが、それすらも本人の落ち度とされ、子供に自制心を求める有様である。一部の家庭ではこのような、児童虐待として摘発することのできないグレーゾーンの問題を抱えている。それはもはや受験の問題ではない。

## 13 物理学と自由意志否定論 (形而上学)

13.1 節で確認するように、科学的真理は帰納的推論の産物であるため、絶対確実な知識ではあり得ない。このため Spinoza 描像の正しさを経験科学で以て証明することはできず、Spinoza 描像はあくまで「信じるか信じないか」というような形而上学的な思想であることになる。しかしその形而上学的な思想は、物理学を始めとする自然科学を支えている前提を成していると見なすことができ、その意味で自然科学と相性の良いものと言えることを 13.2 節で指摘する。実際、科学、特に物理学の理論は神即自然の必然性を具体的に書き表したものであり、それ故、Spinoza の汎神論の傍証になっていると見ることができる (図 24 参照、もちろん必ずしもそのように見なくても良い)。そしてこのことが物理学の最大の魅力であり、物理を学ぶ 1 つの原動力となるのである。

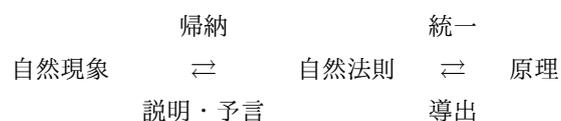
それで Spinoza 描像に傾倒した者が、Spinoza 描像の通用しそうな居場所を物理学が提供してくれるとナイーブに期待し、物理学は自分を受け入れる受け皿となってくれると考えるのはある程度自然な成り行きかもしれない。また「人や世の中はどうあるべきか」というような答のない問題は擬似問題であると感じている者にとって、「どうあるべきか」という価値判断に関与せず、純粹に世界が「どうなっているか」を記述する自然科学は相性が良く、物理学は自分の気持ちに正直に生きられる居場所を提供してくれることだろう。自分に正直でいられないことはまさしく、自らを貫く「必然性としての自由」を踏みにじられている状態である。

### 13.1 科学的真理

ここでは月並みな内容ではあるが、物理学の成り立ちとその周辺について簡単に確認する。また科学的な真理とはどのような意味での真理であるのかを論じる。科学哲学のさらなる話題については以下のページを参照されたい。

<http://everything-arises-from-the-principle-of-physics.com/preamble/s-okasha-philosophy-of-science>

物理学の営みは大まかには以下の図式にまとめられる。まず実験や観察を通して得られる経験的事実から自然法則が帰納される。そして諸法則は最も根本的な法則である原理へと統一される。逆に原理から出発して諸法則を導き、自然現象を矛盾なく説明することが物理学の目標とする理想的な形であると考えられる。



ここで原理に対してさらにその起源を問うことはできない。原理から導かれた法則が現象を矛盾なく説明できる限り、原理は正しいと見なされる。これは科学的な真理が絶対ではないことを意味する。このような理論の蓋然性は帰納的推論の産物としての宿命である。

■「原理」「定理」 Archimedes (アルキメデス) の「原理」などは今日では「法則」と言えるだろう。なお Bernoulli (ベルヌーイ) の「定理」のように、「法則」の代わりに「定理」という言葉が用いられることもあるけれど、これも実質的には「法則」である。

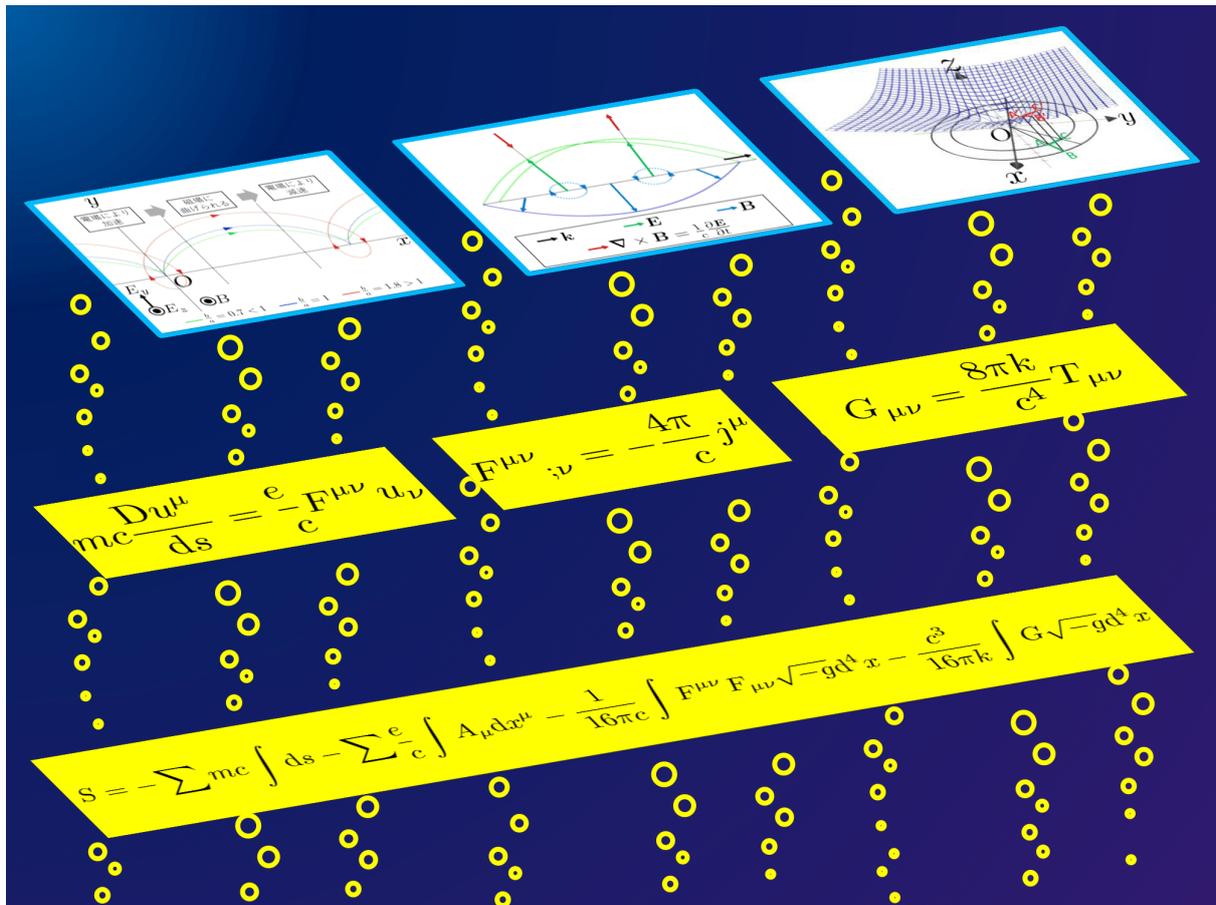


図 24 神即自然の必然性と物理法則の同一視 (図 9 も参照)

### 13.1.1 演繹と帰納

演繹と帰納について述べる。演繹とは前提が真ならば結論も必ず真になるような推論のことである。演繹的推論を用いれば、数学に見られるような厳密な議論を組み立てることができる。ただし演繹的推論において、前提が真であること自体は保証されない。演繹的推論のみから構成された数学の体系や Spinoza の『エティカ』は、議論の出発点となる前提が現実を反映している保証がないため、現実について語るができない (4.1 節参照)。

一方、帰納的推論とは、実験や観察を通してすでに調べ終わった対象に関しては真であると分かったことを前提として、一般的な結論を探り当てるものである。これを用いれば現実世界に関する何らかの結論が得られる可能性がある。科学の知識とはまさにそのようなものである。しかしこれはある種の飛躍であるため、誤った結論に行き着くこともあり得る。実際これまで太陽が毎日昇ってきたからと言って、絶対に明日も太陽が昇ってくるとは言い切れない [45, pp.21-23, p.44]。

以上をまとめると、数学は厳密であるが現実世界について語り得ないのに対し、科学は現実世界について語り得る代わりに絶対確実な知識とはなり得ないと言えるだろう (図 25 参照)。

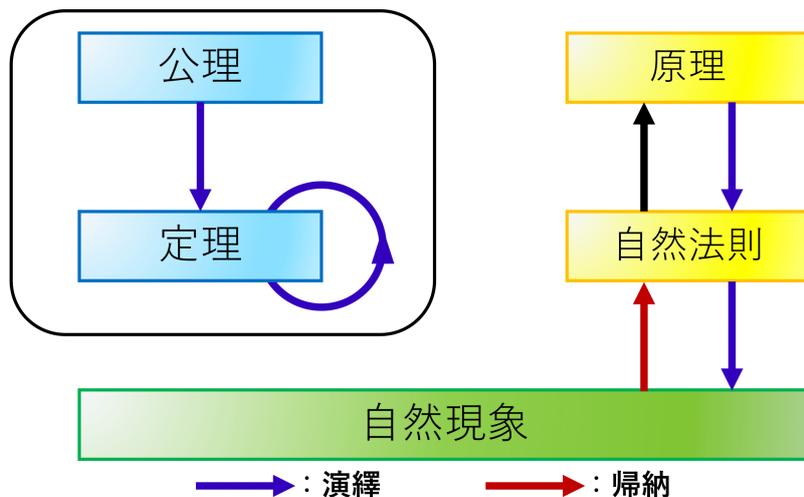


図 25 演繹と帰納，数学と科学

なお，数学は演繹的推論だけを用いて記述されることが要求される．例えば  $\alpha > 0$  に対して

$$I_n(\alpha) \equiv \int_{-\infty}^{\infty} x^{2n} e^{-\alpha x^2} dx$$

を考える．なるほど

$$I_0(\alpha) = \sqrt{\frac{\pi}{\alpha}}, \quad I_{n+1}(\alpha) = -\frac{d}{d\alpha} I_n(\alpha)$$

に注意し  $I_1(\alpha), I_2(\alpha), I_3(\alpha), \dots$  を逐次的に求め，任意の自然数  $n$  に対する表式

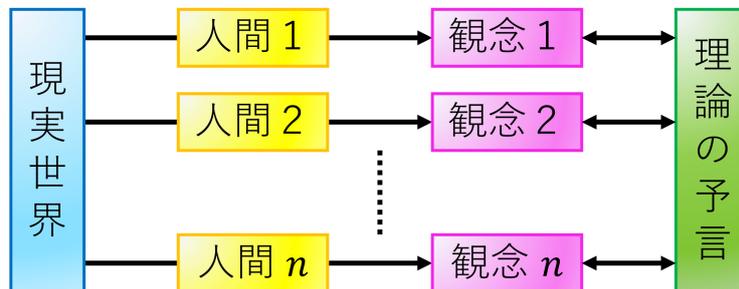
$$I_n(\alpha) = \sqrt{\pi} \frac{(2n-1)!!}{2^n} \alpha^{-(2n+1)/2}$$

を推定するのは帰納的推論である．しかしこの予想が正しいことの証明に用いる数学的帰納法は，その名に反して演繹的な手法である．

### 13.1.2 真理の対応説

科学的真理は帰納的推論の産物であるため，蓋然的である．しかしそれは事実命題の形をとり，現実世界と一致するかを確かめて真偽を判断できる可能性がある．すなわち理論から矛盾なく導かれた予言が現実の自然現象を説明できる限り，理論も正しいと考えられる．このように現実世界と一致する観念を真理と考える立場は，真理の対応説と呼ばれる [12, pp.47-48]．もちろんこれはこれは客観的な現実世界なるものが，私たちの認識するありのままの形で主観の外側に実在していることを前提としていることになるだろう (素朴实在論)．

私たちが現実世界をありのままに認識していないとしても，科学的な探求は意味を持つ．現実世界の認識の仕方が私たちに共通していれば，理論の予言が私たちの認識と一致するかについて合意が得られると考えられるからである (図 26 参照)．このような考え方は Kant の Copernicus 的転回として知られる [46, p.122]．



(観念 1) = (観念 2) = ... = (観念 n) ≡ (観念),  
 「(理論の予言) = (観念)」 ⇒ 理論は正しい

図 26 真理の対応説, Kant の Copernicus 的転回

## 13.2 物理学と自由意志否定論 (形而上学)

物理学は以下に挙げる前提を暗に認めているように見える。

- 精神は物理現象に影響しない (1)
- 自然現象は必然性に基づいて説明され、自由意志は介入しない (2)
- 自然現象を統一的に説明する究極の原理が存在する (3)
- 自然は目的因に従っているのではない (4)

これらは Spinoza 哲学・Spinoza 描像と共通する、あるいは少なくとも相性の良い思想と言えよう。さらに 4.2 節で見たように、量子力学の非決定論的性格は Spinoza の汎神論と両立すると考えられる\*25。

また一般に科学は次のような性格を持つと考えられる。

- 単に世界がどうなっているかを記述し、価値や理想、目的に言及しない (象牙の塔)。
- 本来は役に立てるためのものではなく、実用と無縁である。
  - － 技術はあくまで科学の副産物である。
  - － 一見すると科学の進歩のおかげで人間は自然を支配できるようになったと思える。  
 しかし科学の理解が進むとは人間が自然の一部を成し、  
 自然に支配されているのを知ることには他ならない。
- 科学の歴史的背景には人間臭い部分があるかもしれない。  
 しかしあくまで科学とは歴史的背景から切り離された理論体系を指すのであり、  
 科学そのものは純粹である。

\*25 Einstein は「神はサイコロをふらない」として量子力学の非決定論的性格を認めようとしなかった。Einstein は Spinoza の決定論的自然観を信じていた。

### 13.2.1 自然科学 (物理学) と自由意志否定論 (形而上学) 《周辺議論》

■**神経生理学的な見地からの Libet の示唆** Libet は神経活動と内面的経験との間の時間的關係に焦点を当て、心身の関係や自由意志の有無といった問題に科学的にアプローチしてきた。科学的な真理とは蓋然的なものであるため (13.1 節参照)、こうした形而上学的な問題に決着をつけることは不可能であると考えられるけれども、Libet が示唆することは興味深い。そこで Libet の見解を以下にまとめる [47]。

- 刺激が意識に上る、すなわちアウェアネス (気づき) を生み出すには  
脳の適切な活性化が最大で約 0.5 秒続くことが必要であり、  
このためアウェアネスは実際に刺激が与えられた時点からかなりの時間遅延する。
  - アウェアネスが意識に現れる前に、  
他の入力によって経験内容が変更・歪曲されるのに必要な生理学的時間は十分にある。
  - 内面的経験は刺激が起きた時点まで、自動的、無意識的、かつ主観的に逆行して遡及するため、  
主観的にはアウェアネスの遅延に気付かない。
- 無意識に進行する精神活動 (興味を惹いたもののみ)。
  - 車の前に少年が飛び出してきたことを自覚する前にブレーキを踏んでいること。
  - 数学者が一旦、意識的な思考を中止すると解法の発見に繋がること。
  - 創造的なアイデアが夢や空想の中に現れること。
  - 発声、発話 (告白)、作文。
  - 楽器の演奏、歌唱。
  - 野球でバッターが無意識にボールのコースを感知しスイングするかの決断をすること。  
ピッチャーが投げたボールが自分に届くまでに意識的にこのようなことをする時間はない。
- 自由で自発的な運動に至る準備の起動は脳内で無意識に始まっており、  
「今、動こう」という願望や意図の意識的なアウェアネスよりも  
およそ 400 ミリ秒かそれ以上先行している。
  - しかし無意識の脳活動によって開始されつつある運動行為を、  
意識を伴った意志は実行または「拒否」する余地がある。

■**第 13 章の特徴 (2) について：自由の名を冠した物理用語** 物理学でも慣習的に自由という言葉が用いられる。自由ベクトル、自由落下、自由粒子、自由場、系の自由度、平均自由行程、自由電子、自由エネルギーなど枚挙に遑がない。

■**第 13 章の特徴 (3) について：万物の理論と神即自然の相違、物理学帝国主義とその表面的な困難** 物理学における万物の理論は Spinoza の神即自然とよく似ている。万物の理論とは、全く近似を含まずあらゆる現象が例外なくそれに従う、自然界の最も根源的な究極の原理のことである。しかしやや神経質に区別すれば、万物の理論があくまで現象を説明する概念であるのに対して、神即自然はそれを体現する実在と言えるだろう：

$$\text{神即自然} \left\{ \begin{array}{l} \text{理由} \leftrightarrow \text{万物の理論} \\ \text{原因} \end{array} \right.$$

ここで原理的にはあらゆる現象が万物の理論に従っているとしても、実際に全ての自然法則が万物の理論から直接導けるとは限らないことを断っておこう。例えば、メダカは水流と逆向きに泳ぐ性質があるという法則

を考える。このときメダカが水流に逆らっていると判断される状態を実現する微粒子の配置と速度の組合せは無数に存在する。このように物理的レベルで多重実現される諸法則を物理の法則に還元することは困難である [45, pp.67-70]。そして万物の理論から直接導かれぬ法則には例外が認められよう。

■現象の対義語は…… 一般には、現象の対義語は本質とされている。ここで言う本質とは、物理のことだと思えば良いかもしれない。あるいは私に言わせれば、現象の対義語は物理である。なお本質と現象はそれぞれ、Spinoza 哲学で言うところの実体と様態に対応すると考えられるかもしれない。

■信仰のない科学？ 科学的世界観、とりわけ物理学の根底には、「全ては必然である」というような形而上学的思想があると考えられる。ただしその正しさは科学によって証明されるものではなく、科学は哲学・宗教と切り離して論じることができる。とは言え、哲学・宗教と切り離された“純粋な”科学に、我々はもはや意味を見出し得るのだろうか。そのような信仰のない科学・物理学に精通していたとしても、それは「私は物理学を学んできたけれど、結局のところその物理法則を全く信用しておらず、それは人間の自由意志などによって容易に破られ得るとも思っている」と言っているようなものではないか（それを悪いことだとまでは思わないけれど）。そのような宗教性のない科学観は、一方では普遍的な自然法則の探求を知的な態度と認めながら、他方で自然法則は常には成り立っていないけれども良いとでも言うようなナンセンスへと墮す他ない。このような疑問はおそらく、Einstein の考え方にも共有されている。

宗教的世界観の方が首尾一貫 関連して、言い間違いのようなしくじり行為を単なる偶然として片付けようとする人を、Freud (フロイト) は次のように批判している。以下の指摘は、自由意志の存在を信じて疑わない人に対しても同様に当てはまるだろう。

この人はどういふつもりなのでしょう。世界の事象の連続性からはずれている、あってもなくてもよいようなささいな事象があると主張するつもりなのでしょう。もし、このように自然界の決定論をどこかただの一点でも破るようなことをするならば、学問的な世界観を放棄してしまうことにもなります。みなさんは、神の意志が働かなければ、一羽の雀も屋根から落ちはしない、と断じた宗教的世界観のほうにどれほど首尾一貫した態度をとっているか、その人に指摘してもよいのです [48]。

もちろん既に何度も述べているように、偶然性や非決定論的を導入しても、何ら自由意志を救う助けにはならない。

■第 13 章の特徴 (4) について：変分原理と因果律 科学における説明は通常、機械論的因果律に基づき、目的因を持ち出さないと考えられる。例えば食べ物を消化するために胃があると説明するのではなく、胃があるから食べ物を消化できると説明される。これに反し、物理学における変分原理が目的論に陥っているのではないかという疑惑をここで取り上げよう。変分原理の例として、幾何光学における Fermat の原理を考える。これによれば与えられた空間の 1 点からもう 1 点へ至る光は移動の所要時間を最小にする経路を通る。これは光が所要時間を最小にするという目的を持って振舞っているという印象を与え得る。

意味のレベルで変分原理を目的論から救うには、光が意識を持ち道を選ぶ行為者であるという描写を捨て去ればよい。実際、ある 1 点から出た光は自分がもう 1 点を通過する初期条件を満たしているか知らないのである。

一方、抽象的だが厳密な方法でも変分原理は因果律と矛盾しないことが示される。Hamilton の最小作用原理を例にとれば、ここから Lagrange 方程式が導かれ、正則な Lagrangian で記述される系に対しこれは一般化加速度について解くことができる [50, 51]。これは Newton の運動方程式と同様、数値的に解くことができ

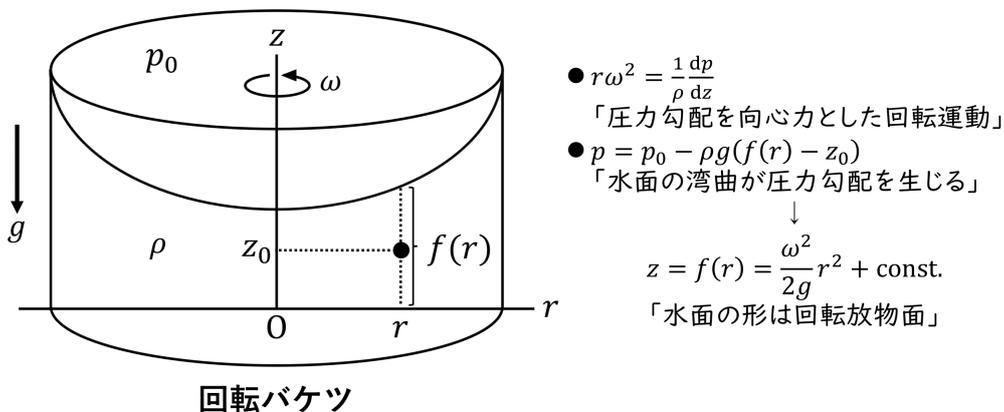


図 27 Newton の回転バケツにおいて水面は回転放物面になる (回転の角速度  $\omega$  は一定) [52, pp.232–234]

る形だから、古典的因果律は満たされている。

さらに古典的な極限で最小作用原理を再現する (非相対論的) 量子力学のメカニズムは、目的論とは無関係である。そのメカニズムとは、粒子の遷移振幅が Feynman の経路積分で与えられることである [49]。我々が任意に設定した終点ごとに確率振幅が定まり、終時刻における確率分布は場を成すため、やはり「粒子が目的地を知っている」という解釈は妥当でない。

■神即自然と「背景時空のない物理」 一般相対性理論 (以下 GR) の要求する時空概念の変更が, Spinoza の神即自然の概念にもたらす影響を考えよう。

まずは GR の提示する背景独立な物理について、やや息の長い説明を行う。GR において重力場は時空の歪みから立ち現れると、一般には理解されている。他方で代わりに時空こそが重力場の現れに過ぎないと見なすこともできる [28, p.9]。この点を納得するために、しばらく Einstein の思考をたどることにしよう。

空間や運動を物体の相対的な位置関係およびその変化として理解する西洋文化の伝統とは対照的に, Newton は物体の運動を絶対空間に占める位置の変化 (絶対運動) として記述した。もちろん Newton 力学においても [運動方程式は Galilei 変換に対して不変なので], 絶対空間 [ないし慣性系] に対する等速直線運動を検出することはできない。しかし加速度は識別できる。このことを示す議論として, Newton は回転バケツの実験を挙げている。水を入れたバケツを回転させると, 水面が凹んだ定常状態に落ち着く (図 27)。このとき水はバケツとともに回転しているので, 水は周囲のバケツに対して回転しているとは言えない。したがって水面の凹みをもたらす水の回転は, 絶対空間に対する運動であると Newton は主張する。これに対し Einstein は, 絶対空間とそれに対する“真の運動”というアイデアは間違っていると確信していた。[再び絶対空間を慣性系と同一視すれば] 運動の法則は慣性系の間だけでなく, 全ての基準系において同じでなければならない [28, pp.52–56]。

Newton の回転バケツの実験において, 水は不活性で大域的な絶対空間に対して回転しているのではなく, 力学的で (dynamical) 局所的な物理的存在であるところの重力場に対して回転していると Einstein は考えた。(ここで絶対加速を取り除くという問題は, Newton 相互作用  $F = Gm_1m_2/r^2$  を静的な極限に持つ場の理論を発見するという問題と合流する。) このアイデアは Einstein によるエレベーターの思考実験から導かれる。慣性力は重力と相殺するため, 自由落下するエレベーターは (少なくとも局所的には) 慣性系と区別できない。そこで Newton 的な“大域的”基準系を棄て, “局所的”慣性基準系を導入することが自然と求められる。局

所慣性系は局所的な重力場によって定義されるため、局所慣性系に対する慣性/加速運動は局所的な重力場に対する運動と言える。

任意の座標系  $x$  において現れる任意の時空点  $A$  (座標  $x = 0$  とする) 周りの重力は、 $A$  における局所慣性系  $X^I(x)$  (ただし  $X^I(0) = 0$ ) からの座標  $x$  のズレ、したがって微分係数

$$e_{\mu}^I(x) \equiv \frac{\partial X^I(x)}{\partial x^{\mu}} \quad (\text{値は時空点 } A \text{ で評価})$$

で表される。これが GR で導入されるテトラード場 [例えば文献 [53, pp.325–328] を見よ] である\*26。すると確かに重力場  $e_{\mu}^I(x)$  は、局所慣性系を  $X^I(x) = e_{\mu}^I(0)x^{\mu}$  で定義する [その逆ではない] [28, pp.57–61]。

ここまでの議論で、時空の正体は重力場であるという描像が浮かび上がってきた。さらに GR の背景独立性へと話を進めよう。

時空点  $A$  の周りで平坦である重力場  $e(x)$  (添字は省略) を考えよう。ここで能動的な微分同相写像により、別の時空点  $B$  周りの非平坦な重力場を点  $A$  へと移せば、点  $A$  の周りで非平坦となる新しい重力場  $\tilde{e}(x)$  が得られる。ところでもとの場  $e(x)$  に単なる (受動的な) 座標変換を施した結果が関数  $\tilde{e}(x)$  に一致するような、適当な座標変換を常に見出すことができる。するともし場の方程式が一般的な座標変換に対して共変的であるならば、2つの場  $e$  と  $\tilde{e}$  はいずれも場の方程式の解でなければならない。このとき適当な設定 (Einstein による“孔”の議論, 図 28) の下で、時空点  $A$  における物理 (重力場が平坦か否か) は一意的に決まらないことになる。これは一見すると、理論の共変性が決定論と矛盾することを意味しているように見える。しかし実際には2つの解は同じ物理的状況を表しており\*27、あくまで時空点  $A$  それ自体に言及することが物理的に無意味だったにすぎない。我々に問うことができるのは、例えば、2粒子の世界線の交差点において場が平坦か否かである。実際、微分同相写像は世界線の交差点における重力場を交差点とともに移すので (図 28)、そのような問に対しては決定論的な予言が可能である。このように、一般に場と粒子の多体系上の位置には物理的な意味がなく、それらの相対的な配置のみが物理的な意味を持つ。こうして GR の描像からは背景時空の概念が除かれる [28, pp.65–71]。

注解 1 このように相対性理論は、その名の通り相対性の理論であることになる。真に相対性理論の名に値するのは GR であって、一般的な語法に反して Rovelli が特殊相対性理論 (SR) を非相対論的 (または前相対論的) と呼んでいるのも頷ける [28, xxi]。

注解 2 一見すると GR の主要な目的は、適当な座標系で計量  $g_{\mu\nu}(x)$  を求めることで、与えられた時空点間の真の距離  $ds$  を、したがって座標系に依らない時空の幾何学を決定することであると言えそうである。しかし、ここで「与えられた時空点」はそれ自体ではもはや意味を成さない。同様に空間の点で流れる真の時間  $d\tau$  も、正確には空間の点に印を付けるための粒子の軌道に沿う固有時間として理解できる。

まとめよう。時空は重力場の現れであって背景時空というものはなく、あらゆるものは重力場に対して位置付けられるという結論に我々は至った。Rovelli によるレトリックの効いた表現を引用すれば、Einstein 方程式の解は“どこか (somewhere)”にあるのではない：それは、それとの関係であらゆるものが位置付けられるところの“場所 (where)”である [28, p.21]。それは言わば、海に浮かぶ島の上に動物が住んでいると思っていたら、実際には島自体が巨大なクジラだと分かるようなものである。同様に、宇宙は時空上の場か

\*26 すると計量テンソルは後から  $g_{\mu\nu}(x) = e_{\mu}^I(x)e_{\nu}^J(x)\eta_{IJ}$  で定義できることになる ( $\eta_{IJ}$  は Minkowski 計量)。このとき計量を用いて添字を上げ下げした量  $e_{\mu}^{\nu} \equiv \eta_{IJ}g^{\mu\nu}e_{\nu}^J$  は  $e_{\mu}^I$  の逆行列となる (これを逆テトラードと呼ぶ) [28, p.46]。

\*27 それらは Dirac が言うところのゲージ変換で互いに関係付けられる [28, pp.40–41]。

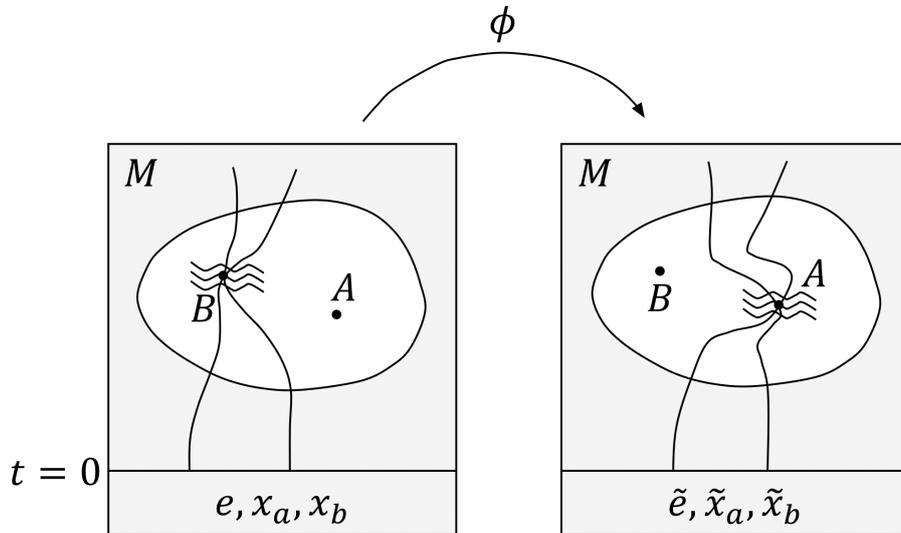


図 28 白い領域は物質のない宇宙の“孔”を表す．能動的な微分同相写像  $\phi$  は非平坦な (波状の) 重力場を 2 粒子  $a, b$  の交差点とともに点  $B$  から点  $A$  へ動かす．( $\phi$  は孔の内部にのみ施す．) [孔は周りの物質 (と初期条件) から本来、重力場が一義的に決定されるはずの領域という意味を持つ.]

ら成るのではなく、場の上の場から成るのである。これはあくまで例え話ではあるが、言い得て妙である。この観点からは重力場を含む力学的 (dynamical)・物理的な実在を取り除けば、時空すら残らないことになる [28, p.9, pp.73–75]<sup>\*28</sup>。時空は存在せず真に存在するのは重力場であるという見方と、重力は見かけ上の幻想であって真に存在するのは時空であるという言葉遣いの、どちらを採用するかは究極的には好みの問題であり、その意味で科学哲学における空間概念をめぐる相対主義と実体主義の論争は解消されたと言える [28, pp.76–78]。いずれにせよ Newton の絶対空間や SR における Minkowski 時空に代表されるような、粒子や場のダイナミクスから独立した大域的で非活性な背景時空の概念は、根本的な基礎理論の水準ではもはや支持し得ない。

このような概念的な新奇性は既に古典的な GR に備わっており、それは量子重力理論にも引き継がねばならないと考えられる。ループ量子重力 (LQG) は統一理論を目指す前に、この困難と直接向き合う、概念的に手堅く数学的にもよく定義されたアプローチである<sup>\*29</sup>。ループ量子重力は Planck 尺度<sup>\*30</sup>における非摂動的な、量子化された、離散的な時空構造へと導く。この時空構造によって紫外発散は除かれる [28, pp.6–9]。再びレトリックの効いた表現を引用すれば、短いスケールでは空間的な連続性がないため、理論には (文字通り!) 紫外発散の余地 (room) がない [短い波長を収容できる連続的な空間領域がないということ] [28, p.21]。

<sup>\*28</sup> したがって無重力という日常用語は不正確となる。いわゆる重力のない平坦な時空とは、正確には重力場の特定の値  $e_{\mu}^I(x) = \delta_{\mu}^I$  (したがって  $g_{\mu\nu}(x) = \eta_{\mu\nu}$ )、あるいは平坦な重力場として理解できる [28, pp.39–40]。

<sup>\*29</sup> 重力の量子論として人気の今一つの候補に、弦理論がある。弦理論は LQG と対照的に、重力を他の力や粒子と合わせて弦へと統一する形で、量子化することを構想する。弦理論は平坦な空間の QFT (場の量子論) の技法と概念的枠組みに深く根付いており、背景独立な QFT とは何かを理解するという、量子重力の主要な困難に直接取り組んでいない。[特殊相対性理論の文脈で Minkowski 時空において閉弦を量子化した場合にも、重力子 (に同定し得る 1 粒子状態) が得られることは象徴的である [54, pp.286–287].]

<sup>\*30</sup> 光速  $c$ 、Planck 定数 (を  $2\pi$  で割った値)  $\hbar$ 、万有引力定数  $G$  から構成される長さや時間、質量などの尺度。例えば Planck 長さは  $l_P = \sqrt{G\hbar/c^3} \sim 10^{-33}$  cm、Planck 時間は  $t_P = l_P/c \sim 10^{-44}$  s、Planck 質量は  $m_P = \sqrt{\hbar c/G} \sim 10^{-5}$  g である。 $c, G, \hbar$  を 1 とおく Planck 単位系ではこれらを単位として長さ、時間、質量を測ることになる [54, pp.58–59]。

さて、我々はようやく Spinoza の神について再考できる段階に達した。ここまで来れば結論は明白である。従来の非 GR 的な物理の枠組みでは、物理的・力学的 (dynamical) 実在を背景時空上に位置付けてきた。他方で GR の文脈における背景独立な物理は、時空の概念を解体して物理的実在——場——へと一元化する (粒子は場を量子化して得られる)。このとき万物は単一の実体の現れであるとする汎神論と、物理的世界観の相性がより一層深まることは明白である。Spinoza の神は時空の中に位置付けられるのではなく、時空も含めてあらゆる事物が神から産出されるのである。これこそが汎神論のアイデアに他ならない。統一理論への道りはなお遠いものの、この流れを汲んで仮に最終的に、神即自然を単一の場として理解できたら面白い。

LQG では重力場を含め全ての場は、背景時空に対してではなく、互いに対してのみ位置付けられるという描像に達する。LQG は統一理論ではないけれど、少なくとも概念的にはこのとき、存在するものは全て量子場に“統一”されたとも言える。ここから LQG は統一理論へ至るために必要なステップでもあることが予感される。Newton 力学が今日も近似理論として生き残っているように、LQG もまたその種の“永遠”の真理 [28, p.418] なのではないか。LQG には (素人の私にも) そう思わせる説得力がある。(あるいは私の錯覚かもしれないが。)

ループ量子重力において時空が離散的な構造を持つならば、水の表面の波が事物の振舞いを成すといった、連続体的な神のイメージはあくまで近似的なアナロジーへと後退するかもしれない。ただし時空構造は量子力学的な重合せと併せて考えられるので、神あるいは時空が恣意的な構造に固定的されるわけではない。

いずれにせよ物理学が今後いかなる世界観の変更を迫ろうとも、自然は単一の“何か”の現れであるという描像を物理学が前提とする、あるいは目指す限り、物理と神即自然の概念は整合的であり続けるだろう。Spinoza の神の概念が今日でも有効であり、ロバストたる所以である。

■神即自然と量子論の「多世界解釈」および「関係的解釈」 状態の量子力学的な重合せに関連して、多世界解釈についても言及してみたい。多世界解釈によれば、量子力学的な観測によって特定の状態が確定する際、宇宙が異なる観測結果に対応する複数の世界へと分岐すると考える。有名な Schrödinger の猫の思考実験の例では、観測によって宇宙は猫が生きている世界と猫が死んでいる世界に分岐し、我々の意識はそのうち 1 つの世界を経験する。このとき現実には宇宙はあらゆる時点で、無数のパラレルワールド (並行世界) へと分岐していると想像される。また分岐したパラレルワールドを含めた世界全体は依然としてあらゆる可能性の重合せになっており、波動関数の収縮は起こらない (よってこの枠組みでは波動関数の収縮の説明を回避できる)。

パラレルワールド全体は単一の実体、したがって神即自然と見なせる。実際この実体があらゆる可能性の重合せの状態であることは、『エティカ』第 1 部定理 16 における神即自然の説明と極めて整合的である：

神の本性の必然性から、無限に多くのものが [すなわち、無限知性によってとらえることのできるすべてのものが]、無限に多くの仕方では生じてこななければならない [3, p.34].

これを踏まえると神即自然の概念は、Spinoza のオリジナルの決定論的な自然観よりもむしろ、量子力学と相性が良いと言えるかもしれない\*31\*32。

ただし多世界解釈もまた、意識が分岐した特定の世界を経験することになる理由・機構を説明できない。ま

\*31 Spinoza の自然観が決定論的であるのに対し、量子力学的な確率法則を導入しても、Spinoza の汎神論 (とりわけ自由意志の否定) にとって致命傷にならないことについては、ここでは繰り返さない。

\*32 蛇足だが、私がある時、多世界解釈に惹かれた理由には、単にそれがエレガントだというだけでなく、そこに形而上学的なレベルでの精神的な救いを見出していたこともあるかもしれない：私が難病ミソフォニアを発症していないパラレルワールドも存在するはずである。そしてミソフォニアを発症した“この世界”を含め、物理的に考え得るあらゆる可能性の重合せが永遠の真理として神即自然を構成するのである。

たこの問は人間の主観と切り離せないように見える。他方で文献 [28, § 5.6] ではコペンハーゲン解釈と多世界解釈のジレンマから脱する第3の道として、量子論の關係的解釈が説得的に論じられている。以下ではその内容を簡単に要約する。(もっとも波動関数の収縮機構が与えられるわけではない。)

量子論では状態ベクトル  $\Psi$  (例えば波動関数) から、系  $S$  のあらゆる変数  $A$  に対して、その異なる測定結果  $a_1, a_2, \dots$  が得られる確率を計算できる。特定の測定結果の実現に応じて、波動関数は突然“収縮 (collapse)”する。ここで実験的な証拠だけからは、確率分布  $\Psi$  と一連の測定結果  $a_1, a_2, \dots$  のどちらが“現実の”存在かは決まらない。しかし我々は測定結果  $a_1, a_2, \dots$  を“量子事象”と呼ぶことにする<sup>\*33</sup>。

さて、量子論の解釈をめぐる困難の核心は、“観測される観測者”の思考実験によって端的に示すことができる。図 29 のように、系  $O$  が (時刻  $t$  に) 系  $S$  の変数  $A$  を測定し、次いで系  $O'$  が (時刻  $t'$  に) 結合系  $[S + O]$  の変数  $B$  を測定する場合を考えよ。(ここで擬人的には系  $O, O'$  は観測者と呼べる。ただし測定とはあくまで単なる物理系の相互作用であり、測定や観測という術語は本来、必ずしも人間の意識や主観を意味しないことに注意せよ。) 例えば初め系  $S$  は変数  $A$  がそれぞれ値  $a_1, a_2$  を持つ状態  $\Psi_1, \Psi_2$  の重ねせにあり、第1の測定で  $O$  は測定結果  $a_1$  を得たとする。このとき時刻  $t$  では

$$\begin{cases} c_1\Psi_1 + c_2\Psi_2 \rightarrow \Psi_1; \\ A \text{ は値 } a_1 \text{ をとる} \end{cases} \quad (5)$$

のように、波動関数は収縮する。ところが系  $O$  もまた量子力学によって記述されることを要求すると、理論の内部に矛盾を生じるように見える。すなわち結合量子系  $[S + O]$  の Schrödinger 発展を考えると、収縮は全く起こらず、代わりに第1の測定は  $S$  と  $O$  の間の相関を確立することになる：

$$\begin{cases} (c_1\Psi_1 + c_2\Psi_2) \otimes \Phi \rightarrow (c_1\Psi_1 \otimes \Phi_1 + c_2\Psi_2 \otimes \Phi_2); \\ A \text{ はなお2つの値 } a_1, a_2 \text{ の重ねせにある。} \end{cases} \quad (6)$$

例えば電子 ( $S$ ) のスピン上向き・下向きの状態  $\Psi_1, \Psi_2$  に応じて、電球 ( $O$ ) がオン・オフの状態  $\Phi_1, \Phi_2$  になるような測定 (相互作用) の過程を考えると、複合系は相互作用の後も依然として、[スピン上向き/光オン] と [スピン下向き/光オフ] の2状態の重ねせにある。

2つの説明 (5) と (6) は素朴には両立しない。実際、重ねせ (6) における2状態は  $O'$  が観測可能な干渉効果をもたらすため、 $O'$  による第2の測定の正しい確率分布を予言するには、式 (5) ではなく重ねせ (6) を仮定しなければならない。他方で我々は第1の測定として一般的な状況を考えているので、このときいかなる物理量  $A$  も一切決まった値  $a_1$  をとり得ないと結論しなければならない。

収縮を生じ量子事象を引き起こす“特別な”系を仮定することなく、このジレンマから脱する解決策は、量子事象は常に物理系に対して相対的であるという洞察に見出せる：量子事象  $a_1$  は  $O$  に関しては起きたのに対し、 $O'$  に関しては起きていない。別の物理系を参照することなく、単に系  $S$  の変数が値  $a_1$  をとるか否かを言うことには、意味がない。この観点は量子力学の關係的解釈 (*relational interpretation of quantum mechanics*)、あるいは単に關係的量子力学 (*relational quantum mechanics*) と呼ばれる<sup>\*34</sup>。

<sup>\*33</sup> 他方で  $\Psi$  が実在であって真に収縮することは決してないとするならば、現に観測値  $a_1, a_2, \dots$  が単一の  $\Psi$  から立ち現れる機構の込み入った説明が必要となる。仮にその説明が与えられたとしても、結局そのとき量子事象の存在論と似た状況に帰着することになる。

<sup>\*34</sup> これはある意味、相対主義の徹底である。またそれは、系  $S$  の変数はある観測者 ( $O$ ) に対して良く定義された値  $a_1$  を持つことができ、同時に別の観測者 ( $O'$ ) に対しては決まった値を持っていないという見解から帰結する、避け難い結論である。自然を理解したければ、我々の課題は自然を我々の哲学的偏見に当てはめるのではなく、むしろ我々の哲学的偏見を、我々が自然から学んだことに適合させる方法を学ぶことである。

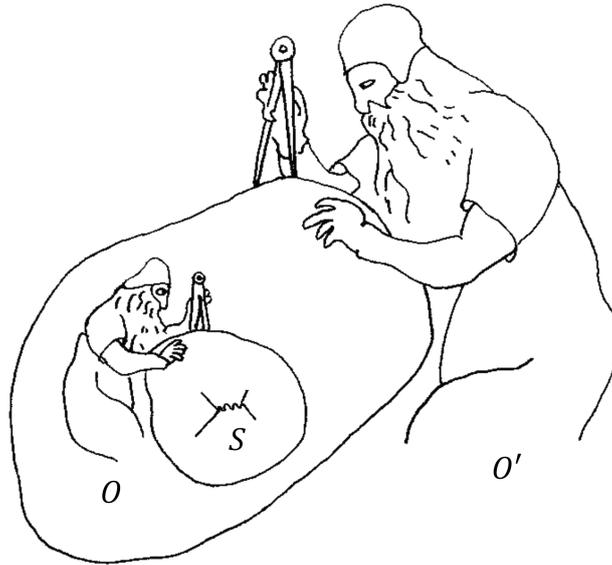


図 29 観測される観測者 [原著の図 5.1 (p.212) を基に作成]

$O$  に関する説明と  $O'$  に関する説明は互いに一致していないにも関わらず、それらを比較しても矛盾は導かれない。と言うのも、比較のために  $O'$  が電子と相互作用すると、式 (6) の右辺におけるいずれかの項、例えば [スピン上向き/光オン] 成分が選び出されるため、次いで光を測定すると、光オンが見出されるからである。つまり、まさに異なる説明の比較は物理的で量子論的な相互作用でしかあり得ないという理由で、説明の多様性は矛盾を導かない<sup>\*35</sup>。この自己無撞着性は世界の関係的な本性を強く示唆している。

ところで  $O$  による  $S$  の測定は、十分な回数繰り返せば未来の相互作用における結果 (の確率分布) を予言できるため、測定において  $O$  は  $S$  に関する“情報を持つ”と言える。他方で  $O'$  の観点からは、測定は  $O$  と  $S$  の間の相関 (式 (6)) を確立するため、Shannon による情報の定義から、やはり“ $O$  は  $S$  に関する情報を持つ”と言える。比喩的には  $O$  は  $S$  について知っているという意味で情報を持つのに対し、 $O'$  は  $O$  が  $S$  について何らかのことを知っていることを知っているという意味で情報を持つ。このように量子力学は、物理系が互いに対して持っている情報に関係していると考えられる。

最後に一般相対性理論 (GR) と量子力学 (QM) の関係主義的性格を比較する。GR では物体は背景時空ではなく他の力学的存在 (物体や場) に対して位置付けられ、それらの関係は隣接性に基づいている。他方でこれまで論じてきた QM の根底にある関係性は、物理系の相互作用に基づいている。ところが相互作用は系の隣接性を要求するのに対し、隣接性は相互作用の表れであるならば、隣接性と相互作用は表裏一体である。この最後のアイデアは多分に思弁的ではあるものの魅力的である。

### 13.3 物理の学習

そもそも物理の勉強に限らず、一般に「……べき」という主張 (当為命題) は独断論であることを免れない。したがってもっと言えば、例えば「勉強するべきだ」と言うことはできない。またそう言われたところで、や

<sup>\*35</sup> 量子力学の多くの一般的なパラドックスは、おそらく EPR (Einstein-Podolski-Rosen) の見かけのパラドックスも含め、異なる観測者の間の連絡が量子力学を破ると仮定することに起因する。

る気が起きないのは仕方がない。勉強する意志を抱くことや努力することは、それが可能な場合には神の必然性に従って自動的に達成されるのに対し、それが神の時間発展に含まれていない場合には、空から自由意志でも降って来ない限り不可能である。そして自由意志は存在しないため、それは絶対に不可能である。

逆に何らかの学問に興味があれば、周囲の無理解や誤解、敵意や同調圧力などに構わず、遠慮なく勉強すれば良い。当然のことであるが、ここで勉強とは必ずしも大学の授業を意味しない。ここでは授業と独学のどちらが効果的な学習方法かを論じるつもりはない。それ以前に、単純に独学で勉強したければ、それで構わないということである。少なくとも理論物理は独学できる学問であることを強調しておこう。要するに、物理の学習は個々人の興味の赴くまま、好きなように(そして可能ならば、伸び伸びと)やれば良い。

## 14 脳・神経科学を正しく理解するための哲学

脳・神経科学的な知見を解釈する際の哲学的な注意点について、これまでの内容の重複を厭わずにまとめる。脳・神経科学に関する詳細は以下のページを参照せよ。

<http://everything-arises-from-the-principle-of-physics.com/preamble/brain>

### 心身平行論

一般に脳は精神活動を司る臓器であると考えられている。しかし物質である脳と、我々の心や意識が関係するとはどういう意味だろうか。何故それらは異質な存在であるにも関わらず関係し得るのか。関係するとしたら、それはどのような関係か。脳の活動から意識が生まれるということだろうか。身体から切り離された水槽の中の脳は意識を持つのだろうか（ここでは脳を身体と区別した）。逆に我々の意識が脳の状態に影響を与えることはあり得るのだろうか。これら一連の問題は時に心脳問題と呼ばれる。これは形而上学に属しており、したがって経験科学によってこの問題に対する答を与えることは、控えめに言っても困難であると考えられる。

この問題に対する主な見解の1つに随伴現象説がある。これは精神状態が脳活動に随伴する、すなわち脳活動が精神を生むのに対して精神活動が脳の状態に影響を及ぼすことはないとする立場である。ここでは身体から精神への一方向的な作用のみが仮定されていることになる（図14参照）[6, p.20].

しかし本稿では、身体と精神はあくまで相互作用しないとする Spinoza の心身平行論を採用する。これによれば身体的状態と精神的状態の間には対応関係が見られるものの、身体と精神は相互作用せず、物理的な出来事と精神的な出来事は独立に進行する（図13参照）。なお、精神と身体の間には相互作用がないにも関わらず心と身体の状態に対応関係が見られるのは、それらが同一の神を表す異なる2つの側面であるからであると説明できる（Spinoza の汎神論）[3, p.91, pp.179–187] [9, pp.44–45].

心身平行論の主張するように、物理現象は物体の世界で閉じているならば、一般に人の行動の理由を本人の心情に求めることは必ずしも正しくはない。実際、例えば「悲しいから泣く」と言うのは、正確には悲しいという気持ちに対応する身体（特に脳）の状態（あるいはそれを引き起こす、また別の神経活動）が、人を泣かせるという事態を指している。もっとも、このことを「脳が悲しむと人は泣く」と言うことはできるかもしれない。ただしそれは悲しいという気持ちに対応する夥しい数の神経細胞から成る脳の状態を安直に擬人化したに過ぎない。同様に光や音の刺激が脳に表象されることを、簡単に脳が刺激を“認識する”と述べることができるかもしれない。しかし言うまでもなくこれもまた擬人的な表現であり、これを文字通りの意味にとってはならない。実際、この段階では刺激の内容は意識に昇っているとは限らず、これはむしろ無意識における水面下の機械的な処理と考えられる。また、いくら脳を伝播する生化学的な信号を追ったところで、意識に経験される音の質感（クオリア）を説明することはではないと考えられる。精神と物体の異質さは、脳活動が意識（やその内容）を生み出すと考えることを不可能にするように見える（心身平行論）。

### 自由意志の否定

人間の行動が脳によって支配され、決定されているならば、人間の自由意志は否定されると考えられる。何か失態を演じたとしても、「脳細胞の膜電位の居所が悪かった」のように言い逃れできるというわけだ（これは「虫の居所が悪かった」という言い回しのパロディーである）。しかしこれは脳・神経科学の知見により自由意

志を否定（あるいは擁護）できるという意味ではない。むしろ自由意志が存在しないことは、経験科学の知見に左右されないより根源的な事実であり、自由意志は論理の中だけで退けられるように見える。なお Spinoza 描像における自由意志を否定する論拠は、脳・神経科学的な議論よりも強力と考えられる。

■**理性 vs 感情，意識 vs 無意識** ここで改めて次のことに注意を促しておこう。すなわち自由意志が存在しない以上、

- 感情のみならず理性もまた自由意志によってコントロールすることはできない。
- 先天的・生得的な性質のみならず  
後天的に獲得される性質もまた自由意志によってコントロールすることはできない。
- 無意識の行動，反射，不随意的な反応のみならず  
意識的な行動もまた自由意志によってコントロールすることはできない。

■「頭を使う」ことはできない 脳・神経科学の知見を活かせば、人は自分の脳をより上手く使いこなせると思われるかもしれない。しかし一般に何かを理解するということは、それを必然として受け入れるということを含んでおり、対象を変えることは相容れない。実際、今の場合、脳を使う「自分」とは一体、誰のことなのだろうか。「頭を使え」と言われても、頭は自然に働くものであって、脳の支配の外側にある「自分」などあり得ない。同様に「自分との戦い」「克己」「自律」「自己管理 (self management)」といった表現が違和感を抱かれることなく当然のように用いられるけれど、「自分と戦」い、「己を克服」し、「自らを律」し、「管理」することのできる主体は見出せない。自分で自分をコントロールするというのは甚だしい自己矛盾であり、自由意志の概念を想起させる。

## 骨相学的な誤謬

脳の各部位に単純にその機能を割り当てる、所謂、骨相学的方法のみによっては、到底、脳の仕組みを理解することはできない [6, pp.38-40]。脳の機能は複数の領域の協調的な働きによってもたらされるものだからである。実際、脳の機能は膨大な数のニューロンの活動によって実現されることを考えれば、専門的な知識がなくとも、事がそう単純でないことは容易に理解される。脳の機能を右脳と左脳の2元論で片付けようとするのは、骨相学的な誤謬の典型的な例である。

## 「脳の活性化」

「脳の活性化」という表現は脳・神経科学において、神経細胞が発火することを指すのであり、「脳が元気になる」というような日常的な意味で用いられているのではない。したがって脳の活性化は常に至るところで起きていることになる。この点に注意すれば専門的な知識がなくとも、脳を活性化させると謳う脳トレを擬似科学として退けることは容易である。

脳・神経科学は未だ脳を理解するには到底及ばない。脳は1000億個ものニューロンからなる複雑系であり、その特性を少なくとも要素還元論的な立場から理解するのは、Laplaceの悪魔でもない限り不可能であろう。これを踏まえれば専門的な知識がなくとも、脳科学と称する安易な見解を擬似科学として退けることは容易である。何でも脳波で説明しようとすることも、「安易な見解」に含まれる。

## 「目的論的自然観の排除」

自然の振舞いを説明するために、自然界はある目的を満たすように働いているかのように考えられることがある。簡単な例を挙げれば以下。

- 「胃は食べ物を消化するためにある」
- 「鳥の羽は空を飛ぶためにある」
- 「植物は日の光をより多く浴びるために枝葉を伸ばす」
- 「天敵に襲われるリスクを減らすために魚は群れを作る」
- 「より強い子孫を残すために生存競争が行われる」

これらは目的論に基づく説明であり、ここで仮定されている目的は目的因と呼ばれる。しかしながら自然は、例え我々の目にそのように見えるとしても、目的を持っているとは限らず、目的を自覚しているとも限らない。本稿では機械論的な因果律しか認めない。このとき上記の例は以下のように訂正される。

- 「胃の働きにより、食べ物を消化できる」
- 「羽の働きにより鳥は空を飛べる」
- 「植物は枝葉によって日の光をより多く浴びることができる」
- 「魚は本能的に群れを作り、結果的に個々の個体が天敵に襲われるリスクは減少する」
- 「生存競争はより強い子孫を残すことに寄与する」
  - － ここでは「強い」の意味や、この主張の是非は問わない。また仮にこれが正しいとしても、このような事実命題だけから「競争するべきだ」という当為命題を導くことはできないことを注意しておく (**Hume** の法則)。

このように目的論による説明は、原因と結果が逆転していることになる。

## 認識論

人間は脳の解釈から逃れられないのだとすれば、いかにして人間は脳を理解することができるのだろうか。言い換えれば、客観的な真理は、仮にそのようなものがあるならば、いかにして主観によって捉えることができるのだろうか。このような疑問はもっともである。これには **Kant** の **Copernicus** 的転回で以て答えることができる (13.1.2 節)。

## 参考文献

- [1] 斎藤幸平, 2023, ゼロからの『資本論』, NHK 出版, 東京.
- [2] 白井聡, 2020, 武器としての「資本論」, 東洋経済新報社, 東京.
- [3] スピノザ, 2011, エティカ (工藤喜作, 斎藤博訳), 中央公論新社, 東京.
- [4] A. ベナナフ, 2022, オートメーションと労働の未来 (佐々木隆治監訳), 堀之内出版, 東京.
- [5] 宇野常寛, 2025, 庭の話, 講談社, 東京.
- [6] フロイド・E・ブルーム他, 2006, 新・脳の探検 上 脳・神経系の基本地図をたどる (中村克樹, 久保田競訳), 株式会社講談社, 東京.
- [7] エルヴィン・シュレーディンガー, 2002, わが世界観 (中村量空ら訳), 株式会社筑摩書房, 東京.
- [8] 國分功一郎, 熊谷普一郎, 2022, 〈責任〉の生成——中動態と当事者研究, 新曜社, 東京.
- [9] 河野哲也, 2009, 暴走する脳科学 哲学・倫理学からの批判的検討, 株式会社光文社, 東京.
- [10] カント, 2011, 純粹理性批判 6 (中山元訳), 株式会社光文社, 東京.
- [11] フレデリック・ルノワール, 2019, スピノザ よく生きるための哲学 (田島葉子訳), 株式会社ポプラ社, 東京, 208.
- [12] 上野修, 2012, スピノザの世界——神あるいは自然, 株式会社講談社, 東京.
- [13] 小坂井敏晶, 2009, 責任という虚構, 東京大学出版会, 東京, 157.
- [14] 國分功一郎, 2019, 中動態の世界——意志と責任の考古学, 株式会社医学書院, 東京.
- [15] 大澤真幸, 2018, 自由という牢獄——責任・公共性・資本主義, 株式会社岩波書店, 東京.
- [16] 山口尚, 2021, 日本哲学の最前線, 株式会社講談社, 東京.
- [17] ニーチェ, 2009, 善悪の彼岸 (木場深定訳), 株式会社岩波書店, 東京.
- [18] グレッグ・イーガン, 2010, しあわせの理由 (山岸真編・訳), 株式会社早川書房, 東京.
- [19] 内田樹, 2013, 子どもは判ってくれない, 株式会社文藝春秋, 東京.
- [20] 山口尚「〈特集:ポップ・フィロソフィー〉宿命論と人生の意味 - 『ジョジョの奇妙な冒険』 第五部エピソードの解釈」, 2012 (最終閲覧日: 2020 年 8 月 12 日) [https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/173162/1/prospectus\\_15\\_1.pdf](https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/173162/1/prospectus_15_1.pdf)
- [21] ファインマンほか, 2014, ファインマン物理学 I (坪井忠二訳), 株式会社岩波書店, 東京, 242.
- [22] テッド・チャン, 2010, あなたの人生の物語 (訳: 浅倉久志, 他), 株式会社早川書房, 東京.
- [23] カート・ヴォネガット・ジュニア, 2010, スローターハウス 5 (伊藤典夫訳), 株式会社早川書房, 東京, 117-118.
- [24] 筒井泉, 2011, 量子力学の反常識と素粒子の自由意志, 株式会社岩波書店, 東京, 84.
- [25] ファインマンほか, 2012, ファインマン物理学 II (富山小太郎訳), 株式会社岩波書店, 東京, 178-179.
- [26] 二村ヒトシ, 2017, なぜあなたは「愛してくれない人」を好きになるのか, 文庫ぎんが堂, 270.
- [27] 千葉雅也, 2022, 現代思想入門, 株式会社講談社, 東京.
- [28] Rovelli, C. (2010) *Quantum Gravity*. Cambridge University Press, Cambridge.
- [29] 石原孝二, 2013, 当事者研究の研究, 株式会社医学書院, 東京.
- [30] マイケル・サンデル, 2021, 実力も運のうち 能力主義は正義か? (鬼澤忍訳), 株式会社早川書房, 東京.
- [31] 内田樹, 2020, コモンの再生, 株式会社 文藝春秋, 東京.
- [32] 斎藤幸平, 松本卓也ほか, 2023, コモンの「自治」論, 株式会社集英社, 東京.

- [33] 山本義隆, 2024, 物理学の誕生——山本義隆自選論集 I, 株式会社筑摩書房, 東京.
- [34] ニーチェ, 2012, ツアラトウストラ (上)(丘沢静也訳), 株式会社光文社.
- [35] 福岡伸一, 2010, 生物と無生物のあいだ, 講談社現代新書, 東京, 152–168.
- [36] 岸見一郎, 2018, NHK「100分 de 名著」ブックス アドラー 人生の意味の心理学～変わらない? 変わりたくない?, NHK 出版, 東京.
- [37] 田口ランディ, 2001, 根をもつこと, 翼をもつこと, 株式会社晶文社, 東京.
- [38] 國分功一郎, 2016, 民主主義を直感するために, 株式会社晶文社, 東京.
- [39] 内田樹, 2004, 図書館には人がいないほうがいい(朴東燮編訳), 株式会社アルテスパブリッシング, 東京.
- [40] 神川貴実彦, 2016, コンサルティングの基本, 株式会社日本実業出版社, 東京.
- [41] 國分功一郎, 2018, NHK 100分 de 名著 スピノザ エチカ「自由」に生きるとは何か, NHK 出版, 東京.
- [42] 國分功一郎, 2012, 暇と退屈の倫理学, 株式会社朝日出版社, 東京.
- [43] ミヒャエル・エンデ, 2017, 自由の牢獄(田村都志夫訳), 株式会社岩波書店, 東京.
- [44] 内田樹, 2020, コモンの再生, 株式会社 文藝春秋, 東京.
- [45] S.Okasha, 2011, 1冊でわかる 科学哲学(廣瀬覚訳), 株式会社岩波書店, 東京.
- [46] 須田朗, 2006, もう少し知りたい人のための「ソフィーの世界」哲学ガイド, 日本放送出版協会, 東京.
- [47] ベンジャミン・リベット, 2010, マインドタイム(下條信輔訳), 株式会社岩波書店, 東京, 15, 39, 82–83, 92, 105–106, 111–115, 125–129, 161, 165.
- [48] フロイト, 2019, 精神分析学入門(懸田克躬訳), 中央公論新社, 東京, 33.
- [49] J.J.Sakurai, 2007, 現代の量子力学(上)(桜井明夫訳), 株式会社吉岡書店, 京都, 148–166.
- [50] 山本義隆, 中村孔一, 2013, 朝倉物理学大系 1 解析力学 I, 株式会社朝倉書店, 東京, 104–105.
- [51] エリ・デ・ランダウ, イェ・エム・リフシッツ, 2013, ランダウ=リフシッツ理論物理学教程 力学(増訂第3版)(広重徹, 水戸巖訳), 東京図書株式会社, 東京, 2–4.
- [52] 江沢洋, 中村孔一, 山本義隆, 2022, 演習詳解 力学 [第2版], 株式会社 筑摩書房, 東京.
- [53] エリ・デ・ランダウ, イェ・エム・リフシッツ, 2015, ランダウ=リフシッツ理論物理学教程 場の古典論(原書第6版)(恒藤敏彦, 広重徹訳), 東京図書株式会社, 東京.
- [54] B. ツヴィーバッハ, 2013, 初級講座 弦理論《基礎編》(樺沢宇紀訳), 丸善プラネット株式会社, 東京.